

---

# もしも、平沢唯の性格が、あの消失の人みたいだったらの世界

サッキー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もしも、平沢唯の性格が、あの消失の人みたいだったらの世界

### 【Nコード】

N1033T

### 【作者名】

サッキー

### 【あらすじ】

平沢唯の性格をあのある小説に登場する宇宙人の消失バージョンにしてみた。

桜が丘高校に入学した平沢唯。内気で恥ずかしがり屋で、読書好きな少女。幼馴染の真鍋和以外、友達が居ない。和に、高校を卒業するまで私以外に友達を作るか、読書の他に新しい事を始めなさいと言われる、どうすればいいのか、悩み過ごしていく。同じく1年生の田井中律は幼馴染と一緒に入学した秋山澪と共に軽音楽部の見学に

行こうとするが、部員が前年度末に全員卒業してしまつたため、4月中に新入部員が4人集まらなければ廃部になると聞かされる。合唱部の見学に来るつもりで間違えて軽音楽部に来てしまつた1年生の琴吹紬は、律と澪の掛け合いを聞いているうちに彼女達が気に入り、入部することに同意する。3人は部の存続のため、あと1人を入部させるべく勧誘活動を開始した。

ひよんな所で4人は出会い、音楽と高校生活を送る。『けいおん!』  
の  
もう一つの世界

## 第1話 新しい事！（前書き）

この話に出て来る唯は、メガネを掛けています。イヤな人は……ご遠慮下さい

## 第1話 新しい事！

にじ

ジリリリリ

唯「うん…。」

鳴り響く目覚ましに、唯が目覚めます。

唯「ふわあ〜。」

アクビを掻き、目をクシクシと？いいた。しばらく、ボ〜っとしていたが、少しずつ頭の整理をした。

4

唯「ああ…そうか…今日から高校生か。」

唯はそう呟くと、ベッドの傍に置いてあるフレームが白色のメガネを掛けた。

そして、壁に掛けられている埃一つない綺麗な制服に着替えた。着替え終わると、一階に下りた。

憂「あっお姉ちゃん！おはよう。」

中学の制服を着た妹の憂が、台所で朝食を作っていた。

唯「おはよう憂。」

憂「わあくお姉ちゃんの制服姿、可愛い。」

唯「あ、ありがとう。」

憂「いよいよ、今日から高校生だね。」

唯「うっ…うん。」

唯の顔は浮かない顔で返事をした。

憂「どうしたの？」

唯「…不安なの…。」

憂「不安？」

唯「私の通う学校、女子校だけど…人と接するのが苦手だから…や  
つていけるのが…。」

憂「和ちゃんと一緒の学校じゃない。」

唯「でも違うクラスだったら…。」

憂「その時は、新しい友達を作ればいいじゃない。和ちゃんだって、

それを望んでいるよ。」

唯「無理無理…恥ずかしいモン。」

憂「また、本だけ読んでいるだけの生活を過ごすつもりなの？」

唯「……。」

憂「だったら、文芸部に入ったら？きっと仲良くなれるよ。」

唯「文芸部…うん…考えてみる。」

朝食を済ませ、学校へ向かった。

（通学路）

和「おはよう唯。」

唯「和ちゃん！」

唯は、幼馴染の真鍋和と出会って、真っ先に和の袖に弱弱しく掴んだ。

和「アラアラ…高校生になっても変わらないのね。」

唯「うう…そんな事…言わないで。」

袖を掴む手が、震えていた。

和「うふふ。ゴメンゴメン。」

唯「ふわあ〜。」

和は優しく、唯の頭を撫でた。唯は和の暖かい手に撫でられ、安心して、手の震えも止まった。

和「さっ行きましょ。」

唯「うん。」

しばらく、歩いていると、同じ制服を着た人がチラホラ増えてきた。

和「ほら、唯。私達と同じ学校の人よ。もしかしたら、同じクラスになるかも。」

唯「うっ！／＼／＼」

唯は、視線を下に向けていた。顔も若干赤くなっていた。

和「全く…唯！私の顔を見なさい。」

唯「えっ！」

和「いいから、私の顔を見なさい！」

唯「……。」

恐る恐る顔を上げ、和の顔を見た……が、視線が泳いでいた。

和「唯……私の顔を見なさい。」

唯「……無理／＼／」

和「どうして？」

唯「……は、恥ずかしいモン／＼／」

和「ハア……高校になってもそんな調子で行くつもり？」

唯「憂にも、同じ事言われたよ。」

和「誰だって、そう思わよ。いい、唯？高校を卒業するまで私以外の友達を増やすか、何か新しい事を始めなさい！」

唯「ええ！」

和「読書ばかりしていても、友達なんて出来ないわよ。いいわね？」

唯「…う、うん。」

和の言葉に、一段と気持ちがズーンと重くなり、不安が増していく  
唯であった。

唯「（…何を始めたらいいんだろっ？）」

そう呟き、和と共に学校へ入っていた。

## 第1話 新しい事！（後書き）

さあ〜て…次回のもしゆいは？（もしも、平沢唯の性格が、あの消  
失の人みたいだったらの世界の略）

唯「ゆゆゆゆゆ、唯でで、すすす…えっと…その…どどど、ど  
うしよう。」

（カンペ）「世間話とか、好きな本とかでいいから話して。後落ち  
着いて」

唯「えっと…その…5月に…なりま…したね。暖かいですね……。」

10

（カンペ）「ボケて」

唯「……ふ、ふ、ふっとんが……」

和「唯！もういいわよ。」

唯「…ゴメン。」

和「サブタイトルくらい、ちゃんとやりなさい。」

唯「じ、じ、次回もしゆい、第12話。」

和「違う第2話よ。やり直し」

唯「……//」

Take 2

唯「じ、次回もしゆい、第2話 窓辺の少女！です。み、見て下さい。」

は「いい OKです。」

唯「ふゆ〜//」

和「お疲れ様。」ナデナデ

## 第2話 窓辺の少女！

クラス表を見ると、唯と和は同じクラスになった。唯は胸を撫でおろした。

だが、和の予想通り唯はクラスに馴染めず、一人でポツンと本を読んでいた。

クラスの子達も、馴染ませようと話を掛ける。

だが

何の本を読んでいるの？と聞かれても

唯は、何も喋らず本の表紙を見せるだけ。何か話を掛けても本で顔を隠してしまう始末

唯の声を聞く者は、あまりいない。唯の声を聞いた者は良い事が起きるとも言われるようになっていた。

唯はクラスで立派な浮いた存在になっていた。

入学して一週間が経っていた

〈 昼休みの教室 〉

ト  
ト  
ト

唯「……。」

唯は、一冊の本を抱きしめて教室を出ようとした。その時、クラス  
の女子が唯に話を掛ける。

女子A「平沢さん。ドコに行くの?」

唯「ヒッ!……と、図書、室ノノノ」

ボソツと言い、教室を出て行った。

女子B「すっごーい。良く喋らせたわね。」

女子A「私も正直驚いた。」

女子B「勿体ないわよね平沢さん。結構、可愛いのに恥ずかしがり  
屋なんて。」

女子A「ねえ…でも、可愛い。」

そんな女子のやり取りを見ていた人が居た。

和「ハア〜。」

唯の幼馴染の真鍋和。デカイため息を吐いた。

和「…ヤツパリ、こうなちゃったか…何で、あんなに恥ずかしが  
り屋なのかしら？幼稚園の頃から、全然変わっていない。どうした  
らいいのかしら？少しでも成長して貰おうとああ言っただけ…。」

和の最大の悩み。

〜廊下〜

唯「……………// // //」

震える手で、本をギュッと抱きしめながら、廊下を歩いていた。

唯「イキナリ、話を掛けて来るなんて…// //」

さっきの事を思い出していた。

唯「あの場合、ああ言えばよかったのかな？…でも…あれくらいしか…」

唯は考え過ぎていたせいで、周りが良く見ていなかった。

なので…

ゴッソ！

唯「あう！」

漣「痛！」

曲がり角で、人とぶつかってしまった。唯は尻餅をついてしまった。

漣「あっごめん！大丈夫？」

唯「だ、だ、大丈夫で…す！」

その人は、黒髪で長身の少女だった。その少女が、唯に手を伸ばした。

透「立てる？」

唯「は、はい。」

唯は、少女の手を掴み腰を上げた。

透「ゴメンね余所見しちゃって。怪我していない？」

唯「あ、ありません！すいませんでした！／／／／／」

タタタタタッ

唯は走り去って行った。

透「あつちよつと!」

ゴツン

〈図書室〉

唯「ハアハア…逃げてきちゃった。」

ちゃんと、謝れなかった事に、罪悪感を感じていた。

唯「…今度会ったら、ちゃんと謝ろう…謝れるかな?」

呟きながら、持っていた本を返却し、本を借りようと本棚へ向かった。

唯「あの本面白そう。」

面白そうな本があり、本を取ろうとした…が

唯「うん…届かない…。」

背伸びをしても届かない所に本があった。

唯「うん…もうちょっと…。」

ひよい

唯「あっ!」

透「コレで良いの?」

唯「さっきの人!」

透「はいどひげ。」

唯「あ、ありがとう…」

漣「どういたしまして。」

唯「…あの…さっきは…すいま…せんでした。」

漣「さっき…ああ良いよ別に。本好きなの？」

唯「はい。」

漣「その本、恋愛小説みただけど…そういうジャンルが好きなの？」

唯「読書が、好きだけで…ジャンルは…。」

漣「そうなんだ。」

唯「はい。…あの席に着いても…いいでしょうか？読みたいので…。」

漣「あっゴメン。」

唯は、窓側の席に座り本を開いた。漣も適当に本を取り出し、唯の向かいの席に座った。

唯「（何で…向かいの席に？）／＼／＼」

唯は見られているみたいで、全然本の内容が頭に入らなかった。なるべくうつ、目が合わない様に、本を立てて顔を隠した。お陰で、本に集中する事が出来、内容が入って来た。

漣「（こうマジマジ見ると…この子、結構可愛いな。子供のような顔立ちで、メガネ。…あっ顔を隠した！フッフ…恥ずかしがり屋か？…私と同じ…それ以上かも）」

唯の姿に漣は思わず、目を奪われた。窓から静かな風が吹き、唯の髪がフワッと上がると唯はクシクシと髪を掻いたり、メガネのズレを直したりする姿が、何とも言えなかった。

漣「（窓辺の少女…良い詩が出来そう）」

漣がそう呟いていると

ガラガラ

律「漣！」

カチューシャをした少女が図書室に飛び込んできた。

## 第2話 窓辺の少女！（後書き）

さあ〜て…次回のもしゆいは？

和「和です。メガネのズレ直す時、私はメガネの真ん中を人差し指でクイツと上げます。唯は右の蝶番せみふたがわいをグイツと上げて直しています。ちなみに、作者は中指でメガネの真ん中をグイツと上げて直しています。アナタは、ドコで、メガネのズレを直しますか？」

和「次回、もしゆい第3話 動揺・勧誘・二人！です。お楽しみに。

┌

唯「(…ヤッパリ…和ちゃんは凄いな)」

### 第3話 動揺・勧誘・二人！（前書き）

今回の話は、とある小説のマネです。その所のツッコミはなしです

### 第3話 動揺・勧誘・二人！

漣「律どうした？」

律「次の時間は英語なんだけど教えてくれ！次指される可能性があるんだよ。」

漣「タクっしょうがないな。」

漣が立ち上がると

漣「じゃあね。」

唯「！」

唯に言い、図書室をでた。

律「なあ漣。知り合い？」

遷「ちょっとな。」

放課後

和「唯、帰ろう。」

唯「部活。」

和「部活って…唯だけじゃない。一ヶ月そのままじゃ。」

唯「その時は、その時。」

唯は、教室を飛び出した。

和「唯！……唯も唯なりにやっているのね…嬉しいような悲しいような。」

く廊下

唯「……。」

唯にとって、部室まで行くのが、試練のように感じていた。図書室までの距離はさほど掛らないが。部室までは、図書室と比べて遠い。なので、たくさんの人前を通らなくてはならない御。人見知りの激しい唯は、いつも和と行動を共にしているのだが、一人になると不安で仕方がない。

唯「ココを曲がったら。」

その時

透「あつ昼休みの！」

漣と再び出会った。

漣「図書室…じゃないようだな。方向が違っし。」

唯「ぶ、部活。」

漣「部活？部活に入っているのか？」

唯「……。」「こくり

数ミリ首を縦に振った。

漣「何部？」

唯「文芸部。」

漣「へ〜ピッタリだな。」

唯「ありがとうございます。」「ごい…ます。」

漣「部員って何人いるんだ？」

唯「わ、私…だけです。」

漣「えっ？」

唯「前までいた人達は、全員卒業しちゃったみたいんです。」

漣「そうなんだ。」

唯「はい。」

漣「…私も行ってもいいか？」

唯「えっ？」

漣「迷惑なら、いいけど。」

唯「いいえ。迷惑…じゃ、ありません。」

透「そっか、じゃ行こうか。」

唯「はい。」

文芸部と書かれたドアを開けた。

透「ここが。」

真ん中に、長テーブルがあって、はじに本棚が一つあるだけ。

唯「どつぞ。」

唯は澄子からパイプ椅子を出した。

透「ありがとう。」

唯は隅っこにあるパイプ椅子を出し、本棚から本を出し、読み始めた。それからは、全然  
微動だにせず、読んでいた。ページを捲るぐらいしか動かなかった。

澪「…そう言えば、名前聞いていなかったな。」

唯「ふえ！／＼／＼」

澪「名前は？」

唯「ひ、平沢…唯…す／＼／＼／」

澪「秋山澪。宜しく。」

唯「……。」

数ミリ縦に振った。

漣「平沢さんは、本が好きなのか？」

唯「はい。小さい頃から、いつも読んでいました。お母さんが夜寝る前に読んでくれたけど、面白くなって全然眠れなくなって、お母さんが先に眠っちゃった。でも私はまだまだ足りなくて、何冊も読んじゃう。不思議な世界に迷い込んだ女の子の話とか、大きな怪物と戦う男の子の話とか。いつか私もこんな体験がしたいなって思う。だから、よく人からは風変わりな奴だって言われちゃう。」

漣「ウフフフ。」

唯「えっ？」

漣「一言二言しか喋らないのに、本の事になると、そんな風に喋れるのだな？」

唯「あわわわ／＼／＼」

恥ずかしさのあまり、本で顔を隠した。

漣「ゴメン、ゴメン。」

唯「ム／＼／＼」

漣「自分で本を書いたりしないの？」

唯「…書いて…います。」

漣「へ／＼どんなの？見せて。」

唯「だ、駄目です…恥ずかしい。」

漣「おいおい。それじゃ、書いている意味がないだろ。ココにある本の作者だって、恥ずかしいと思ったかもしれないさ。でもさ、読んで欲しいという気持ちがあったから、ココにあるんだろ？」

唯「…で、出来たら…見せます…今は…。」

漣「うん。楽しみにしておくよ。んじゃ、私はそろそろ。」

漣が扉の前まで来たの時

唯「あの。」

漣「うん？」

唯「良かったら…コレ。」

唯は震える手で、白紙の入部届けを差し出した。

唯「入部して下さいとは、言いません。入りたい部活があったら、そちらを優先して下さい。でも、一応…。」

漣「考えておくよ。」

漣は、入部届けを受け取り、部室を出た。

外から運動部の声しかない、文芸部部室。唯は力が踏抜けたように、椅子に座り俯いた。

唯「…入部届け…渡しちゃった…秋山さん…入ってくれるかな…で  
も…私としても。」

### 第3話 動揺・勧誘・二人！（後書き）

さあ、次回のもしゆいは？

漣「秋山漣です。小さい頃シンデレラに憧れていました。継母と義理の姉に虐められても決して希望を捨てずにいれば、必ず幸せを掴むと言う所に感動しました。そう言えば、知っていますか？原作のシンデレラでは、ガラスの靴ではなく、毛皮で出来た靴らしいですよ。」

透「次回もしゆい第4話 田井中律！見て下さい。」



唯「ちなみに、原作のシンデレラでは魔法使いは登場せず、鳥がドレスを運んできます。最後にその鳥が、シンデレラの継母と義理の姉の目を口ばしで突っついて、目を潰したらしいですよ。」

漣「聞こえない！聞こえない！聞こえない！聞こえない！聞こえない！聞こえない！聞こえない！聞こえない！聞こえない！聞こえない！聞こえない！聞こえない！聞こえない！聞こえない！聞こえない！聞こえない！聞こえない！聞こえない！……」

唯「アレ？」

#### 第4話 田井中律！

「透の自宅」

透「……………」

透は、入部届けとにらめっこしていた。

透「…どうしよう。別に入りたい部活がある訳じゃないけど…せっかく貰ったんだし

…でもな、あの状態じゃ、廃部になる確率は高いだろうな。平沢さんの性格からして勧誘活動とかはしていないだろうな…まあ、私も人前で何かするのは苦手だから、言えないけど…どうせ、二人だけでも本を読むだけだから、図書館室でも出来るし…平沢さんのが書いている話とか聞きたいし。」

透はペンを走らせた。

透「よし、コレでよし。」

入部届け

秋山 澪 入部する部活動 文芸部

～次の日～

律「漣——！」

漣「律？どうした？」

律「クラブ見学行こうぜ。」

漣「クラブ見学？」

律「軽音部だよ。軽音部。」

漣「私、文芸部にはいるつもりだけど。」

律「文芸部？」

漣「もう入部届けも書いたし。」

律「……。」「

ブリッ

律は入部届けを破った。

漣「だああああ！何するんだよ！？」

律「ホラッ行こうぜ！」

漣「おい！」

（職員室）

律「へっ廃部した？」

さわ子「正確に言えば、廃部寸前ね。前年度の人達が全員卒業しちゃったから、部員は0なの。」

律「だから、誰も居なかったのか。」

さわ子「まあ、4月中に4人集まれば、大丈夫だけど。」

唯が、ボソッと、さわ子に声を掛けて来た

唯「せ、先生……。」

さわ子「アラッ平沢さん！」

唯「その……次の授業の……。」

さわ子「ああはいはい。んじゃ、このプリントを音楽室に運んで。」

唯「はい。……あっ！」

漣「平沢さん！」

唯「……。」

さわ子「それじゃ、頑張ってる軽音部。」

唯とさわ子は、職員室を出た。

律「ハア〜。」

漣「廃部じゃ仕方ないな。私は、文芸部に……」

一刻も早く立ち去ろうとした……が、律が漣の肩を掴んだ。

律「誰もいない……と言う事は、自動的に私が部長に。」

漣「……………」

逃げられなかった。

漣「……………」平沢さん……少し待っていて。」

#### 第4話 田井中律！（後書き）

さあさて、次回のもしゆいは？

律「オッス皆のアイドルのりっちゃんだ。皆聞いてくれ。ついに、宇宙人と全面戦争が始まっちゃった。このままじゃ地球の皆が、殺されちゃう。皆オラに、元気を…」



律「うっ。」「

透「嘘予告するな。サブタイトルぐらいは、ちゃんとやれ」

律「次回…もしゆい。第5話 説得!…皆絶対見てくれよな。」



唯「…今回は、セリフ少なくて良かった…でも…次回は多いな…。」

## 第5話 説得！

〔文芸部〕

唯「……」。サラサラ

唯は、一冊のノートにペンを走らせていた。

唯「…とある少女がいた…少女は人一倍内気で、人一倍気が弱くて、人一倍恥ずかしがり屋であった。だから、友人も出来ずにいた。イヤ唯一の友達が居た。…それは、本であった。少女は本を読む事しか能が無かった。だが…少女にもちゃんとした願望がある。

それは、この性格を直す事と、友達が欲しい。それが、少女の願望。

┌



唯「そして…私の願望…」。

〜音楽室〜

漣「んで、どうするんだ？」

律「入部希望者を待つ。」

透「待つの？」

律「待つ！」

.....

・ ・ ・ ・ ・  
全く現れる気配が無かった。

漣「…帰ろうか？」

漣が優しく言った。

律「ウウ…。」

律も半分諦めかけていた。っとその時

ガチャ

絢「あのすいません。見学したいんですけど。」

律「おお！」

律は勢い良く立ち上がり、手をギュツとつかんだ。

律「軽音部の？」

紬「いえ、合唱部の…」

律「軽音部に入りになよ。お願いします。後悔はさせません。」

ドゴーーーーー

漣「無理矢理引き込むな！全く、私は帰るからな。」

漣が呆れて帰ろうとした時

律「漣！あの時の約束は、ウソだったのかよ！」

漣「！」

律「私がドラムで、漣がベースで。高校に入学したら、一緒にバンドやるって言ったじゃない。二人でライブを見に行ったあの時の約束を忘れたのか！」

漣「話を盛るな。」

律「アレ？」

漣「お前が持って来たライブのDVDを見て…。」

律『なあバンド組もうぜ、バンド！』

漣「つて。」

律「漣もやるって言ったじゃん。」

漣「そりゃ…そうだけど。」

律「んで、プロになったら、ギヤラは7…3で。」

漣「ねっ造するな。」

そんな二人を見た紬は

紬「ウフフフ。」

漣「律」？」

紬「なんだか、楽しそうな部ですね。キーボードくらいしか、出来  
ませんけどお役に立てれば。」

律「ありがとうー！えっと…名前は何？」

紬「琴吹紬です。」

律「ドラムの田井中律で、ベースの秋山漣。」

漣「（…私もう数に入っているんだ）」

律「ようし、後ギターだけだ！」

漣「…ハア」。

～文芸部～

唯「…出来た…でも、秋山さんに見せるの…恥ずかしいな…でも約束したし…。」

キーンコーンカーンコーン

唯「下校時間！…帰ろう。」



**第5話 説得！（後書き）**

さあ、て次回のもしゆいは？

紬「琴吹紬です。おいしい紅茶の淹れ方レクチャーします。水は軟水用意して下さい。硬水では風味が損ねてしまいますので、ご注意ください。リーフをカップ1杯につき2g

（ティースプーン1杯分）ポットに入れます。そしてお湯を注いで3分待ちます。短いと紅茶の命であるポリフェノール複合体タンインが出て、長すぎると逆に風味を損ねてしまいます。後は好きなように、ミルクや砂糖を加えて、ケーキを用意して皆で楽しく頂いて下さい。」



細「次回もしゆい。第6話 必要とされている者と必要とされていない者！です。お楽しみに」



唯「…あつ美味しい。」

第6話 必要とされている者と必要とされていない者！

〔文芸部〕

唯「……。」「ペラッ

唯は窓際で分厚本を膝に置いて読んでいた。

コンコン

唯「！」「

？「失礼します。」

唯「……。？」「

？「文芸部の方ですね？」

唯「……。はい／＼／」

現れたのは、教師だった。それから、数分間その人話を聞かされた。

教師「よろしいですね？」

唯「…はい。」

教師は、伝える事を伝え終わると、部室を出て行った。

唯「……。」

椅子に座るが、さっきの本を読む気になれなくなっていた。気をおとしていたのであった。そこへ

ガチャ

漣「平沢さん。」

唯「秋山さん！」

漣「…アレ？どうしたの元気がないみたいだけど？」

唯「…い、いえ！な、何でも…ありません。」

漣「…そうか。」

唯「…えっと…何のようでしょうか？」

漣「ああ…実は、平沢さんに、謝らないといけない事があって。」

唯「謝る事？」

漣は、話した。入部届けを出そうとしたが、律に破られ、無理矢理軽音部入れさせられ、後一人入部したら、抜ける事が出来なくなり、文芸部には入れない事を。今までの経緯を話した。

漣「ほんとうに、ゴメンネ。」

唯「いいえ、いいんですよ。」

漣「全く律ときたら、人の話も聞かず、巻き込んで。」

唯「…良いんじゃないですか。…秋山さんは、その律さんって言う人に必要とされているんですから。」

漣「必要とされている?」

唯「はい。秋山さんと一緒にバンドがやりたい。私がやるバンドには、秋山さんが必要だっと思っっているから、手放したくなかったんですよ。」

漣「平沢さん…。」

唯「だから…諦めずにもう一人見つけて、軽音部を継続させて下さい…私も秋山さんの演奏を見てみたいです。」

漣「そんな…恥ずかしいし。」

唯「律さんは、知っているんですか?秋山さんが、恥ずかしがり屋だっただけのこと?」

漣「まあ一応。」

唯「…それでも必要とされているんですよ…私と違って。」

澪「えっ？」

唯「私は、本を読むぐらいしかありませんから…一度も誰からも必要とされた事がありません。でも秋山さんは、違う。信頼…出来るから…。」

澪「……。」

唯「！」

ムニユ

澪は、唯の頬をつねった。

澪「平沢さん！…そんな事言っな！」

唯「ふえ？／＼／＼／」

透「誰も必要とされていない人なんて…絶対にいない。」

唯「……。」

透「平沢さんも必要としている人が居るぞ。」



透「私が平沢さんを必要としている。」

唯「…秋山さん！／／／／」

漣「好きな本の話とか、自分が書いた物語とか私は聞きたい。だから、私は平沢さんを必要としているんだぞ。」

唯「……。」

漣「だから…もう一度と、そんな事言っなよ。」

唯「…はい。」

漣「よし。「ナデナデ

唯「！／／／／」

和と憂にしか、頭を撫でられた事が無かった唯。それが今漣に撫でられている。

唯「秋山さん！／／／／」

漣「元気出た？」

唯「…はい。」

漣「よし…んじゃ、また来るね。」

漣は部屋を出て行った。

唯「あつ…伝えるのを忘れた。」

唯はポケットから、一枚の紙を出した。





## 部室明け渡し通告

この度文芸部は、規定数を達せず及び勧誘活動をせずにおりましたので、継続意識が無いと見なされ、廃部と決定しました、つきましては、5日以内に部室を明け渡せる状態にして下さい。

唯「……。この紙を渡された時、また必要とされていないかと思っ  
ていた……。でも、秋山さんが私を必要と言ってくれた……。ここが無く  
なっても、図書室に来てくれるよね?」

その紙に、ポタリと一粒の水が落ちた。ドコから水が落ちたのか?  
その水は……………

**第6話 必要とされている者と必要とされていない者！（後書き）**

さあさて…次回のもしゆいは？

憂「憂です。今日のお姉ちゃんも可愛かった。お姉ちゃんは、本当にかわいすぎて困っちゃうくらいです。どのくらい、可愛いかと言  
うと…。」

(カンペ) 時間がありません。サブタイトルお願いします。

憂「えっ残念。いつか、また教えます。」



憂「次回もしゆい。第7話 準備室！です。お姉ちゃんの活躍に期待して下さい。」





唯「憂……恥ずかしいよ／＼／＼／＼／＼」

## 第7話 準備室！

唯「えっと…音楽室の準備室は…この階段を上がった所だよね…。」

唯は、音楽室の準備室に向かっていた。それには、訳があった

文芸部の部室を明け渡すと言う事は、文芸部にある本も撤去しなければならぬ。

本は、古い本がバツカリなので、図書室に置くに訳にもいかない。貰っていいのかと聞いたら、許可が下りたので、本を全て持ち帰ろうとした。だが、量がかなりあるので、興味のある本を持って行くと思うので、本を入れる段ボールが必要だった。ドコかに、段ボールが無いかと聞いたら、音楽室の隣にある準備室の倉庫にたくさんあるつと言っていたので、向かっていた。

そこが、軽音部の部室だとも知らずに…

唯「えっと…音楽室の…隣…。」

準備室のドアの前に立ちつくしている

唯「…だれも…居ないよね？／／／」

誰かが居たら、ちゃんと説明できるか、不安だった。

唯「すうくはあく。」

少し深呼吸し、ドアを叩いた。

唯「し、失礼します／／／」

おそるおそるドアを開け、中に入った。

唯「…だ、誰もいない…良かった／／／」ホッ

中に入ると、準備室を見回した。すると、一つの棚が目に入った。

唯「何で…ティーカップがあるんだろう？……茶道部なのかな？」

そう思ったが、スグに撤回した。

唯「茶道部なら、和室でやるし、湯のみを使うよね。…それに、ドラムセットとキーボードがあるから、音楽やる所だよね…でも、なんであるんだろう?。」

では、なぜティーセットがあるのか、いくら考えても疑問が拭えない。コレ以上詮索するのは、終わりにして奥の扉へ向かった。

唯「ココだよね倉庫?。」

唯がそくつとドアを開けた

唯「うっゴホッゴホッ!。」

倉庫の中は、ホコリだらけだった。

唯「うっホコリっばい…早く出よう。」

倉庫の隅に折りたたまれている段ボールを2つほど、取り出した。

唯「？」

一冊の本が床に落ちていた。それは、読んだことの無い本だった。

唯「……持つて行くのは、良くないよね……でも読みたいな……。それほど、分厚くないし、ココで読んでから行こう。」

唯は倉庫から出ると、椅子を窓際に置き座った。

唯「机や椅子が置かれているなんて……ココ自体も倉庫なのかな？」

唯はそう思いながら、本に付いたホコリを払い落とし、本を読み始めた。

それから、  
数時間後

唯「…面白かった。…一時間間くらいかな？早く本を戻して、段ボールに本を入れよう。」

準備室を出ようとした…その時

律「ハア〜疲れた。」

紬「お疲れ様です。」

透「…恥ずかしかった。」

唯「！」

4人が、出会った。

第7話 準備室！（後書き）

さあ〜て…次回のもしゆいは？

唯「ゆ…唯です…。」

和「（唯、リベンジよ頑張って）」「カンペ

唯「…えっと…雨が最近降り…ますね…まだ4月…じゃなくて！5  
月なのに、憂鬱な気分になりますね…雨に濡れて、風邪をひ、ひか  
ないで、下さい…／＼／＼／＼」ボソボソ



唯「じ、次回…もしゆい…第…第…第…」

和「(8話)「カンペ

唯「第8話　そして、軽音部へ！です…み、見てくだ…さい…。」

唯「…今回セリフ多かったよ…／＼／＼」

憂「お姉ちゃん、可愛かったよ。」

唯「か、かわわわわ／＼／＼」ボンッ

憂「あっ赤くなった。可愛い。」

唯「じゅじゅ…／／／」

## 第8話　そして軽音部へ！

突然現れた3人に、唯は思わず立ち上がった。

漣「平沢さん！…どうして、ここに？」

紬「平沢さんって…この人が、漣ちゃんが言っていた？」

律「文芸部の子か？」

漣「ああ。」

唯「えっと…その…あの…え、えっと…／＼／＼／」

唯が何か言おうとしているが、モジモジして言葉が出て来ない。じれったくなつた律が

律「だあー！何だよ！言いたい事があるなら、ハッキリ言えよ！」

唯「ふ、ふえ！」ビクッ

律に怯えてしまい

唯「……。」グズッ

涙目になってしまった。

漣「なに泣かしているんだ！」

ゴッソ

律「あう……私も泣きそう……。」

そんな言葉を無視し

漣「よしよし……怖くないからな……アイツは私が懲らしめたから……泣くな……。」「ナデナデ

子供をあやすように、唯の頭を撫でた。

唯「……／／／／」

恥ずかしさのあまり、数ミリくらいしか首を縦に振れなかった。

澪「よしよし、分かってくれたか。」

数ミリでも見逃さなかった。

紬「…ほあゝ何て微笑ましい絵／／／／」

唯と澪のやり取りにくぎ付けになっていた。

律「ムギゝ私も慰めてくれ…。」

紬「ハアゝ…／／／／」

言葉どころか、眼中にも入っていないかった。

律「あの…紬さん？…もしもし…返事がない…まるで屍の」

紬「死んでませんよ。」

律「反応した！」

紬「ゴメンナサイ。素晴らしい物を見ていたから。」

律「まあ、良いや。ムギ。お茶を淹れてくれ。アイツの分も。」

紬「はい」

紬はイソイソと、お茶を淹れ、ケーキを出した。

紬「さあどうぞ。」

唯「えっ？」

目の前に出された、お茶とケーキを見て、戸惑いを隠せない。

律「ホラホラ。金は取らねえから、安心しろって。」

唯「は…はい…。」

紬「遠慮は要りません。どうぞ、召し上がって下さい。」

唯「い、頂き…ますう…／＼／＼」

唯は紅茶を一口入れた。

唯「!」

丁度いいお湯の下限。カップから上がる良いハーブ香り。口に入れた瞬間、その香りが口の中に広まり、体がポカポカと暖かくなり、頭の中もスッキリしてしまい、読書疲れが吹っ飛んでしまったように、感じていた。

紬「さあさあケーキも。」

唯「は、はい／＼／＼」

あまりの笑顔に、緊張してしまった。

フォークで一口クリームを掬った。案の定、絶品だった。

唯「お、美味しいです。」

律「平沢さんって、本好きなの？」

唯「はい。」

紬「どんな、本を読みますか？」

唯「本なら、色々読みます。サスペンスとか、恋愛とか、SF、ホラーとかも。」

律「おお、だったら、漣に面白いホラー小説を紹介してやってよ。」

漣「律！」

ゴツーーーーー

律「わ、私が…幽霊に…なり…そう」ガクッ

唯「……クスッ」

漣「！」

ほんの少しだけ、唯の笑顔を見た漣。

漣「（…平沢さんも…こうやって、笑えるんだ…安心）」

そうおもいながら、紅茶を啜る（すする）と、ある事を思い出した。

漣「ところで、何で平沢さんはここに居るの？」

唯「えっと…その。」

唯「っと言つ訳です。」

漣「そうか…もう、使えないんだ。」

唯「はい。」

律「マズイな…そろそろ、私達の所にも来るんじゃないのか？」

紬「4月が終わるまで、後一週間ですし。」

漣「バンドも組めずに廃部か？」

律「それは嫌だ————！………そうだ————！！！」

ガシッ

唯「ひゃ！／＼／＼／」

律は唯の手をギュッと握った。

律「平沢さん。」

唯「は、はい……／＼／＼／」

律「軽音部に入ってくれない？」

漣「……何言っているんだお前は？」

律「黙ってる！」

漣「ビクッ！」

珍しく、律にビビってしまった。

律「…平沢さん…見てのとおり、軽音部は後一人足りないんだ。このままじゃ、確実に廃部になってしまっ…コレを救えるのは…平沢さんだけだ！」

唯「で、でも…私…。」

律「んっ？」

唯「楽器…何も出来ません……カスタネットぐらいしか…。」

律「なあに大丈夫だ…本を読んでるだけで良いんだ。」

唯「えっ？」

律「本を読んでもらうだけで良いんだ。練習をしるとかも言わない…ただ…この部を潰したくないんだ。文芸部の本もこっちに運ぶ。それで、軽音部兼文芸部だ。」

漣「律。」

律「分かっている。自分がバカな事を言ってる事ぐらい…でも、演奏がしたい…演奏もせずに廃部なんて…嫌なんだ…。」

唯「…田井中さん…（この人は…必死なんだ…大好きな物を守る為に…その為に、諦めずに、時には無茶苦茶な事もする……私には…絶対に持っていない物だ…凄い人だ……）  
そうだ…私…。」

唯「分かり…まし…た。」

唯は、弱弱しく律の手を握り返した。

唯「…私、この部に入ります。」

律「本当か！」

唯「はい。」

律「ありがとう！」

紬「良かったねりっちゃん。」

漣「平沢さん。こんなバカな奴の言う事なんて…。」

唯「…秋山さん…言いましたよね？」

漣「えっ？」

唯「文芸部の部室に来た時…私…秋山さんの演奏が見たいって。」

漣「あ、ああ…。」

唯「見せず、終わって欲しくないんです。」

漣「平沢さん…。」

唯「あ、大丈夫です。とやかく言いませんし、来年になったら、きっと誰かが入ってくれますよ。その時…退部しますから。」

漣「えっ？」

唯「一年間の間だけですが…宜しくお願いします。」

漣「…本当に…それで…良いの？」

唯「…はい。」

漣「…そうか…分かった。…ありがとう…頑張るから。」

唯「頑張ってください」

こうして、平沢唯は形だけが軽音部に入部する事になった。

第8話 そして軽音部へ！（後書き）

さあ〜て次回のもしゆいは？



さわ子「山中さわ子よ。なんか、本当は前回に私がコメントする筈  
だったらしいんですけど、作者が忘れていたみたい…私を忘れると  
はどういう要件だ？あゝ！大体、あいつだって、メガネかけている  
じゃねえかよ。何で、同じメガネキャラを忘れるんだ！そんなに、  
存在が薄っていいいたいのか—————！」

(かんぺ) 予告お願いします

さわ子「あっ失礼。…次回もしゆい。第9話 形だけの部員! よじ  
や皆まつたね」



唯「いつもの…先生…じゃない…。」

## 第9話 形だけの部員！

「唯のクラス昼休みにて」

唯が軽音部に入部？して、一日経った。

教室で和と一緒に、昼食を食べていた。その昼食に、軽音部に入部した事を伝えた。

和「軽音部…て何？」

唯「バンド…する部。」

和「バンド！？…バンドって、ギターとかドラムを使うアレ？」

唯「……」コクン

和「唯って楽器使えるの？」

唯「……」ブンブン

唯は首を横に振った。

和「じゃ何で入ったの？」

唯「…軽音部は、後一人入らないと…廃部。…部長の…田井中さん  
って言う人が…本を読んでいるだけで良いからって。」

和「それって…つまり…人数合わせ？」

唯「……」コクン

和「ハア…で、承諾したって訳？」

唯「……」コクン

和「唯は…それでいいの？」

唯「…うん。秋山さん達の演奏が聞きたいから。」

和「秋山さん？」

唯「ベースやってる人。」

和「フーン…上手いの？」

唯「分かんない…まだ聞いていない。」

和「……」。」「

唯「取り合えず一年居るつもり、来年になれば、新入生が入ってくれば、私は辞めるから。」

和「……そう。」

それから、二人は一言も発せず、黙々と昼食を食べた。

〈放課後〉

唯が教室へ出ようとした時

和「唯……部活？」

唯「……」「コクン

和「そう……唯……唯はどう思っているかは分かんないけど……コレだけは言っておくわ。」

唯「？」



和「…私から見れば、歓迎されていない様に見えるわ。」

唯「……。」

和「ただの形だけの部員よ。本を読んでいるだけで良い何て…。」

唯「…分かっているよ…でも…抜ける訳には…いかないの…。」

そう言い、教室を出て行った。

和「唯！…ただ私は…本を読むんじゃなくて…一緒にやれば良いの…。」

～廊下～

唯「…形だけの部員…返す言葉が出ないな…。」

呟き、準備室へ向かった。

第9話 形だけの部員！（後書き）

さあ〜て…次回のもしゆいは？

和「真鍋和です。ちょっとした解説です。唯が無言で縦に振る場合  
yesで、表示する時は

唯「……」コクンとなり横に振る場合はnoになり

唯「……」ブンブン

となります。いずれにせよ、数ミリぐらいしか振らないので、良く  
見ないと、分かりません。分かるのは、私と憂：最近では秋山さん  
も分かっってきたみたいです。」

和「次回もしゆい…第10話 翼をください！です。次回にお楽しみ。」



唯「  
…私は…  
…勇気が欲しい。」

## 第10話 翼をください！

（準備室）

唯「失礼…します…。」

昨日と同じように、ドアを開けた。だが、まだそこには誰も居なかった。

唯「……アレ？」

昨日とは、明らかに部屋の様子が変わっていた。ティーカップが置かれている棚の隣に、文芸部に置かれていた本棚と本が設置されていた。しかも、文芸部にあった時は、かなり隙間があったのだが、今は読んだ事の無い本も追加されて、ビッシリと埋まっていた。

唯「なんで…ここに？わざわざ、運んでくれたのかな？…だとしたら私、悪い事しちゃったよ……そうだ…せめて…。」

唯は、ブレザーを脱ぎワイシャツを袖を腕まくりをし、窓を開けた。

机を拭き、床にはき掃除などして準備室の掃除をした。

自分ができる事はコレぐらい。漫然に、気持ち良く練習して貰いた  
いので、掃除した。

じげんぐじ

唯「…こんなモンかな？」

唯がある程度掃除を終えると

紬「こんにちわ。」

唯「じ、…じんに…わ／／／」

紬「アラツ？部屋が随分綺麗になってる。もしかして…平沢さんが、掃除してくれたの？」

唯「……は、は、い／＼／」

紬「まあありがとう。大変だったでしょう？」

唯「い、いえ…その…あの…。」

紬「うん？」

紬は、唯のおどおどした様子を見てもイラつかず、返事を待っていった。

唯「私…楽器出来ないから…私が…出来るのは…コレぐらい…それにほ、本箱…運んで…くれて…本も追加して…くれたから。」

紬「本箱？…ああアレね。いいのよ。気にしないで。ウチの人達に運んで貰ったの」

唯「え！？ウチの人達って…琴吹さんの…お家の人達？」

「 紬「ええ。ついでに、要らない本も持って来てって頼んでおいたの。」

唯「でしたら…余計に…悪い…です。…私の為に…。」

紬「いいんだって…さっお茶を淹れてあげますね。」

荷物を置き、ティセツトの方へ行き、お茶を淹れ始めた。

紬「はい。お疲れ様。」

紬は満面の笑みで、紅茶を机に置いた。

唯「あ、ありが…とつ…ごぞい…ますう／＼／＼／」

紬「ウフフフ。まだ二人は、来ていないけど、先にケーキ食べる？」

唯「いえ！…私は…。」

そこへ

律「オーーーーース。」

漣「遅れてごめん。」

律「おっ何だ何だ？部室が随分、綺麗になったな？」

漣「本当だ！」

紬「平沢さんが、掃除してくれたのよ。」

律「おおそうか。偉いな。お母さんは、嬉しいぞ。」

漣「いつから、お前はお母さんになった？」

律「ご褒美に、頭をナデナデしたやるぞ。」

唯「い、いえ！その、け、結構です／＼／＼」

律「遠慮するなつて。ホラッ、ナデナデ。」

唯「ふええええ／＼／＼」

律の撫でる優しい感触に、唯は思わず変な声を出してしまった。

漣「んっ？ちょっと平沢さん。」

唯「は、はい？あっ！？／＼／＼」

漣は、唯のメガネをヒョイとハズし、光に翳した（かざした）

漣「ヤツパリ、埃だらけだぞ。」

ポケットからハンカチを取り出し、ハア〜と息を吐き、レンズを拭いた

漣「掃除して、ホコリが付いたんだろうな。はい。」

再び、唯にメガネを掛けた。

唯「あ、ありがとうございます／＼／＼」

紬「はい。お茶が入りましたよ。」

しばらく、談笑が続いた。

律「フーンそうか。それで掃除を？」

唯「はい…せめてコレぐらいは…。」

律「別に、そんな事気にしなくても。無理矢理、誘ったのは私何だからさ。」

透「確かに、無理矢理だな。」

紬「私も無理矢理でしたね。」

透「私もだ。」

律「うるせえ！…でも平沢さんが、ここまでしてくれたら、私達も  
気合入れなきゃならないな。」

漣「そうだな。」

紬「ですね。」

律「よっしゃ。んじゃ一丁、やるか。」

三人は、立ち上がり演奏の準備を始めた。

唯は楽器の事は良く解らないから、自分がとやかく言つのも出来な  
いから、約束通り本棚から本だし、本を読み始めた。

律「良し行くぜ。ワン…ツー…ワン、ツー、スリー、フォー！」

演奏が始めた

唯「この曲…翼をください？」

唯は本を立てて、顔を隠しているが、チヨコンと目を出して、演奏している姿を見ていた。

唯「（ピアノ演奏で聞いたことあるけど…こういう感じになると、また違うな…それに、田井中さんも琴吹さんも…秋山さんも…カッコいいな。）」

三人の姿を見て、唯は和の言葉を思い出していた。



和『形だけの部員じゃない』

唯「（…私…何やっているんだろう…）」

そう思っていると、サビに入った。唯は思わず、口パクだが歌っていた。

唯「（…私の願いが叶うなら…勇気が欲しい…。そしたら…秋山さん達と…。）」

**第10話 翼をください！(後書き)**

さあ〜て…次回のもしゆいは？

溇「溇です。翼をくださいは、フォークグループの赤い鳥が1971年2月5日に『竹田の子守唄／翼をください』のB面曲として発表した物で元々は1970年に三重県志摩郡浜島町（現：志摩市）の「合歡の郷」で開かれたプロ作曲家コンテスト「合歡ポピュラーフェスティバル'70」のための曲として作られたものなんですよ。

┌

漣「次回もしゆい。第11話 願望の自分！です。お楽しみに」



唯「ちなみに、翼をくださいを英語表記にすると『I WOULD  
GIVE YOU ANYTHING』となります。」

第11話 願望の自分！（前書き）

唯の変更点

- 1・絶対音感と言う能力がない
- 2・料理も憂ほどではないが出来ます。

## 第11話 願望の自分！

（帰宅後）

唯は制服のままベットに寝そべっていた

唯「……。」

自分は、ただの数合わせの為に居る。三人が一生懸命練習をしている間、自分は本を読むだけ。音楽の知識はコレと言っていない。こんな状態で良いのか？そんな事ばかり呟いていた。

唯「…私をもっと明るかったら…。」

ダキッ

唯「澪ちゃん〜ん！」

澪「お、おい！抱きつくなよ！／／／／」

唯「えへへ…澪ちゃんあつたかい。」

澪「全く…しょうがない…ちよつとの間だけだぞ。」

律「ヤレヤレ、相変わらず仲が良いな二人とも。」

紬「アラアラ、りっちゃん焼きもち？」

律「バカ、そんなんじゃねえよ！／／／／」

紬「ウッフ。顔が赤いわよ。」

唯「もう、しょうがないな。りっちゃんにも。」

ダキッ

律「お、おい！／／／／」

唯「ホラホラ、澪ちゃんに抱きついたから、私はさっきよりもあつたかいよ」

律「ま、まあ…確かに…あつたかいな／＼／＼」

唯「でしょう?」ナデナデ

律「頭を撫でるな!／＼／＼」

唯「今の間だけは、私がりっちゃんのお母さんだよ。」

律「やめい!／＼／＼」

唯「もう、りっちゃんの照れ屋さん。」

澪「ハハハ、律真つ赤かだぞ。」

紬「本当。莓みたいに、赤いわよ。」

唯「本当だ。莓だ莓だ。」

律「うるせえ！……ぷ、プハハハ。」

唯「アハハハハ。」

透「ハハハ。」

紬「ウフフフ。」



ボ  
-----  
ン

平沢家にボヤ騒動が起きるぐらい、顔から火が出る勢이었다。

唯「…だ、誰今の…// // //」

唯は、恥ずかしさのあまり、掛け布団に潜り込んだ。

第11話 願望の自分！（後書き）

さあ〜て…次回のもしゆいは？

律「りっちゃんだぞ。今ゲームセンターで、私達のぬぐるみのUFOキヤツチャーがあるぞ。何と勧誘活動をした時の着ぐるみを着た私達と、第二期で、桜高祭の時にきていたさわちゃん特製のTシャツを着た私の二つがある。何とこの作者、勧誘活動の時の方は、全員持っているが、Tシャツの方は、私以外持っているみたいだ。……なぜ私だけ……」



律「次回もしゆい。第12話 本音!だ。次回も宜しく。そして、私のぬいぐるみを……」

ゴツーーーーーッ

漣「違うだろ?」

「律」じじじじじ…わ、私達のぬいぐるみ…頑張って獲得して下さい…。」



唯「今日の私…恥ずかしかったよ／＼／＼／＼／＼」

## 第12話 本音！（前書き）

### 唯の変更点

3・唯が家に居る時『ハネムーン』とか変な文字が書かれているTシャツは着ていません。普通のシャツを着ています。

4・そこそこですが、頭は良い方です。

再び、某小説のマネです。モチロン、その所のツッコミは無いですよ。

## 第12話 本音！

変な想像をしてから、数時間が経った。

夕飯を食べても風呂に入っても、あの恥ずかしさが抜けなかった。  
抜け切れず、深夜が過ぎた。

唯「…眠れない。」

さっきの想像のせいで、眠る事も出来なかった。唯はベットの傍に置いてあるメガネを掛け、ベットから降りた。本箱から、一冊の本を取り出し、机に向かって座り本を読み始めた。

唯はその作品集のある作品に、何度も読んでいた



雨にも負けず 風にも負けず  
雪にも 夏の暑さにも負けぬ 丈夫な体を持ち  
欲はなく

決して怒らず

いつも静かに笑っている

一日に 玄米4合と 味噌と少しの野菜を食べ  
あらゆることを

自分を勘定に入れずに よく見聞きし 分かり  
そして忘れず

野原の松の林の陰の小さな茅葺き小屋にいて

東に病気の子どもあれば 行って 看病してやり

西に疲れた母あれば 行って その稲の束を負い

南に死にそうな人あれば 行って 怖がらなくてもいいと言い

北に喧嘩や 訴訟があれば つまらないからやめると言い

日照りの時は 涙を流し

寒さの夏は おろおろ歩き

みんなにデクノボーと呼ばれ

ほめられもせず 苦にもされず

そういうものに わたしはなりたい



宮沢賢治が死後、見つかった「雨ニモマケズ」

東北砕石工場の嘱託を務めていた賢治が壁材のセールスに上京して再び病に倒れ、花巻の実家に戻って闘病中だった1931年秋に使用していた黒い手帳に記されていたものである。冒頭部の上の部分に青鉛筆で「11・3」の書き込みがある事から、同年11月3日に執筆したと推定されている。手帳は全体として自省とその当時の賢治の願望が綴られた内容となっている。この手帳は今日、研究者からは「雨ニモマケズ手帳」と呼ばれる。手帳の存在は賢治の生前には家族にも知られておらず、その背景からも本作は未発表であった

と解説が書かれていた。

唯「…願望…この人は…病気で動けなくなった時に、書いたんだよね？…口では出せず、こっやって、残したんだね…。…私にも…ただ一つの…願望が持て…るな…ら…」。

ウトウトと机に伏せ眠りに付いてしまった。



唯が目を覚ました所は、全く闇。一寸の先は闇と、言っても過言ではない。  
ただ、一つおかしいのは、真っ暗なのに、自分の手や足など自分の体は、目に見える事が出来る。

唯「一体…どうなっているの？」

？『私が呼んだだよ。』

唯「!？」

後ろから声がした。後ろを振り返ると、たくさん光が集まり、それが人の形へとなっていた。

唯「え…なっ何で!？」

人の形になった光は…



唯「わ、私!？」

自分と全く、同じ姿をした平沢唯だった。メガネをしてはいない。

唯「そう…私は、唯。平沢唯…唯は、私…私は…唯…そして私は…  
唯の願望の姿だよ。」

唯「私の…願望？」

唯「そう。いつも見てたよ。唯の心の中から、ずっとね。」

唯「…そ、そう…。」

突然目の前に、現れた自分を見て、恐怖を隠せなかった。そんな唯を見たもう一人の唯はクスツと笑った。

唯「ウフフ。大丈夫。ヒドイ事なんてしないよ。ただね…ちょっと唯とお話をしたかっただけなの。」

唯「お話？」

唯「…唯…軽音部は、どう思う？」

唯「えっ？」

唯「正直に言っつて、どう思う？軽音部の人達。」

唯「優しい…人達だ…と思う…。」

唯「ふ〜ん…本当なのかな？」

唯「ほ、本当だよ!？」

唯『…そうは、思えないよ。』

唯「な、何で、そんな…事を言うの?」

唯『……和ちゃん言葉、未だに引きずっているんでしょ?』

唯「うっ。…」

和「歓迎されているように見えないわ。形だけの部員じゃない。」

唯「…否定できない様だね。」

唯「……………」

唯「唯…本当は、こっと思っっているんじゃない？」



唯「ちっ、ちがっ！」

『うっかしい人達だ』

唯「いつも本を読んでいた。四六時中。友達も作ろうとせず、イベントとかにも参加せずに、興味を抱くのは本だけ。読んでいるのを

邪魔して欲しくない、澪ちゃんと出会って図書室で読んでいたら、ジツと見られて集中出来なかったじゃない？更には、自分が書いている小説だって、見せて言われて、嫌だったんだじゃない。ウザッかったんじゃない？』

唯「違う！」

唯「ただの数合わせ、迎えられていない。居ずらいと思っているんでしょう？無理して入らなくてもよかったのに、澪ちゃんだって無理しないでいいって言ってたじゃない。上手く逃げられたのに…。」

唯「違う…違う！」

唯「だったら…正直に答えなさい！唯！私は、アナタに質問する！澪ちゃんと出会い、りっちゃんに出会い、ムギちゃんに出会い…！そして、風変わりな自分を友達のように、接して貰い、数合わせだけで軽音部に誘ってくれて…！どう思ったの？どうしたの！答えなさい！平沢唯！」

唯「……かった……しかった……嬉しかった！嬉しかったに決まってるよ  
！恥ずかしがり屋な私を……私を……接してくれた……風変わりな人って

言われた…自分は必要とされていないと言ったら…秋山さんは、私は必要としていると言ってくれた…嬉しかった…嬉しかったよ。」

唯は、ついに泣きだしてしまった。もう一人の唯がそっと、抱きしめた。

唯「唯…だったら、自分が行きたい道に進みなよ。自分が信じた道が、正しい道だよ。」

唯「…唯…。」

唯「大丈夫だよ…唯。澁ちゃん達は優しいから…大丈夫だよ。安心してなよ。」



唯「はっ!?!」

チュンチュンチュン

目覚めると、スズメの鳴き声がしていた。ズレたメガネを掛けなおし、少しずつ頭が覚醒していった。

唯「……。」

不思議な気分だった。自分が、自分に、説教される事なんて。

唯「…アレ、ちょっと待てよ。」

唯は、何かを思い出した。引き出しから、一冊のノートを出した。パラパラと捲り、とあるシーンを見た。そして、それが確信へと変わった。

夢の中でのやり取りは、自分が今書いている小説と全く同じだった。願望を持つ少女が、夢の中で自分にどう思っているかと聞かれるシーンと丸つきり似ていた。

唯「……。」

唯は、昔から不思議な体験をしたと思っていた。望み通り、その願いが叶ったと言っても過言では無かった。

唯は制服に着替え、メガネを外して鏡の前に立った。

唯「唯…ありがとう…もう大丈夫。…どこまで出来るか分からないけど…頑張ってるよ。行って来ます。」

再びメガネを掛けた。

ギーー　ボタン

唯がそう言い、部屋を出た。部屋を出る時「いってらっしゃい」という声がフツと聞こえたような気がした。

第12話 本音！（後書き）

さあ〜て…次回のもしゆいは？

唯『唯です。皆、元祖平沢唯です。』

唯『お、同じくゆ、唯…です／＼／＼』

唯『ん〜こうして見ると、双子みたいだね。憂がマネしているとは、また別格だな。』

唯『そ、そう／＼／＼』

唯『もうそう言う所可愛い。』

ダキッ

唯「うひゃー／＼／＼／」

(カンペ)「そろそろお願いします。」

唯「『次回もしゆい。第13話 ありがとう…そして、おついで。』」  
宜しくね。」

憂「わあ〜お姉ちゃんが二人だ！」

唯「おおこっちの憂も憂何だね。」

ダキッ

憂「お姉ちゃん…良い匂い。」

唯「憂も良い匂いだよ。」

唯「…変な気分だよ…// // //」

### 第13話 ありがとう…そして、おじいちゃん！

（その日の放課後）

唯は、和を呼びとめた。

和「どうしたの、唯？」

唯「…あのね…和ちゃんに、一言言いたい。」

和「何？」

唯「…今まで、私の事を気に掛けてくれて…こんな私と友達で居てくれて…ありがとう。」

和「なに改まって言っているの？」

唯「私…もう大丈夫だから…もう逃げないから…どこまで、やれるのか分からないけど…頑張れる。」

和「……そう。何となく唯が言いたい事分かったわ。…頑張りなさい。」

唯「…うん。」

唯は、教室を出た。

和「…逃げない…ねえ…。」

唯の口からあんな言葉が、出るとは思いもしなかったと思う和であった。

（準備室）

唯「こゝ、こんにちわ…。」

律「おっ平沢さん。」

澪「こんにちわ。」

紬「ちょうど、お茶が入った所ですよ。」

唯「はっはい。」

唯はある事を切り出そうとしたが、いざ言おうとしても言葉は出ない物である。

結局そのまま、お茶とケーキを頂いた。

そのまま、言えず時間が流れて

律「ふ」の辺にしておくか。」

漣「そうだな。」

紬「もう、下校時間ですし。」

言いだす事が言えず、下校時間を迎えてしまった。しかし、唯も覚悟している。言えるのはもうここしかない。ここで言えなかったら…

唯「あ、あ…。」

言いたい…でも…やはり、心のどこかで、恐怖を感じていた。本当に自分を…

その時、ある言葉が頭を過った。



唯「大丈夫だよ…澪ちゃん達は、優しいから…大丈夫だよ。安心しなよ。」

唯「(…唯…うん)」

その言葉を思い出し、恐怖が無くなった。

唯「…あの！」

声を張り上げると、帰りの準備をしていた、漣達の動きが止まった。

漣「どうしたの？」

唯「あの…その…えっと…ちょっと…お話したい事が…あるんです。」

紬「お話したこと？」

唯「……。」

律「…yes…てか？」

唯「…私…昨日…皆さんの…演奏聞いて…その…とても…感動しま

した。」

律「そ、そうか。」

透「ありがとう。」

紬「嬉しいですわ。」

唯「それで…思ったんです。…私…このままでいいのかと…私…も  
つと…もっと…皆さんの役に立ちたいって…だから…私…私にも…



音楽を教えてください。」

三人「!？」

唯「…私は…いつも…本ばかり読んでいました…人と接するのが

…嫌でした…でも、  
秋山さんは…私を…必要だと…言ってくれて…嬉しかった…だから  
…もっと…役に立ちたちと思っただんです。…いっぱい迷惑を掛ける  
かもしれません…でも…皆さんと…演奏がしたいんです…お願いし  
ます。」

律「平沢さん…ここは、音楽が大好きな奴が来る所だぜ。」

唯「！」

漣「そういふこと。」

紬「ウフフフ。」



律「よしよしそ……軽音部へ。」

唯「うっ……。うっ。」

唯は泣きだした。

律「よしよし……お母さんの胸で、おもいっきり泣け。」

律がギュッと唯を抱きしめると、唯もそっと律を抱きしめ

唯「…ありが…とひ…いぢます…。」

唯はよろやく…本当の部員…友達を手にした。

第13話 ありがとう…そして、ふじいそー！（後書き）

さあ…さて…次回のもしゆいは？

紬「紬です。コーヒーには、肝臓ガンや消化器官のガンなどを予防したり、飲酒による肝臓の負担を軽減したり、ニコチン酸（ビタミンB群に属する必須栄養素）が血液中のコレステロール値を下げ、動脈硬化を予防する効果があつて、体にいい飲み物なんですよ。でも、飲み過ぎに注意して下さい。」

「次回もしゆい。第14話 ギター！です。楽しみにしてて下さい。」



唯「ちなみに、この作者はブラックコーヒーを1日3杯飲みます。」

## 第14話 ギター！（前書き）

ふっかーーーーーっ！

すいません。風邪で寝込んでいました。お陰で更新が遅れてしまいました。本当にすいませんでした。まだ、熱っぽいので、返信は、遅れそうです。後、誤字脱字が目立つかもしれません。

ご了承ください。

## 第14話 ギター！

律「…ちつとは、落ち着いたか？」

あれから、唯は泣き続けていた。律も唯が泣き止むまで、ずっと抱きしめて背中をスリスリと擦っていて、ようやく、泣き止んだ所であつた。

唯「…ごめんなさい…迷惑…掛けてしまいました…。」

律「別に良いって。」

漣「よく、勇気を持って、言えたよ。」

紬「さあ、コレ飲んで下さい。」

唯「ありがとう…うござい…ます。」ズズッ

唯「…それで…さっきも言いましたけど…私…楽器出来ないうけど…本当に私を…迎えて…くれますか？」

律「さつきも言っただろ？ココは、音楽が好きな奴が集まる所だつて。音楽が好きであれば、それで良しだ。」

唯「はい…でも…私は、何をすれば…いいんですか？」

漣「いま、足りていないのは、ギターだ。」

紬「コレを気に、ギターを始めてみたらどうですか？」

唯「ギター！わ、私…出来る自信が…。」

律「大丈夫だって、私達も出来るだけ教えてやっから。」

漣「頑張ろう…平沢さん。」

唯「秋山さん…。そうですね。皆さんが一生命頑張っているんですから…私も頑張らないと、いけませんよね。」

律「ようし、そうと決まったら、平沢さんのギターを手に入れるぞ。」

唯「よ、宜しく願います。」

第14話 ギター！（後書き）

さあ〜て…次回のもしゆいは？



作者「どうも…作者ことサッカーです。皆さん、更新が遅れしまつて本当にすいません。冒頭でも言いましたが、風邪で寝込んでいました。若干まだ熱があるので、ちよつと話は短めにしました。すいません、今度は完全に治して、長めに書きたいです。返信は、まだ次回にして下さい。では、次の更新で。」



作者「次回もしゆい。第15話 バイト！です。次回も見て下さい  
ね。じゃ〜け〜ん…





ポン(グー)ウフフフ。  
「ノシ



唯「負けちゃった。」

第15話 バイト！（前書き）

完全復帰です。



人前に出るのが苦手だから、4人は交通調査のバイトを始めた。

説明終わり…バイトの風景をご覧ください

律・唯ペア　唯は本を読まず、ちゃんとバイトをしています。

唯「……。」「チラッ

唯は、律をチラッと見た。

唯「（田井中さん…女の子なのに…男の子みたいな顔立ちだな…可愛いつて言うより、カッコいい？こんな事を言ったら、怒っちゃうかな？）」「

ブオーーーーーン…カチッ…カチッカチッカチッカチッカチッカチッ  
カチッカチッカチッ

律がメチャクチャに、数を数えるカウントする奴（名前が分からない）を押ししていた。

唯「えっ…えっと田井中さん…。」

律「んっ?」

唯「えっと…あんまり…押しすぎわ…。」

律「あっ、ワリイワリイ。つい、ドラムを叩いているような感じがしちまってさ。」

唯「そ、そうなんですか。」

律「職業病って奴だな。ハハハ。」

唯「…職業病。」

唯の親指もずっと、無意識に小刻みに動いていた。唯も職業病に掛っていた。

「車の中にて」

「……。」

「湊は、窓から唯と律の姿を見ていた。」

「紬「どうしたの、湊ちゃん？」」

「湊「んっ？…イヤちょっとね。」」

「湊は不安げな顔をしていた」

「湊「…平沢さんと何か距離を感じるんだ。」」

「紬「平沢さんど？」」

「湊「うん…せっかく、軽音部に入ったのに、このままじゃいけないような気がするんだ。」」

「紬「…たしかに…何となく、平沢さん壁を作っているよね？」」

漣「…うん。…それに、今も律を怖がっているような気がする。」

実際唯は律と話す時、若干だが怯えている。

紬「ヤッパリ、最初の頃、怒鳴られたのが原因かな？」

漣「…たぶんね…。」

唯はこの三日間、自分から話を掛けようとせず、黙々とカウントしていた。

～楽器店～

漣「…まだまだ…足りないな。」

律「また、別のバイト探すか。」

唯「…いい、良いですよ。私…もう少し、安いのにするよ。コレ以上皆さんに、迷惑はかけられません。」

律「気にすんなって。」

唯「…でも…。」

紬「そっだ。ちょっと待ってね。」

数分後

紬「…このギター5万で良いつて。」

唯「えっ!?!」

紬「値切るのに、成功しました。」

唯「琴吹さん…。」

紬「ささやかな、プレゼントだと思って。」

唯「あ、ありがとうございます。残りのお金は、分割で必ず返します。」

紬「ウフフフ。」

ほんの少し紬と唯の距離が縮んだ。

第15話 バイト！（後書き）

さあ〜て…次回のもしゆいは？

律「りっちゃんだ。自販機で、150円のジュースを買おうとしたけど、財布の中には

500円が1枚100円が1枚、10円が4枚。足りないから、500円を入れて、ジュースを買ったけど、おつりが全部100円で買ってきた時は、物凄くイラッと来る。」

律「次回もしゆい。第16話 猛勉強！ハア〜無駄な10円が増え

た  
レ

唯「100円と50円って似ていて、紛らわしいよね?」

## 第16話 猛勉強！

平沢唯は、三つ猛勉強をしている。

一つは学校の勉強。テストで赤点を取ると、追試を受けないと、部活動を出入り禁止となる。つまり、皆に迷惑が掛ってしまうので、中学よりも必死に、勉強をしている。

二つ目は



透「はい、コレギターの入門の本。取り合えず、コードを覚えないとね。」

唯「ありがとうございます。」ペラッ

本を開くと、たくさんのコード、専門用語、弦を抑える部分などがビッシリ書かれていた

唯「……む、難しそうですね。」

透「でも、ここを乗り切らないと。」

唯「が、頑張ります。」

（唯の部屋）

唯「え〜っと、コレがC…E7とAm7で似ているから、紛らわしいな。」

唯は、学校の勉強を上手く両立して、ギターの練習をしている。

弦を抑える位置、専門用語を少しずつだが、頭に入れている。

ガギヤーン

唯「…変な音。」

ちゃんと押さえないと、変な音が鳴ってしまふ。

唯「ウウ…指が痛い。」

弦は固いので。結構指に食い込むのである

唯「うーん…大分覚えたけど…このFのコードって、難しいな。」

Fのコードは、ギター初心者が必ずぶち当たる壁である。ちなみに、作者はマスターするまで3ヶ月ぐらい掛った。

そしてもう一つ、唯がギターと一緒に必死に勉強している物は……

『サルでも分かる良い人間関係の作り方』

唯「え〜つと、人間関係を作るには、まず距離を縮める事である。未だに、敬語で話したり、‘さん’や‘くん’付けで呼んでいるのは、他人行儀で縮める事は、難しいです。」

ここは思い切って、呼び捨てにしたり、あだ名や愛称で呼んでみましょう。また、自分にも呼ばれるのも効率が良いでしょう。」

唯も軽音部の人達と距離を感じていた。このままでは、良くないと思い、このような本を買った

唯「：確かに：秋山さん達と、敬語で話しているし、さん付けだな。和ちゃんは、愛称で呼んでいるから、距離は感じないな。……愛称か。」

く部活く

ティータイム中

透「平沢さん。どれ位、コードを覚えた？」

唯「えっと…10個くらい。」

律「おお。そうか。飲み込み早いな平沢さん。10個くらいで、演奏できる曲あるしやっとな音合わせが出来るな。」

絢「早く、平沢さんを混ぜて、演奏したいですね。」

唯「（…ヤツパリ、平沢さんって呼ぶ……よし。）」「

唯「あ、あの…皆さんに…その…お願いが…あります／＼／＼」

律「お願い？金か？」

唯「いえ、違います。その…私の事を…ゆ、唯って…呼んでくれ…  
ませんか？／＼／＼」

唯は恥ずかしくなり、顔を俯いた。

三人「!？」

唯「せっかく…軽音部に入ったのに…皆さんと距離を感じて…本に、あだ名や愛称で呼べば、距離が縮むって書いてあったから…」

透「（平沢さんも…感じていたんだ。）」

律「…八八。」

唯「？」

律「タクツ可愛い奴だな。そんな事を考えていたのか？」

唯「……／＼／＼」コクン

律「まあ、お前が呼んで欲しいって言う事は…、私達も呼びたい愛称があるのか？」

唯「……／＼／＼」コクン

紬「どんな愛称ですか？」

唯「た、田井中さんは……り……りっちゃん。琴吹さんは……ムギちゃん。秋山さんが……み、漣ちゃん……じゃ駄目ですか？」

唯の言葉に、律は、ムギと漣に、目を合わせると言葉は交わさず、理解したかのように頷いた。

そして

律「唯。」

紬「唯ちゃん。」

漣「ゆ、唯／＼」

唯「！」

四人も唯と呼んでくれた。

唯「あ、ありがとうございます／＼／＼／＼」

律「どうだ。少しは、縮んだような気がするか？」

唯「し、します。りっちゃん。」

紬「これで、唯ちゃんも軽音部で頑張っていける？」

唯「いけます。ムギちゃん。」

澪「…頑張ろうな唯。」

唯「はい。澪ちゃん。」

その後練習…はせず、四人は確かめるように、何度も呼びあっていたもよう。



第16話 猛勉強！（後書き）

さあ〜て…次回のもしゆいは？

溼「溼です。今回出て来たFのコード。初心者の難関と言われていきます。簡単に説明すると、ギターの弦は6本あり、下から一弦、二弦と数えます。人差し指で一弦、二弦、六弦を同時に押さえなければならぬので、結構難しいのです。作者は、一回諦めようとしたみたいです。」



遷「次回もしゆい。第17話 お疲れパーティー。お楽しみ」



唯「Fのコードまだ出来ません。」

透「大丈夫だって、唯なら出来るって。」ナデナデ

## 第17話 お疲れパーティー！

5月中旬

中間テスト

中学と高校では、問題は難易度は丸つきり違う。中学に習った事を覚えていないと、高校の問題を解くのはかなり難しい。

高校の問題は中学の発展問題である（作者が中学の時に怠けていて後悔した日より）

まだ学生の君。まだまだ間に合う。しっかり基礎を身に着け、勉強をしよう。

作者の戯言は、さて置き

〈部室〉

律「イヤ〜ようやく、テストから解放されたな。」

紬「問題もイキナリ難しくなりましたね。」

漣「ああ、全くだ。」

唯「……。」「ペラッ

律「んで…赤点…取っていないよな…誰も。」

紬「大丈夫です。」

漣「私も大丈夫だけど…律。お前はどうかんだ?」

律「余裕だよ余裕。」

バツとテスト用紙を見せる律。 88点と書かれていた。

漣「良く言うよ。テスト間近の時、勉強教えてくれって泣きついて来たのは誰だっけ？」

律「言うなよ！」

紬「ウフフフ。」

唯「……。」「ペラッ

律「唯。お前は、どうなんだ？」

唯「ふえ！わ、私は…フフ…です／＼／＼」

律「おっしゃ！勝った！」

漣「張り合っな！」

ゴツーーーーン

律「あう！」

漣「唯の左手見てみる！」

唯の左手は、絆創膏だらけになっていた。

漣「…かなり、練習したんだな。」

唯「…はい。テスト勉強の合間に。私…中学の時、部活入っていませんでした。まだ勉強と部活の両立が良く解らなくて、やり過ぎちゃいました。」

紬「あまり、無理しちゃ駄目よ。唯ちゃん」

唯「はい…ごめんなさい。」

律「まっテストも終わった事だし、今日は息抜きにどっか行くか？」

漣「おい律。」



唯「あ、ありがとうございます。」

4人は、帰りの支度をした。

唯はさっき読んでいた本を鞆に締まった。



『サルでもわかる良い人間関係の作り方』

もっと距離を縮めたいなら、思い切って、自分の家に招待しちゃおう。

第17話 お疲れパーティー！（後書き）

さあ〜て…次回のもしゆいは？

紬「紬です。世界三大珍味は、しっていますか？キャビヤ、フォア  
グラ、トリュフ  
です。ちなみに、日本三大珍味は、ウニ、カラスミ、コノワタです。  
覚えておきましょう。」



「次回もしゆい。第18話 やってみたい!です。次回も見て下さい。」



唯「ちなみに世界三大スープは、トムヤンクン、ブイヤベース、しよつつる鍋です後作者さんが、もう一つ作品を書きましょう。」

第18話 やってみたい！

律「それにしても、お邪魔していいのか？」

唯「うん……今日……お父さんもお母さんも……居ない……から。」

澪「アレでも、妹がいるって言っていなかった？」

唯「妹は……もう帰って来……ている……。」

三人「唯<sup>ちゃん</sup>の妹か……。」



妹「……。  
」ペラッ

唯「……。  
」ペラッ

妹「……。  
」ペラッ

唯「……。  
」ペラッ

妹「……。  
」ペラッ

唯「……。  
」ペラッ

妹「……。  
」ペラッ

唯「……。  
」ペラッ

三人は、二人揃って黙り込んで本を読んでいる姿が、目に浮かんでいた。

律「…何か…重苦しい空気が漂っていきそうだな。」

漣「…う、うん。」

紬「わ、私達が盛り上げましょう。」

（平沢家）

唯「た、ただいま。」

唯がただいまと言うと、リビングの戸が開き、元気よく出迎えた。

憂「お帰りお姉ちゃん。あっいらっしやいませ。軽音部の方々ですよね？」

律「は、はい…。」

憂「妹の憂です。いつも姉がお世話になっています。」

憂が一礼し、三人分のスリッパを出した。

三人「で、出来た妹だ。」

憂「さ、遠慮なさらず、上がって下さい。」ニッコ

天使のごとく笑顔だ（後日の三人より）

憂「お姉ちゃん、お部屋にいて良いよ。」

唯「で、でも…。」

憂「いいの、いいの。だって…初めて、お姉ちゃんが和ちゃん以外の人を連れて来たんだから、腕によりをかけたいの。」

唯「憂…ありがとう。」

憂「うふふ。気にしないで。」

天使のような妹だよ（唯の心の声より）

（唯の部屋）

律「ヤレヤレ…明るい性格、全部憂ちゃんに持って行かれたんじゃないのか？」

唯「そ、そんな…事…ないです…少し…人見知りするだけで…。」

澪「ハハ…少しか…」（そう言う事にしておう。）

律「それにしても…予想していたが…本ばかりだな。」

紬「ですね。」

机の上に置かれている本箱に、たくさんの本。その隣置かれている本棚にもビッシリと詰まった本。

律「スゲエな。童話に、小説に、伝記に、自伝記に…ラノベは無しか。」

澪「本当に、本が好きなんだな。」

唯「う、うん／＼／＼」

紬「アレ？これだけ、随分ボロボロになっていますね。」

紬が本棚から取り出したのは、一冊のボロボロになった本を取りだした。

その本は……

『ロミオとジュリエット』

紬「ずいぶん。読み込みましたね。」

唯「うん…見るたんびに、泣いちゃいます。」

律「確かに、悲しい話なものな。」

唯「…ちょっと…懂れて…いるんです…。ね、ね、恋愛に…／／／／」

律「へ、へ、唯も恋愛したいのか？／／／／」

唯「お…女の子…ですから／／／／」

律「ほお〜言ってくれるじゃねえか。」

律は笑いながら、人差し指で唯の頬をクリクリした。

唯「く、くすぐったいですよ／／／」

紬「…私も…この話好きですよ。切ないですけど。」

唯「うん。何回も涙を流したから、本がシミだらけになっちゃいま

したけど……／＼。」

紬は、パラパラとページを捲った。

紬「本当だ。……ねえ唯ちゃん。」

唯「な、何ですかムギちゃん？」

紬「唯ちゃん……ジュリエットを演じてみたいって思わない？」

唯「えっ？」

紬「私ね……演劇の台本を書いて、演出するのが夢なの。もしも、皆同じクラスになれば、文化祭でクラスの出し物ロミオとジュリエットをやってみたいの。」

律「ろ、ロミジュリをか？」

紬「うん。でね、唯ちゃんがジュリエットを演じて欲しいの。」

唯「私がジュリエット？」

絀「ロミオは、透ちゃんにやってみらおかなって…。」

透「私がロミオ！」

律「そ、それは随分と斬新だな。」

唯・透「………////」

お互い目を合わせた。そして、一瞬自分達の姿を想像してしまった。

唯「……み、透ちゃん…//////。」

透「……ゆ、唯………//////」

律「いいんじゃないか。宝塚見たいで、面白そうだけ。」

紬「どっ?」

唯「お、同じクラスになれたら…。」

澪「わ、私が…ロミオ…私が…ロミオ…。」

先の話であるが、これが現実となる。

第18話 やってみたい！（後書き）

さあ〜て…次回のもしゆいは？



唯「唯です。シェイクスピアの4大悲劇は、ハムレット、オセロ、マクベス、リア王です。ロミオとジュリエットは、ラブロマンスに入るので、悲劇ではありません。」

唯「次回もしゆい。第19話 パーティ開始！です。お楽しみに。」



唯「ちなみに、ウィリアムIIシエクスピアが生きた年代は1564〜1616まで。覚え方は1564（人殺し）1616（色々）と覚えて下さい。ついでに

『5人と1匹の勇士伝説』も宜しくお願いします。」

## 第19話 パーティ開始!

しばらくして…

憂「お姉ちゃん。準備できたよ。」

憂がパーティの準備が出来た事を告げて来た。4人は、部屋を出て、リビングへ向かった。  
そこには、たくさんの料理が並べられていた。

律「すげえな…コレ、全部憂ちゃんが作ったのか?」

唯「憂…ゴメンね。任せちゃって。」

憂「大丈夫大丈夫。」

憂は嫌な顔を一つもせず、むしろ笑顔だった。

律「本当に、憂ちゃんに全部持って行かれたんじゃないのか?」

律が苦笑いをしながら言った。

憂「お、お姉ちゃんも凄い所がたくさんありますよ！」

さり気に唯にフォローを入れる憂に、透達はこう思った

透律細「……」(できた妹だ……本当に……)「……」

律は、取り合えず場を変えようと口を開いた

律「んじゃまあ……乾杯でもすつか？」

律がグラスに飲み物を注ごうとした。

唯「ま、待って下さい。」

唯が止めた

唯「実は…もう一人…呼んでいる人が居るんです。」

澪「もう一人？」

紬「唯ちゃんの友達？」

唯「……／＼／＼」コクン

律「（…友達いたのか。）」

口に出そうかと思ったが、流石に悪いと思い心の中で呟いた。

唯「もう少しで、来ると思います。」



それから、5分後

ピンポン

インターホンが鳴った

憂が玄関に行った。

憂「あっいらしゃい。」

その声が玄関からすると憂ともう一人リビングに入って来た。

憂「和ちゃん来たよ。」

唯の幼馴染であり、唯一の友達である真鍋和

和「ゴメンね。遅れちゃって。」

唯「ううん…待ってない。」

和「えっと…軽音部人達ですよね？真鍋和です。唯とは、近所で幼稚園の頃からの友達です。」

唯「えっと…紹介するね。まず田井中律ちゃん。」

律「どうも。」

唯「秋山澪ちゃん。」

澪「……／＼／＼」ペコリ

唯「琴吹紬ちゃん。」

紬「よろしく。」

紹介が終わり、皆そろったので、グラスに飲み物を注いだ。

律「んじゃ、皆グラス持ったな。よっし、中間テストお疲れ。カン  
パーティー！」

皆「カンパーティー!!!」

楽しいパーティーが始まった。

## 第19話 パーティ開始！（後書き）

作者「番外編です！」

律「いきなり、何言ってるんだ？」

作者「番外編だよ。番外編。」

漣「イヤ、分かってるから。」

紬「それで、何をやるんです？」

作者「なぜ、私が最後に更新してから、日を開けたと思う？」

律「面倒だったからじゃね？」

作者「NO！チガイマスヨ、リツチャン！ジョウダンキツスギルY  
O！」

漣「なぜ、カタコト？そして、なぜ語尾YO？」

紬「取り合えず…読みづらいですね。」

作者「私は、考えていたのですYO。」

漣「取り合えず、YO止めてくれませんか？ちよつとイラストくるの  
で。」

作者「はいはい。わかったよ。んで、ある物を書いていたんだよ。」

律「ある物？」

作者「それは……。」「

三人「それは……？」「

作者「キャラソンだーーーーー!!」ド  
ン

律「……。」

澪「……。」

紬「……。」

作者「…反応薄くね？」

律「イヤ…あのさ…ワンピースみたいな効果音出しながら言われてもさ。ピーンと来ないんだけど…。」

作者「だから、キャラソンだよ。キャラソン。」

澪「誰の？」

作者「お前達の後ろにいる、本読んでる奴だよ。」

唯「……。」「ペラッ

漣「つて、唯いたのか！」

作者「全く…唯話を聞け！」没収

唯「あつままだ読み途中！」

作者「お前のキャラソン作ったから、歌ってこい。はい、ギター」

唯「えええ！無理ですよ……ギターまだそんなに弾けないし……。」

作者「大丈夫だ。アニメの第一期の第一話では、ギター手に入れていないのに、軽快にギター弾いていただろ。」

唯「そ、それは、原作の…私…。」

作者「いいから、行って来い！」

唯「ふええええ／＼／＼／＼／」

ただ今スタンバイ中

紬「でも何でイキナリ、キャラソンなんか？」

作者「そりゃ、もし唯バージョンのキャラソンが必要だと思ってさ。あくまでも原作とは交わらない、もう一つの『けいおん!』だから、全く新しいキャラソンを作ろうと思ってさ。」

律「ってことは、私達のもあるのか？」

作者「無い!」

律「ええ!」

作者「お前らは、基本的に変わっていないから。」

紬「いい加減ですね。」

作者「ちなみに、言っておくが、ふわふわ時間とか、ホツチキスとか原作に出てきた曲は、この先、出て来ません。全て作者のオリジナルで行きます。」

三人「ええええええ!」

作者「これは、もし唯。誰も知らないもう一つの『けいおん!』だから…あっスタンバイできたみたいだ。でも平沢唯。もし唯バージョンで歌ってお別れです。」

曲は、白紙のストーリーです。あっ、次回のもし唯。第20話 幼  
馴染みですから！です。楽しみにして下さい。では、どうぞ

白紙のストーリー 作詞サツキ 作曲なし 歌 平沢唯（もし唯  
バージョン）

あの頃に読んだ絵本 いつのまにか心が奪われていた  
時間を絵本に預けて読んでいた

「ごはんだよ」という声も入らず 耳に入るのはセリフだけ

私も本を書いてみようよ 何時間も机に向けたよ  
だけど心奪うような 言葉が出なくて  
出来たのは丸めた紙くずと白紙ストーリー

私が生んだビューティーなプリンセス  
命があるのに動けない  
生きる世界がないから  
まるで私がプリンセスを閉じ込めている

誰の為に書き 誰かが読んで どう思うんだらう  
私の本を読み 私の事を知り どう思うんだらう  
恥ずかしくなって白紙にしてしまった My Note

繰り返し

並べる言葉に私の思いも書くよ

いつか白紙のストーリーがラブストーリーに変えるよ

だからもう少しだけ待っていてね…待っていてね…

第20話 幼馴染みですから！

平沢家で、楽しい笑い声が響いていた。

律「へ〜真鍋さんって、唯と幼馴染みなのか。」

和「和で良いわよ。」

律「そうか。じゃあ和。唯と結構付き合いが長いんだな。」

和「幼稚園の頃からだからね。」

漣「どういう経緯で、友達になったんだ？」

和「アレはね…。」

唯「の、和ちゃん！／＼／＼／」

和「良いじゃない。もっと唯の事を皆に知って貰った方がいいじゃない。」

唯「で、でも……／＼／＼／」

和が唯の恥ずかしい過去を話そうとしているのを制止させようとした……が

憂「はいお姉ちゃん。あ〜ん。」

唯「うう……／＼／＼／」パクッ

憂が差し出したケーキで唯を餌付けし、唯の口を塞いだ。

憂「（今ですよ。和ちゃん）」「アイコンタクト

和「アレはね……幼稚園の頃……。」

和  
視  
点

1  
1  
年  
前

唯の性格は、今と変わらずあの調子なのでね。

先生「皆、外で元気よく遊びましょう。」

全員「はい」

先生がそう言って、皆は外へ行くけど唯は……

唯「……。」「ペラッ

唯は、いつも隅っこで本を読んでいたのよ。しかもたった一人で

先生「唯ちゃん。外で遊ばないの？」

唯「……いい。私、絵本読む方が好き。」

先生「でも、皆と遊んだ方がもっと楽しいわよ。」

唯「いいよ。」「プイッ

そんな調子だから、当然友達なんて出来る事はなかったわ。自分から壁を作って孤立していたわ。

漣「目に浮かぶな。」

私は、そんな唯を見ていたら…放って置けなかった。同じクラスになれたのに、一人だけ馴染もうとし

ないなんて…私には…耐えられなかった。

だから…私は、思い切って唯に話を掛けたの

和「…ねえ…その本面白い？」

唯「!？」

和「面白いの？」

唯「……／／／／」コクン

和「そうなんだ。どういう話？」

唯「ジャックという男の子が…豆の木を拾って…植えたら…お空まで伸びるの…／／／／」

和「へ〜それで？」

唯「お空には、大きなお城があったの／／／／」

和「凄いね。」

唯「うん／／／／」

和「…ねえその絵本一緒に読もうよ。」

唯「えええ／／／／」

和「イヤ…だった？」

唯「う、うん…イヤ…じゃない…よ。」

和「じゃ一緒に読もう。」

唯「う、うん／＼」

和「コレがきっかけよ。」

紬「良い話。」

律「全くだ。絵に描いたような話だ。」

漣「よく…話しかけられたな。」

和「今思うと、不思議だね。あの一言で、話が進んで高校まで一緒にいるなんて。」

紬「きっと二人の絆が強いだよ。」

和「そうかもね。」

律「唯。和に愛されてるな。」

唯「…… / / / /」

唯は顔を赤くし、立ちあがった。

唯「ご、ゴメンなさい。今日本を図書館に返却する日だったから、ちよっと思って来ます。」  
「そう言い、家を飛び出した。」

私はフ〜とため息を吐いた。

和「逃げたわね。」

漣「逃げた？」

和「唯はね、恥ずかしく思うと必ず、図書館に行くっていう口実を

作って逃げるのよ。きつと帰ってきたら、両手にいっぱい本を持って来るわよ。」

律「わ、分かるのかよ。」

分かるわよ…だって…

和「幼馴染みですから。」

苦笑いをする自分が居た。

**第20話 幼馴染みですから！（後書き）**

さあ〜て次回のもし唯は？

和「和です。とある先生は、人と言う字は人と人が支えあっている  
すっと言っています。が、良く見ると、右の棒が支えているような気  
がします。思いませんか？

唯「次回もし唯。第21話 取扱説明書！よ。お楽しみにね。」



唯「……………／＼／＼」ズーン

律「おい。唯の奴どうしたんだ？いつものならここで、補足的なコメントを言うだろ？」

漣「…前回の白紙のストーリーを歌ったから、恥ずかしくって顔を会わせられないって。」

紬「どうしよう。」

和「…ハア…まかせて。」

漣「和！」

和「唯。新しい本が出ただけど…読む？」

唯「読む！」

三人「治った！」

唯「……………。」ペラッ

律「ウキウキしながら読んでるよ。」

和「大体こうすれば、元気出るわよ。」

漣「流石、幼馴染み。」

紬「唯ちゃんに、お茶淹れて来るわ。」

## 第21話 取扱説明書

和視点

唯が恥ずかしくなって、図書館へ行ったとすれば、しばらくは帰って来ないだろう。

憂「お姉ちゃん。いっぱい本を持って帰って来ると思いますから、私迎えに行つて来ます。どうぞ皆さん寛いで下さい。」

そう言い、憂は家を出た。相変わらず、唯とは違って明るくて礼儀正しい。本当に妹と姉が逆転しているじゃない。まあ、でも微笑ましい光景とも見える。それにしても、この家の主がいなくなるのは、いささかどうなのであるう？どうやって、時間を潰そうか考えていた。

そこへ、漣が私に話を掛けて来た。

漣「ねえ。唯は昔からあんな感じだったのか？」

和「ええ。コレと言って変化は無いわね。」

細「でも、変わらない良さってあるじゃない。」

ムギの言う通りかもしれない。唯が突然ハイテンションになったら、流石の私も戸惑う。でも少しくらい、明るい性格になって欲しいという願いはあった。なにせ、11年間私以外、友達はいない。あんな風だから、中学生の頃男子からは暗いと馬鹿にされ、女子からはブリっ子と言われていた。モチロン、唯はそんな気は無かった。幼稚園の頃からずっと一緒だから、唯を守ってあげなきゃと思っていた。

だけど…中3の時、進路は私と同じ学校に行くと言った時、嬉しかった半面不安が過った。高校でも唯はこんな感じで過ごすのかと。もしそうだとしたら、将来人との付き合いが、より一層悪くなってしまう。だから私は、心を鬼にして私以外の友達を作りなさいと言った。……そして、唯は見事にやってのけた。

和「…本当に…ありがとう。」

私はペコリと三人に頭を下げた。

律「どうしたんだよ改まって。」

和「…唯…私以外に、友達が居なかったの…あんな調子だから…浮いた存在になっていて…友達なんて出来なかったの…でも皆は、唯の友達になってくれた…本当に…ありがとう。」

私が深々と頭を下げながら、お礼を言った。

律「そんな、礼を言われるような事じゃ。」

和「でも…唯に友達が出来て…本当に嬉しかったの。よく笑うようになっただし。」

漣「確かに…ちょっとは、表情が豊かになって来たな。」

紬「可愛い笑顔ですよ。」

和「そう言ってくれて嬉しい。」

でも、まだ不安は拭いきれない。初めて出来た友達…唯はちゃんと

やっていけるのかな…この前、友達との接し方の本を読んでいたっけ。

律「なあ和。唯の幼馴染なんだろう？」

和「そうだけど。」

律「アイツの事を話してくれないか？」

和「えっ？」

律「まだ照れがあるせいかな…自分の事をあまり話そうとしないんだ。」

和「そう。」

澪「もう少し、アイツの事を知りたいんだ。」

紬「少しでも唯ちゃんの心が開かせたいの。」

和「……。」

唯…本当に…良い人達に出会ったわね。

和「あの子にとって初めての友達だから…まだ、接し方が良く分かっていないかもしれない。もしかしたら、変な事をするかもしれない…それでも友達でいてくれる？」

律「当たり前だ。」

漣「同じ軽音部の仲間なんだ。」

紬「拒絶なんて絶対にしません。」

三人の目は、嘘を吐いているような目ではなかった。本当に唯の心を開かせようとする目だった。

和「…唯は…一見風変わりに見えるけどね…。」

三人「うん……。」



和「本当に、風変わりなの。」

三人「んまっ!」「」

和「今から話す事は…唯の取り扱いみたいな事だから…しっかり頭に入れておいて。」

唯の取り扱い その1

本に書いてある事をよく鵜呑みにする。

ケース1

アレは、私達がまだ幼稚園児の頃。今で言う、昼休みのような時間の後、お昼寝の時間があった。一時間くらい寝るんだけど

その時、私グツスリ眠り過ぎちゃって、中々起きなかったの…その時…唯が…



……チユ

三人「……なっ!? / / / / /」

漣「し、してきたのか? / / / / /」

和「…… / / / / /」

律「も、モチロン……類……だよな / / / / /」

和「ううん…… / / / / /」

紬「ハアハア / / / / /」

漣「な、なぜ? / / / / /」

和「それが…。」

唯「チューすれば、目覚めるって本に書いてあったもん。」

和「唯ちゃん…何の本読んだの？」

唯「白雪姫。」

和「そ、そう…。」

和「だってさ。」

律「は、はは…まさかね／＼／＼」

和「まだあるわ。」

澪「まだあるのか？」

紬「聞かせて聞かせて／＼／」

ケース2

中2の冬

和「おはよう唯・憂。」

唯「おはよう和ちゃん。」

憂「おはよう唯・和ちゃん。」

和「今日も寒いわね。」

唯「寒いのか？」

和「うん。」

唯「じゃあ暖めてあげる。」

和「えっ？」

だきっ

律「だ、抱きついたのか／＼」

和「うん／＼」

和「ちよ、ちよっと唯？／＼」

唯「私さっきまで、コタツに入っていたから、私の制服は普通よりも暖かいよ。」

この時に、私は思ったの。また何かの影響じゃないのかと。

和「唯…何で…抱きつくの?」

唯「寒くなったら、抱き合って暖めあうって本に。」

ああ…やっぱりね

和「唯…何の本に書いてあったの?」

唯「八甲田山死の彷徨」  
はちこうたやましのぼろい

和「…やっぱり。」

世界山岳史上最大とも言われる犠牲者が発生した、青森県八甲田山における山岳遭難事故を題材として新田次郎が執筆した山岳小説である。一言でいえば…雪山で遭難した隊が、たくさん死んでいく話。

和「唯…もういいわ。」

唯「そう。」

和「それと…唯。こついう事、あんまり人前ではやっっちゃ駄目よ。」

唯「何で？」

和「何ででも。」

唯「はい」「シュン」

和「こついう事があったわ。」

律「た、大変だったな。」

漣「でも以外だな…唯にそういう所があるなんて。」

紬「可愛いわ…唯ちゃん／＼／／」

和「まあ何て言うか…天然かな？」

唯はいつも空想な世界に、夢見ていた。いつか、こんな不思議な事が起きるんじゃないかって。友達から借りた、何とかの憂鬱のヒロインと、少しばかり似ている気がする。差し詰め…私はその主人公みたいに、傍観者でありたいと願っている。

律「他にあるか？」

和「そうね…あっコレは重要。」

漣「なに？」

唯の取り扱い その2 泣いていても慌ててはいけない

漣「どじ言ひ事？」

和「アレは…小学生の頃。」

放課後、私は教室の机の中に、忘れ物を取りに行ったときなんだけど、教室に唯だけ残っていてね。

唯「うっ…グズッ…」。

その時、唯は顔を机に伏せて泣いていたの。

和「ゆ、唯！どうしたの？誰かに苛められたの？」

私は慌てて唯に泣いている理由を聞いたの……そしたら……

唯「ご、ゴンが……ゴンが……」。

和「ゴン？ゴンって誰？」

唯「コレ。」

『しんぞうね』

和「…えっと…それ見て…泣いてたの？」

唯「うん…。」ズズッ

透「…な、懐かしい。」

律「確か…アレの最後って…。」

和「悲しわよね。」

紬「どういう話なんですか？」

律「今度おしえてやるよ。」

和「取り合えず…唯が泣いていたら、スグに何の本を読んでいたのか聞きなさい。」

律「ああ。肝に銘じておくよ。しかし…本バツカリ読んで、暗い奴だと思ったけど…可愛いところあるじゃない。」

和「そういう風に言ってくれてありがたいわ…大抵の人は、そこで引いちゃって。」

透「確かに、最初は驚いたけど…唯は唯だ。」

紬「私達の大事な友達であり、大事な軽音部の仲間ですよ。」

三人は笑って言うてくれた。

**第21話 取扱説明書（後書き）**

さあ、さて次回のもしゆいは？

律「りっちゃんだぞ。ごんぎつねを読んだ時、確かに泣けたな。授業寝たけど。国語の授業に使われる話ってたまに、悲しい話とかあるよな。『オニタの帽子』とかさ。皆は、国語の授業で好きな話あったか？

律「次回もしゆい。第22話 記念写真 後に…！宜しく頼むぜ。」

## 小学生の頃

憂「ねえお姉ちゃん。昔和ちゃんに、キスしたんだって？」

唯「えっ？／＼／＼／…う、うん…（よく覚えていないけど）／＼／  
／／」

憂「駄目だよ！お姉ちゃんには、まだそついうのは早いよ！」

唯「えっ？」

憂「とにかく、軽々しく、キスなんてしちゃ駄目！分かった！」

唯「は、はい…。」「シユン

コレ以来、唯はキスをしなくなったという。

## 第22話 記念写真 後に…！

透視点

正直驚いた。唯にはそんな一面があるとい事に。やはり、人を外見で判断してはいけないというのは、確かに頷ける。唯の新しい一面を知って、私は少しばかりか、嬉しさを感じていた。それは、恐らく私だけでなく、律もムギもそうだと思う。

きつと唯は、絶対とは言い切れないが、私達を驚かすような事をするかもしれない。でも…唯は大事な軽音部の仲間であり…私達の友達である。ちよつとやそつとじゃ、拒絶なんかしない。私だって律に話を掛けられるまで、一人だった。いつか、律に拒絶されるんじゃないかという不安もあった。でも律はどんな時でも私と友達でいてくれた。

だから…決して唯を拒絶なんかしない

それから、一時間ほど経った時だった。

唯「ただいま。」

唯と憂ちゃんが、帰宅した。二人はたくさんの本を持っていた。

和「また、ズイブン荷物を持って来たわね。」

唯「…そんな事…言わないで／＼／＼」

和の予想は、見事の中したな

和「幼馴染みですから。」

それから、皆でお菓子を食べながら談笑したり、ボードゲームなどをした。

律が場を盛り上げ

ムギも律に便乗し

和はそんな二人を見て苦笑いをし

憂ちゃんは、律とムギの二人を見てクスクスと笑い

そして…唯は…借りたばかりの本を…読まず、いつも引きつった顔ではなく、安心したかのように、少しばかりの笑顔を見せていた。

私はそんな様子を見ながら、飲み物を飲んでいた。

だが楽しい時間は、あっという間に過ぎる物である。いつの間にか、親が心配するような時刻へとなっていた。なぜ、楽しい時間は、あつという間に過ぎるんだらう。つまらないと思つと時間は長く感じる。どこかの学者さんが、これを相対性理論と言っていた。詳しく分からないけど。とにかく、宴会での幹事の人が『宴会もたけなわですが』と云うには、丁度いいタイミングを迎えていた。

律「んじやまあ、今日の日を忘れないように、記念写真撮ろつぜ。」

363

そう言い、律はいつの間にか私のデジカメを取り出していた。

中央に唯が座り、左に私、右がムギ、ムギの後ろが和で、私の後ろが憂ちゃん。そして、唯の後ろが律の並で、タイマー撮影した。誰も目を瞑らず、良く取れていた。

その数日後、私が現像し、皆に渡した。





だがこの時、まだ知らなかった。

約半年後に、あんな事態が起きるなんて…この記念写真が…後に…  
あんな事態と繋がるとは…思わなかった。



この事は…私も律もムギも…唯も…まだ知らない。

半年経てばそれは、分かる事だ。

それまで、この事は頭の片隅に置いて居て欲しい。

秋山 澪

b  
y

第22話 記念写真 後に…！（後書き）

番外編

某所

作者「ふう〜今回の話が、出来たと。後は、次回予告を…。」

さわ子「ちょっと、作者！」

作者「おお。山中さわ子！どうした？」

さわ子「どうしたもこうしたもの無いわ！何で、私最近全然、出番が無いじゃない。」

作者「そりゃ…使い所がないし。」

さわ子「酷い！酷過ぎるわ！」

作者「イヤイヤ…アニメのでも、5話くらいから増えたじゃん。今回の話は、3話を元にして書いているからさ。」

さわ子「じゃ早く、5話の話を元にした話し書きなさいよ。」

作者「まだまだ先だ…それ以前、そこに漕ぎ付けるかどうか。」

さわ子「どう言う事？」

作者「顧問になるシーンはしよる可能性がある。」

さわ子「なっ何で!？」

作者「…実を言うと…私はあんまり、さわちゃん好きじゃないんだよね。」

さわ子「なっ!？」

作者「作者の脳内で行われている『けいおん人気ランキング』だと、ダントツのビリなんだよ。…ちなみに、ランキングは順位はこんな感じ」

- 第1位 平沢唯（もし唯バージョン）
- 第2位 平沢唯<sup>ノーマル</sup>
- 第3位 琴吹紬
- 第4位 秋山澪
- 第5位 田井中律
- 第6位 平沢憂
- 第7位 中野梓
- 第8位 立花姫子
- 第9位 真鍋和
- 第10位 鈴木純

第11位 山中さわ子

作者「まあこんな感じ。」

さわ子「何でもし唯ちゃんが1位なのよ?」

作者「好きだから。」

さわ子「何で、立花さんが入っているのよ!」

作者「モブキャラの中では、ダントツ1位だ。」

さわ子「鈴木さんよりも…下なの…。」

作者「ヤッパリ…キャラじゃね?最初初登場時のまんまだったら、純には勝てたか

もしれない。しかし…一気に壊れたな。」

さわ子「うるさいうるさい!しょうがないでしょ…ばれちゃったんだから。」

作者「服を無理矢理脱がしたりしてさ…エロオヤジじゃん。そんな事しちゃいけないよ。あくまでも教師なんだから。教師の風上にも置けないよ。」

さわ子「何よ!悪い?」

現在作者は、教員の研修を行っています。

さわ子「マジで？」

作者「マジです。いずれ教師になる可能性がある私の目から見ると…駄目ですよ。

それだったら、GTOの鬼塚先生の方がまだマシですよ。…ヤレヤレ、Tシャツを作ったからって、それで帳消しになると思ったら大間違い。アナタが、やってきた悪事の数々、アレだけでは消えませんよ。」

さわ子「うわああああん…グレてやる！」

作者「もうグレているだろう。…教師になるべきか、バンドを続けるか…それが問題だ。」

(ハムレットの有名なセリフを頂きました)

作者「取り合えず…さわちゃんファンの方…すいません。ちょっとした辛口コメントだと思って下さい。次回のもし唯は、第23話  
買い物!です。では、まったね。」

## 第23話 買い物！

律視点

ミーンミーンミーンミーン

6月中は、雨の音がたくさんしていたのに、いつの間にか外はセミの鳴き声が辺り中に大合唱をしていた。私達は一度も合わせていないのに、セミは7年間も土に埋まっていたのに、良く合わせられるもんだ。若干だが、羨ましい限りだ。しかし、黒板に書かれている日付を見ると、そんな事はドコかへ吹き飛んでしまう。

なぜなら…



律「もうスグで夏休みだ！」

夏休み…学生にとっては、一大イベント。祭りに行ったり、プールに行ったり、朝から晩まで遊んで、夜ふかしをして、昼ぐらいに起きる。正しい、夏休みの過ごし方だ（作者談）

そう考えるだけで、こんな熱さがなんだ。逆に、元気になっちまうぜ

つと言いたいが…冷房がきいていない…まあ…ほらね…アレのせいだから…ねえ…使えないんだよ…うん…だから…暑くてダルイ。暑さと闘いながら、階段を上り、部室へやって来た。そこには、汗をたらしながらも、ギターの練習をしている唯がいた。

唯「あつ…こ、こんにちは／＼／＼」

律「おつす。唯オンリー？」

唯「……。」コクン

大分唯の首の振りが見えてきた。最初は、数ミリしか動いていなかったから、全然分からなかった。だが、最近は分かるようになってきた。慣れって奴？

律「取り合えず、少し休め。今日も熱いんだから、無駄に体力が消費しちまうぞ。」

唯「…はい。」

唯は、ギターをスタンドに置き、自分の席に着いた。そして、鞆から一冊の本を取り出し、読み始めた。

律「…唯…何の本を読んでいるんだ？」

唯「シャ…シャーロック…ホームズ。」

律「おお。あの探偵か。面白いか？」

唯「お…面白い…です／＼／＼」

律「どういう所？」

唯「…レトロな時代」

律「そ、そうか…。」

相変わらず、会話が続かない。漣…ムギ…早く来てくれ。私には、この空気耐えられん。

その願いが通じたのか、漣が勢いよく部屋に入って来た。

律「よお溇！」

救いの手が来たと思うかのように、溇を呼び掛けた。だが、溇は私の言葉が入っていないなかったのか、とある発言をした。

溇「…合宿をします！」

律「はあ？」

唯「合宿？」

…空気が一気に変わった。

律「なんだよ藪からスティックに。」

溇「スル します。」

ガーン

漣「もうスグで、夏休みになるのに、一度も合わせていないんだぞ。夏休み明けには、桜高際が控えているのに、コレは大問題だ。と言う訳で、朝から晩までみっちり練習するぞ。」

律「学園祭か。メイド喫茶がやりたいな。」

ゴツ  
ン

律「あう!?!」

漣「お前な!もつと危機感を持って!」

漣のゲンコツが落ち、説教が始まった。

唯は漣を落ち着かせようと、どうにかしようとして、オロオロしていた。唯…取り合えず、何か一言だけでもいいから言ってくれ。そうすれば、何とか打開策が。

しばらく、漣の説教が続いていると

紬「遅れてすいません。」

マジな天使が降臨した。

紬「えっと……タルト…食べる。」

ムギの言葉により、救われた。

私はタルト食べ、唯は本を読みながら、時折紅茶を啜っていて、漣はムギに合宿の事を話した。

ムギは、目を輝かせ

紬「いいですね。やりましょう。私、友達と合宿するのが、夢だったの」

…小さい夢だな。

律「ヤッパリ、合宿するなら海だろ！海で泳いでバーベキューしてさ。」

漣「遊びに行くんじゃない！」

唯「……でも、この時期から予約してもいっぱいだと思いますよ。それに、予算どれくらい掛かるんですか？」

律漣「あっ！」

唯「す、すみません！」本ガド（本で顔を隠す）

唯にしては、珍しく的確な発言だ

漣「うーん…なあムギ…別荘とかは…？」

紬「ありますよ」

あるんかい！

とまあ…場所は問題ないようだ。しかし、もう一つ問題を解決をしなければならぬ事がある。

律「漣。折角海に行くんだからさ。泳ごうぜ。」

漣「律！」

律「分かってるけどさ。目の前に海があるのに、泳がないなんてさ、勿体ないぞ。」

漣「でも。」

律「それに、ずっと練習しても身に入らないぞ。少しは息抜きをす

る為にさ。」

漣「お前はいつも抜けているだろ！」

紬「まあまあ、落ち着いて。」

漣「うっ。。。」

律「ちゃんと練習するからさ…なっ？」

漣「…ちゃんとやる？」

律「やりますさ。」

漣「分かった。」

律「ようし。各自水着を絶対に忘れるなよ！」

紬「はあい。」

漣「はあ。」

律「唯。水着あるよな？」

唯「はい…学校のが…。」

律「えっ？」

学校のが？……まさか……それって……

律「お前……スクール水着を持って来るつもりか？」

唯「だ、駄目ですか？」

透「他に水着は？」

唯「無いです。」

ブツン

私の中の何かがキレた音がした。そして、唯を立ちあがらせた

律「唯…行くぞ。」

唯「えっ？ドコですか？」



## 第23話 買い物！（後書き）

さて、次回のもしゆいは？

唯「ゆ、唯…です。『シャーロックホームズ』は、19世紀のロンドンが舞台です。その時代のロンドンは、階級差別が激しく、貧民な子供が多かった時代。ホームズは、そんな子供と協力して事件を解決していきました。ホームズは、時代の光と言われていました。」

唯「次回もしゆい……第24話 水着！です……ハア〜。」

唯「ちなみに、1888年に、実在していた殺し屋。ジャックザリ  
ツパは、暗い闇と言われていました。」

劇場版名探偵コナン ベイカー街の亡霊より抜粋

## 第24話 水着！

細視点

りっちゃんが唯ちゃんを連れて、外へ飛び出して行ってしまったので、私と漣ちゃんも二人を追いかけた。

それから数分後

律「おせえぞ！」

漣「二人の鞆+唯のギターを持って来たんだぞ。」

唯「す、すいません／＼／＼」

漣「唯は気にするな。悪いのは、律なんだから。」

律「悪者扱い？」

漣「イキナリ、唯を引っ張って行ったんだぞ。」

唯「…あの…本当に、水着…買うんですか／＼／＼」

律「当たり前だろ！高校生になって、スクール水着なんてよ。」

唯「ご、ゴメンなさ／＼／＼」

唯ちゃんは、震えていた。りっちゃんに対して震えているのか、これから選ぶ水着に震えていたのかもしれない。

漣「大丈夫だ唯。変なのは選ばせないから。」ナデナデ

唯「ふわっ／＼／＼」

漣ちゃんが唯ちゃんの頭を撫でると、震えが治まった。

漣「それにな唯。せっかく高校生になったんだから、少しくらい大人っぽい水着を着たってバチは当たらないぞ。」

唯「…はい…分かりました／＼」

そして、水着売り場へやって来た。

律「よっしゃ。早速水着を選ぶぞ。」

りっちゃんは、真っ先に店内を散策した。…りっちゃん…当初の目的忘れていない？

透「全く律の奴。自分が言い出して置きながら、結局は唯の事をほったらかしかよ。」

唯「……。」

透「しょうがない。唯、一緒に水着を探そう。」

透ちゃんは、唯ちゃんを手を引いて、店内を回りに行った。私から見ると、透ちゃん…まるで、唯ちゃんの保護者見たい。もう少し、二人の様子を見て和もつかと思ったけど

律「なつムギ。この水着どう思う？」

りっちゃんが、一着の水着を私に見せに来た。

紬「可愛いと思うわ。」

律「本当か？」

紬「試しに、試着してみたら？」

律「そうする。」

そう言い、りっちゃんは、試着室へ行った。

数分後

律「どうだムギ？／＼／＼」

紬「いいわりっちゃん。とっても可愛いわ／＼／＼」

御世辞でなく、本当にそう思った。いつも制服姿しか見た事が無かったから、目の前に水着姿でいるもの。お世辞なんて出て来ないわ。

律「そうか。ムギがそう言いなら、コレにする。値段もそれ程高くないし。」

りっちゃんは、制服に着替え、水着をレジへ持って行き、会計を済ませに行った。

さてっ、肝心の唯ちゃんの方はどうなったのかしら？私は、二人を探した。

すると漣ちゃんが、試着室の前に立っていた。

紬「漣ちゃん。」

漣「ムギ！」

紬「唯ちゃんは？」

漣「今、試着している所だ。」

唯「み、漣ちゃん…／＼／＼」

唯ちゃんが、試着室のカーテンから、ひょこっと顔を出した。

漣「どうした唯？」

唯「えっと…その…着替え…終わった／＼／＼」

漣「じゃ見せてみる。」

唯「で、でも…は、恥ずかしいです／＼／＼」

漣「大丈夫だって、私たち以外の人は居ないからさ…ホラッ。」

漣ちゃんが、カーテンを開けた。

唯「ふえ！／＼／＼」

そこには、水着姿の唯が立っていた。モジモジして、露出している肌を手で隠していた。

唯「ど、どう…ですか…／＼／＼／」

可愛い…さっきのりっちゃんと引けを取らない可愛さ。写真を撮りたいけど、店内は写真撮影は禁止されているから、出来ないのよね？ちよつと残念。

漣「なかなか良いぞ。サイズもピッタリだろ？」

唯「は、はい…／＼／」

紬「可愛いわ唯ちゃん。唯ちゃんが選んだの？」

唯「漣ちゃんが選んでくれました。」

良いセンスしているわ漣ちゃん。

唯「…あの…この水着買います。」

漣「いいのか？他の水着も見た方が…。」

唯「いえ。漣ちゃんが選んだ水着だから…コレにしたいんです。」

透「唯。」

その後唯ちゃんは、透ちゃんが選んだ水着を購入した。

ちなみに、私と透ちゃんも水着を買いました。透ちゃんの水着は、唯ちゃんが選びました。

律「いや〜結局、全員水着買ったな。」

透「全く言い出しっぺのお前が、唯の水着を選ばなくてどうする?。」

律「いいじゃねえか。唯も喜んでいるし。」

唯「はい。とても楽しかったです。

透「まっ唯がそう言うなら。」

私も今日は楽しかった。制服姿とはまた違う姿が見れたもの。

唯「あの…。」

漣「どうした？」

唯「今日は、本当にありがとうございました。」

律「いって事よ。」

漣「お前は何もしていないだろ！」ゴチン

律「あうっ！」

唯「本当に今日は楽しかったです。…私、こつやって、お買い物した事がなかったから…だから…また…皆さんと、お買い物してくれますか？」

返事モチロン

三人「」「」「」

唯ちゃん…焦らずユックリでいいから、心を開いて。

皆が買った水着は、アニメ第一期の第4話に着ていた水着だと思  
って下さい

第24話 水着！（後書き）

さて…次回のもし唯は？

書く事がありません



律「コラッ！」

作者「何だよりっちゃん？」

律「書けよ。いつもの部分書けよ！」

作者「ネタがねえんだよ！書く事がねえんだよ！」

律「逆切れ？」

作者「毎回、毎回、考えるのが大変なんだよ。」

律「分かるけどさ、そこを考えるのが、小説を書く奴だろ。」

作者「うるさい！うるさい！次回、もし唯第25話 出発前夜！だ  
次回も見ろ！」

律「閉めるな！」



## 第25話 出発前夜！

憂視点

お姉ちゃんは、現在明日合宿へ行く為の準備をしています。とっても楽しそうに、鼻歌を歌っていた。

憂「お姉ちゃん、必要な分だけの服入れた？」

唯「入れたよ。」

憂「水着は？」

唯「入れたよ。」

憂「ウフフフ。」

唯「どうしたの憂？」

憂「お姉ちゃん。とっても楽しそうだって。」

唯「そ、そう／＼／＼？」

憂「うん。昔、林間学校に行く時は、そんな感じじゃなかったよ。」

唯「そうだったけ？」

憂「うん。よっぽど、軽音部の皆さんと一緒に行くのが楽しみなんだね？」

唯「…うん。」

お姉ちゃんは、軽音部に入ってから、とつてもイキイキしています。顔を暗かったのに、今では最近良く笑うよになりました。ヤッパリ、部活を始めて良かったなと思います。

憂「お姉ちゃん、ギターを忘れちゃ駄目だよ。」

唯「分かってる。」

憂「明日は、何時に集合なの？」

唯「えつと7時30分に、駅に集合。」

憂「じゃ6時に起きた方がいいね。」

唯「うん。」

憂「夜更かししないで、早く寝てね。」

唯「はい。」

しかし

憂「えつと…横になつたのは良いけど…楽しみで全然寝付けなくて、  
気晴らしに本を読んだら、夢中になっていて、気が付いたら朝にな  
っていたと？」

唯「……」。「コクン

遠足前の子供？

現在の時刻… 7時10分

憂「と、取り合えず、顔を洗って、歯磨いて。私は、トースト焼くから。」

唯「はい！」

この日の朝は、ドタバタして良く覚えていないけど、お姉ちゃんはパン銜えながら（くわ）ギターを背負い、私は荷物を持って駅まで走りました。…今度からは、お姉ちゃんよりも先に起きようと思いました。

（憂の日記より）

第25話 出発前夜！（後書き）

さて、次回のもしゆいは？

憂「憂です。お姉ちゃんは、トーストパンにジャムを塗って食べるのが好きです。私は、ブルーベリージャムを付けて食べます。皆さんは、何を付けて食べますか？」

憂「次回もし唯。第26話 雑談！です。」

唯「ちなみに、作者はマヨネーズを付けて食べています。」

## 第26話 雑談!

某所

作者「イヤ、もうスグで一年が終わるな。」

唯「本当早かったね。」 ノーマル唯です。

紬「つい最近お正月だったような気がしますわ。」

律「まっ一年なんて、こんなもんだろ?」

作者「嫌になるね。歳を取ることになくなってよ。この調子じゃ、一年過ぎるのが、爺さんになった時には、F1カーが通り過ぎる並みのスピードで、一年が通り過ぎるんじゃない?」

唯「私は、まだまだ大丈夫そうだね。」

作者「イヤイヤ、実際ベンジョンソンが、走り去るぐらいの早さまで来てるぞ。気を抜いたら、もうそこまできているからねベンが。」

律「マジかよ。ベンが来ているのか？私はベンより、ボルトの方がいいぞ。」

紬「カッコいいですものね、ボルトさんポーズとか。」

作者「まあ要は、今年も充実した一年を送ったって事じゃね？」

唯律紬「「「そうだね。」」」

ド  
――  
ン！

透「送ってないだろ！まだ7月だぞ7月！夏本番を迎えているのに、  
何で作者の自宅でコタツ入ってたんだ！？何で私達、厚着しているん

だ！何で季節がいきなり冬になっているんだ！まだ約5ヶ月も残っているんだぞ！ってコレおもいつきり、銀魂のパクリだ！」

作者「だってさ。この話を下書きしたのは、12月だもん。」

律「作者の都合で、ドンドン遅れてこうなったんだぞ。」

漣「連載始まったの5月だろ！」

作者「しょうがないだろ。ライブやったり、勉強したりして、3月のアレのでパソが壊れて、データも消えて、こうなったんだから。」

漣「だからって、ワザワザ、下書き通りやらなくても。」

作者「まあぶっちゃけ。この先の展開、全然考えていないから、今日はトークでお茶を濁そうっていう事で。」

漣「とんでもない事を発言したよこの人。」

紬「まあまあ元々、けいおんは、こつやってお茶を飲みながら、談笑するのがけいおんでしょっ？」

唯「そうそう。」

漣「まあ…否定は…出来ないけど。」

作者「と言つ訳で、今回は連載26回目記念つて言つ事で。」

漣「微妙な数字。」

作者「スペシャルゲストとして、中野梓さんが来てくれました。」

梓「ど、どごも。」

唯「わぁあずにゃん！」

梓「ちょ唯先輩！」

律「梓の初登場が、ここでいいのか？」

作者「まあ二年生編考えていないし。」

漣「おい！」

作者「てなわけで、放課後ティータイムが揃ったと言う事で、トクを始めたいと思います。」

紬「本編では、まだ放課後ティータイムって出ていないのに。」

作者「けいおん…人気あるね。」

律「そりゃね。12月に映画も公開するし。」

唯「大学編も始まったし。」

梓「在学編もです。」

作者「そう。けいおんがここまで人気が出るとは、誰が予想した。ここまで、人気が出るとは予想外だった。」

漣「元々、4コマ漫画だったのにな。」

作者「全く。大したもんだよ。4コマ漫画が、こんなに人気が出るなんて。サザエさん以来だな。」

唯「へ〜アッって4コマ漫画だったんだ。」

作者「アニメの最終回は、泣けたな。唯達が梓に送るった歌は、最高だった。まさか、復活するとは。」

律「たぶん。原作者も予想外だったんだろうな。」

作者「果たして、人気は維持できるかどうか不安だが。ま、見守ってやるう。」

紬「…らき すたも大学編やりましたが…人気…それほど。」

梓「ムギ先輩。それは、言っちゃだめですよ。」

作者「まあ不安はあるが、きっと大丈夫だ…うん…梓…ちゃんと唯と再会するのかな？」

梓「それは、原作者次第ですよ。」

作者「放課後ティータイム…復活してほしいよ。」

漣「大丈夫だって…きっと…。」

作者「うん…大丈夫だよ。よし湿っぽい話を止めて、話を変えよう。実はさ、もっと良い最終回があるんじゃないかと思ってさ、考えたんだよ。」

律「おっもう一つの最終回ってか？」

作者「そうなんだよ。きっと、泣けると思うんだよ。」

唯「見せて、見せて。」

作者「いいぜ。俺が考えた最終回は…これだ…1 2 3。」

透「ベストハウス？」

唯「…私は、ここにいる意味はあるのかな？高校からギターを始めたけど。スグに、コードは忘れる。音楽用語は覚えられない…本当に、放課後ティータイムにいていいのかな？」

和「けど、何か新しい事を始めたいと言ったのは、唯。アナタよ。」

律「自分を追いつめてしまつたら、一掃の事、捨てちまつた方が気が楽だぜ。」

漣「大丈夫だ唯。私の方が、恥ずかしい目にあっているだぞ。」

紬「唯ちゃんの凄い事は、一つの事に集中して、後は忘れちゃう事よ。」

憂「お姉ちゃんは、どんな事しても私は、お姉ちゃんの味方だよ。」

純「……特にありません。」

梓「皆さんは、忘れていると思いますが、唯先輩には絶対音感があるじゃないですか。」

さわ子「私より断然若いんだから、気にする事は無いわ。」

唯「でも……ギターやらなくなったら、私は二一トまっしぐらだよ。  
自分が嫌いだ。」

梓「アナタはバカですか！先輩の笑顔にいつも私は、救われているんです。先輩と一緒に演奏している時が、一番楽しいんですよ。」  
透「自分を非議するな。」

律「お前は、どんな時でも笑顔を忘れない。」

紬「それが、アナタなんじゃない？」

唯「そうか…私は…ここに居て良いんだ。私は放課後ティータイム

に、居て良いだ！」

全頁「わあああああああああああああ！……！」

パチパチパチパチパチパチ

遷「おめでとう。」

梓「おめでとう。」

紬「おめでとう。」

なわ子「おめでとう。」

純「おめでとう。」

和「おめでとう。」

憂「おめでとう。」

律「おめっとうねん。」

唯「皆…ありがとう。」

桜ヶ丘に、  
ありがとう





わむ子に、わよなら  
ら



ンに

そして、全ての放課後ティータイムファ

UNIVERSITY



全員「パクリだろ！」

作者「アレっ？分かった？」

梓「どう見てもエヴァンゲリオンじゃないですか！？」

作者「バカ者！エヴァンゲリオンじゃない。エヴァンゲリオンだ。」

梓「どっちも一緒じゃないですか！」

律「梓がアンタバカですかってあたりから、オヤツ?と思ったが。」

漣「皆がおめでとぅって言った瞬間確信に変わったよ。」

作者「ぜひとも、映像で見たい。」

漣「TBSに、許可降りると思うか?」

唯「それに、あんまり知っている人も少ないと思うよ。」

作者「そうか…じゃコレはどうだ?」  
1  
2  
3

紬「そもそもコレもフジテレビの…。」



和「待ちなさーい！律！」

律「ヤベエ！じゃあな！透！」

透「り、律！」

ブオオオオオーーーーー

唯「りっちゃん！早く乗って。」

律「ヨッシャ逃げるぞ！」

ブオオオオオーーーーー

和「全く…まんまと盗んだわね。」

漣「違うよ。アイツは、何にも盗まなかったよ。私の為に、戦ってくれたんだよ。」

和「いいえ。律は、とんでもない物を盗んで行ったわ。」

漣「えっ？」

和「アナタの心よ。」

澪「はい。」

和「それでは、私はこれで。」敬礼

ウーウーウー

和「律達を追いなさい！」

部下「ハッ！」

ウーウーウー

透「…また会えるよな…律。」



作者「あつ分かった？」

漣「分かるよ！和のアナタの心です所のセリフ、有名なセリフだろ！」

唯「ちょっと作者さん。」

漣「唯も言っやってくれ。」

唯「…何でりっちゃんがルパンで、私が次元なの！？」

漣「そこかい！」

作者「いいじゃん相棒的で。ちなみに、ムギが不二子で、梓が五右衛門ね。」

梓「私が五右衛門？」

作者「そりゃね。髪が長いから、ちょんまげ的な事が出来るだろ？」

梓「だったら、ムギ先輩だつて。」

作者「ムギは、スタイル的に不二子だろ。」

梓「ガーンorz」

紬「作者さん。」

作者「何？」

紬「…ぜひともこの小説書いておきたい。」

透「はいっ？」

紬「透ちゃんの心が、どのようにしてりっちゃんに奪われたのか、見てみたい。」

作者「ほほう…お主…中々の悪よの〜。」

紬「いいえ。アナタ様ほどでは。」

梓「何か…どす黒いオーラが。」

透「律も黙ってないで、何か言え。」

律「……／／／／／」

透「律？」

律「えっ？イヤ…その…何だ…うん。いいんじゃないね。たまには、こんな展開も。」

透「コラッ！」

作者「りっちゃんも話が分かるね。」

律「べ、別に…／＼／＼」

作者「よし。んじゃ、次回から泥棒りっちゃん。カリオスト口の城を連載すたー…」

「ア  
ン

」

作者「あべし！」

梓「北斗の拳？」

透「もし唯を完結させてからにしろ。」

作者「い、イエッサ。」

唯「次回、もし唯。第27話 車内にて！だよ。」

作者「勝手に次回予告するな！」

梓「取り合えず、来年もよろしくお願いします。」

澪「だから、まだ7月だって！」

紬「しょうがないじゃないですか。12月に書いたんですから。」

律「これからも、もし唯をよろしく頼むぜ。」

作者「ちよつとでも良いから、応援して下さい。」  
「m」  
「m」

## 第27話 車内にて！

透視点

ガタンコトン ガタンコトン

律「いや〜間に合って良かった。」

唯「本当に、ゴメンなさい。」

電車が来る5分前に、唯と憂ちゃんが息を切らしながらやって来た。何とかギリギリ間に合う事が出来た。

唯「本当すいませんでした。」

唯はずっと謝りっぱなしだ。

透「唯、気にするなって。間に合ったんだし。」

唯「でも…。」

これから、合宿行うのに、こんな状態じゃ練習に支障が出る。和から教えて貰う前からやっていたが、アレをやるう

透「唯。」 ナデナデ

唯「ふえ！／＼／＼／」

漣「皆気にして無いから、もう謝らなくていいよ。」

唯「…はい／／／／」

唯の取り扱い

元気が無い時には、頭を撫でれば大抵は元気を出す。by和

律「まっどうせ。あまりの楽しみで、全然眠れなくて、気晴らしに本を読んでいたら、いつの間にか朝になっていたって言うオチだろ？」

唯「……／／／／」コケリ

律「ハハ唯らしいよ。」

唯「何で、分かったんですか？／／／／」

律「3か月も経てば、大体分かるよ。」

唯「凄いですね。」

律「まっ部長だからな。」

漣「それにしても、部活の中では一番だらけていないか？」

律「う、うるせえ！やる時には、やる人なんだよ。」

唯「しっ！」

唯が人差し指を立てた。そして、ある方へ指をさした。

紬「すう〜。」

ムギが気持ちよさそうに、眠っていた。

律「ここにも、楽しみで眠れなかった人発見。」

唯「夢だったって言っていましたからね。」

紬「うふふ。ゲル状が良いの？」

何の夢を見ているんだこの人は？

律「よし。写真撮ろっぜ。」

唯「止した方が…。」

律「記念だよ記念。」

律がムギの寝顔を撮った。すると、シャッター音に反応したのか、ムギが目を覚ました。

紬「あっゴメンなさい。寝っちゃってました。」

律「なっムギ。後どのくらいで、到着するんだ？」

紬「えつと…。」

ムギがチラツと窓の外を見た。窓の外は、トンネルに入っていて、真つ暗な景色がずっと続いていた。ムギが律の方へ視線を戻すと

紬「もう少しです。」

そう言った瞬間、トンネルを抜けた。そこには、青い空、青い海が一面中に広がっていた。

律「おおおお！スゲ　　！」

律は勢いよく、窓を開け顔を出し叫んだ。

律「唯。お前もやれよ。気持ちいいぞ。」

唯「顔を出したら、危ないですよ。」

律「大丈夫だつて。ほらっ！」

唯「ふえええええ！」

律に引つ張られ、窓の外に顔を出すと、髪が激しく靡いていた。

律「どうだ気持ちいいだろ？」

唯「は、はい……。」

唯の髪はボサボサになってしまった。

漣「全く。危ない事やらせるな。」

律「ハハハ。ワリイワリイ。」

唯「いいえ。大丈夫です。」

私は、鞆からクシを出した。

漣「ほら唯。おいで、髪を整えてやるよ。」

唯「えつでも…。」

漣「いいから。」

唯「はい／＼／＼」

唯が背を向け、クシで髪を整えた。

唯「あ、ありがとうございます／＼」

律「漣。私にも。」

漣「お前が発端だろ。自分でやれ。」

律「漣ちゃんのケチ。」

漣「ケチで結構だ。」

私は頬を付き、窓の外を眺めた。景色を見ていると、心が躍るが、その反面ある不安が拭い切れなかった。一番頼りになる、ムギに話そうかと思ったが、今は止めてこの景色を眺めていたい。

第27話 車内にて！(後書き)

さて、次回のもし唯は？

紬「紬です。夏本番です。日差しは避け、小まめに水分補給をして、熱中症に気を付けて下さい。でも冷たい物の食べすぎもいけませんよ」

「 次回もし唯。 第28話 合宿の動機！です。」



唯「水分だけでなく、塩分も必要ですよ。」

## 第28話 合宿の動機！（前書き）

これからのもし唯について

最近、誰かの視点で描かれています。基本的には透視点で行きま  
す。（キヨンのように、物語の進行役）時折、別の人視点で描かれ  
ますが、気にしないで下さい。

## 第28話 合宿の動機！

透視点

それから、電車で揺られ数十分ムギの別荘に着いた。別荘とは思えぬ、庭の広さでどっしり建っていた。別荘と言うより館と言った方がいいかもしれない。

律「デツケエな。」

唯「す、凄いです。」

紬「ゴメンなさい。一番大きい所を借りようと思ったんだけど、一番小さい所しか開いていなかったから、我慢してね。」

三人「……一番小さい？」

コレで、一番小さいって…じゃ一番大きいのって一体？まあ疑問は、風と一緒に吹き飛ばして置き、中に入った。中は案の定、広くて豪華な家具、冷蔵庫には豊富な食料が入っていた。



ムギに案内され、スタジオに入った。

漣「おお！」

アンプに、上等なドラムセットが並んでいた。

紬「どうかな？」

漣「うん。大丈夫だ。」

ここまでしてくれて、本当にムギは心強い人だ。私は一生この人だけに頭は上がらないな。その為にも、この合宿無駄にする訳にはいかない。早速ベースを出して、調子を見ようとした、っとムギが私に話を掛けて来た。

紬「ねえ漣ちゃん。」

漣「うん？何？」

紬「どうして、合宿やるつもりだったの？」

漣「……。」

私は無言で、鞆からラジカセを取り出した。スイッチを入れると、音楽が流れた

紬「……上手。」

漣「この間部室を掃除してたら出て来たんだ。何年か前の桜高際の軽音部の演奏らしいんだ。……コレを聞いたら……居ても立ってもいられなくて……。」

紬「そう。」

不安だった。普段練習をしているが、お茶してお菓子を食べている毎日。おまけに、初心者である唯の為に、指導しているからムギが作ってくれた曲を一度も合わせていない。もうあまり時間が無い。私は焦っていた。だから、この合宿を始めたんだ。

ムギにそう言うと、ムギは笑った。

紬「大丈夫よ澪ちゃん。」

澪「えっ？」

紬「皆…上手く行くわよ。」

澪「…そうか？」

紬「ええ。大丈夫。」

ムギの笑顔を見ると、ドコと無く安心感が湧いて来た。

バターーーーーーン

スタジオのドアを勢いよく開いた。

律「泳ぐぞ!!」

……前言撤回……不安だ。

第28話 合宿の動機！（後書き）

さて次回のもし唯は？

唯「ゆ、唯……です……。えっと……皆さん、かき氷は好きですか？私  
は、好きです……イチゴ味が大好きです。み、み……皆さんは、何味が  
……好きですか？／／／／／／」



唯「次回、もし唯。第29話 泳ぐor練習!です。た、楽しみに  
しててください。」

唯「ちなみに、ブルーハワイは、カクテルの名前から取ったみたい  
です。」

## 第29話 遊ぶor練習!

漣「…律。遊び来たんじゃないんだぞ。」

律「目の前に、海があるのに泳がないバカがドコに居る!?!」

漣「数時間後のお前の姿が目に見えるんだよ!」

数時間後の律

律「あゝ遊び疲れた。なあ今日は練習いいんじゃないねえ?」

漣「って言うに決まっている!」

律「そ、そんな事……ないぞ。」

漣「今の間は、何だ?今の間は?」

「とにかくよ、最初おもいきり遊べば、練習に身が入るからさ。」

「お前は、見に入るところか、体力とやる気が身から離れるだろ！」

律「そんなことない！」

漣「いや。絶対そうだ！」

私と律が、あくだこくだ言い合っていると、唯が私の袖を弱弱しく引っ張って来た

唯「……」ブンブン

怯えたような目で、首を横に振っていた。唯の目を見ていると『ケンカしないで』と伝えているようだった。

漣「……ゴメン唯。ちょっとカッとなっていたみたいだ。」

と言いながら、唯の頭を撫でた。唯は安心した顔をした。

律「じゃあ多数決で決めようぜ。」

漣「よしいだろう。」

迂闊だったな律。唯とムギも合宿の本来の目的を理解している。遊ぶ気満々なのは、お前だけだぞ。3対1なのが、目に見えてきた。

律「先に遊ぶのがいい人？」

律「はい！」

紬「はい！」

まさかの裏切り？

漣「ムギ!?!」

紬「ゴメンね漣ちゃん。」

ムギはニツコリ笑いながら謝って来た。

漣「…唯は練習の方がいいよな？」

唯「……」コクン

漣「私も当然練習だ。」

律「っで結局2対2かよ。」

事態は一向に進展しない。どうしたらいいのやら？私が考えていると、唯はスタジオを出た。しばらくすると、二本の割りばしを持っていて、私と律の前に出した。

唯「…引いて…下さい。」

律「クジで決めようってか？」

唯「……」／／／／「コクン

…唯。唯なりに考えたんだな。ケンカせず、お互いが納得する方法を。

漣「よし。クジで決めるか。コレだったら、お互い納得行くし。」

律「よし。漣。お互い恨みっこなしだぞ。」

漣「分かってるよ。」

ここで、恨みっこなんかしたら、唯に申し訳ない。

唯「どっちが、赤く書いてあります。」

律「よし。ムギ行け！」

紬「私？」

律「何か、ムギの方がクジ運が強そうだから。」

紬「わあ。私、クジするのが夢だったの。」

べつと言つた夢だと言つてミミ「ハハ、置いといて。」

漣「ムギが、選んでいいぞ。」

紬「いいの？」

漣「ああ。」

残り物には福があると言つて、ここはそれに従おう。

紬「よし。じゃ……」つちにするわ。」

漣「じゃ私はコッチな。」

漣・紬「せーの〜」「！」



ザザ  
ン

律「さあ行くぞ————！」

ザッパ————ン

律「ほらっ唯もこんな物は取った取った。」

唯「ふえ！わ、私日に焼けたく……。」

律「泳ぐぞ!!」

唯「ふええええええ!!」

ザッパ  
ン

澪「…唯…ゴメン。」

くじ運のない私を許してくれ

第29話 遊ぶor練習！（後書き）

特報

唯「ここ…どこ？」

律「…恐らく…無人島？」

無人島に流された唯と律

律「何としても生き延びるしかない。」

唯「…う、うん。」

未だ律に打ち解けていない唯。そんな二人の奇妙なサバイバル生活が始まった。

律「ここが、二人の拠点だ。またの名は、愛の巣。」

唯「りっちゃん／＼／＼」

そんな事を言っていた二人だが、まだこの時には知らなかった。この島の秘密を

律「何だよあの遺跡？」

唯「未発見かな？」

島の奥に眠る何故の遺跡

律「宝物があるのか？」

唯「りっちゃん止めた方が…。」

律「もしかしたら、船があるかもしれないぞ。」

遺跡の中に入る二人

謎の怪物、数々の罟

一体この遺跡は、何なのか？この島の秘密は一体？

唯「りっちゃん！」

律「唯…どうしても…お前に言いたかった事があるんだ…。」

二人の運命はいかに？

LOST 少女二人のサバイバル

乞うご期待！





律「って待てい！」

作者「どうした？」

律「何だよあの予告は？本当にやるのか？」

作者「ううん。嘘予告。」

律「嘘かい！？」

作者「しょうがないだろ。いつもサザエさんみたいな予告だと、ネタが無くて困るんだよ。だから、もし唯を書き始める前に、ポツにした作品を予告風アレンジしたんだよ。」

律「これから、毎回やる気か？」

作者「まあね。結構あるんだよ。もし唯を書く前に、ポツになった作品。」

律「いくつあるんだ？」

作者「さあ。把握していない。」

律「おいおい。」

作者「まあそう言わないで、次回もし唯。第30話 楽しもう！よろしく」

第30話 楽しもう！

律「唯。水が冷たいぞ。」

唯「海ですからね。」

律「唯、しょっぱいぞ。」

唯「海ですからね。」

律「唯。波だぞ。」

唯「海ですからね。」

律「…コノヤロー……!!」

律は唯にチヨークスリーパーを掛けた。

律「さつきから、そっけなさ過ぎだろ！」

唯「じゅ、じゅめんなさいー!!」

ドロ

ン

漣「止める! 律」

律「ぐお!」

掛けられている唯を救出した。全く、唯はお前と違って、か弱いんだぞ

漣「全く、唯あっちに行こう。」 ナデナデ

唯を撫でながら、浜辺の方へ行った。

漣「まあ取り合えず座ったら?」

唯「はい。」

浜辺に広げているビーチパラソルの下に座らせた。

漣「ゴメン。クジ運が無くて。」

唯「…気にしないで下さい。」

そう言う唯の言葉が、胸が痛むな。

漣「本読むか？」

唯に本を差し出した。

唯「ありがとうございます。」

受け取り、本を読み始めた。おっとそうだ。

漣「唯。タオル掛けておこうな。幾ら夏とは言え、水着のままじゃ風邪をひくぞ。」

バスタオルを唯の肩にかけた。唯は礼を言い、黙々と本を読み始めた。

それからしばらく、私は波の音を聞き、青い空を見上げていた。  
若干二名程海岸から、はしゃぐ声が聞こえてきたが、波の音でスグにかき消されて行く。

飲み物を飲もうと、ペットボトルに手を伸ばすと、視界に唯の姿が目に入った。

唯「…むう…むう…」。

唯は目を細め、本を近づけたり、遠ざけたりしていた。まあ、大方察しが付くだろう。

漣「唯…メガネは？」

唯「屋敷に置いて来ちゃいました。」

唯が読んでいる本の字の大きさは、小さいとは言えもなく、大きいとも言えなくもない。

今、この字を打ちこまれているぐらいの大きさだろう。

それぐらいなのに、読めないとは…視力どれくらいなんだろう？  
とどっちが悪いのか？

漣「取って来ようか？」

唯「いえ。大丈夫です。気にしないで下さい。」

漣「でも…逆に目が疲れるぞ。」

唯「うっ……まあ……そうですね……」。

しかし……唯と出会って3ヶ月経つが、今日初めて唯のメガネ無しバ  
ージョンを見た。

一言で言つと……

紬「可愛いわ唯ちゃん。」

漣「うんうん……ってムギ!」

ムギが満面の笑みで、唯の顔を眺めていた。

律「ふむ……」。

隣には、律もジューツと唯を見つめていた。

律「なあ唯。」

唯「ふえ! な、何ですか! ? / / / / /」

律「眼鏡外しても目は(3 3) (・・) にならないんだな。」

唯「はい？」

……この未来の道具で怠けたがる有名なメガネ君だ？っていうか、今時デフォルメで書くこうとしてもそっいう風に書くマンガ家はいないぞ。

透「マンガの読み過ぎだろ！」

律「ハハハハ。…でもメガネ無しって言うのも、新鮮だな。」パシヤ

唯「きゃ！？」

いつの間にか、私のカメラで唯のメガネ無し姿の写真を納めた。

紬「ねえ唯ちゃん。コンタクトにしないの？」

唯「コンタクト…ですか？それは…ちょっと……な、内緒です／＼」

唯はプイツと横を向いた。

律「フーン。気になりますな紬さん。」

紬「ええ。とっても気になりますわ律さん。」

唯「ふえ!?!」

律「唯ちゃん…隠さず、言いましょうね。」ズイズイ

唯「なっ内緒ですノノノ」ピュー

唯は、逃げ去った。律も逃がすかと言い、唯を追いかけた。後ろ姿しか見えないが、横から見たら、彼氏と彼女が海岸で追いかけてつこうをする王道のワンシーン見えるだろう。

ってそんなことは、置いといて、唯を助けよう。私が走ろうとした。

つとその時

唯「！」「コテン

唯が…転んだ。

律「……」「パンパン

律が唯を起こし、体に付いた砂を払い落とし、手を繋いで戻って来た。

律「……走るのは危ないよな。」

漣「…うん…そうだな。」

紬「貝ガラと埋まっていますから…。」

唯「…痛い。」

全員「……。」「」

律「…取り合えず…ゴメン唯。ちょっと…はしゃぎ過ぎた。」

唯「大丈夫です。私の不注意ですから。」

律「まっ人には言えない事も一つや二つ誰だっ  
てあるもんな。よしこの話は終わり。  
ビーチボールやろうぜ!!」

律がそう言うと、ムギが乗ってきた。そして、唯も乗って来た。

……唯が楽しもうとしているんだ……私も楽しもう……せっかくの海な  
んだし……まだ合宿だって始まったばかりだ。

### 第30話 楽しもう！（後書き）

作者「ハア、やっと…終わった。引っ越し。」

実は作者は、最近引っ越しをしていました。

作者「前の家は、1Kだったけど。新しい家は2DKだ。前よりも住みやすい。風呂も無かったし（近くの銭湯に行っていた）壁も薄かった。だが、新しい家は、何とユニットバスじゃありません。トイレ別。しかもコンビニにも近い。（ローンです。）イヤ、楽しだわ。ただな…荷物が多かった。」

前の家から持って来た物

けいおんの関連のグッズ（ゲーセンの景品も含む）

ドロンチェンジャー（自分にとってお守り）

その他のアニメグッズ（涼宮ハルヒの憂鬱 らき すた ハガレン  
ワンピース e t c）

冷蔵庫

食器

調理道具

テレビ

テレビのチューナー

コタツ

掃除機

扇風機

洗濯機

パソコン

インターネットをワイヤレスに繋ぐ機械

ニンテンドー3DS (ソフト 5本)

PSP (ソフト: 多分20本以上。モチロン、けいおん! もあります)

PS3 (ソフト: 多分25本以上)

Wii (ソフト15本くらい。バーチャルコンソールは、かなり多い。)

ギター

アンプ

ヘッドフォン

マンガ

勉強道具

服

実家から持って来た物

ベット

ソファ

机

電気スタンド

本箱×4

カーペット

最近購入した物

タンス (ちよっと小さめ)

ミキサー

本格的コーヒースェット

豪獣神

作者「これだけの物を運ぶの大変だった。そして、それらを片付けるのも。ようやく終わったと思ったら、ネットに繋げるのがまた大変で、三日経ってしまい、ついに、今日全て片付けました。更新が遅れてしまい、申し訳ございません。これから、遅れた分を取り返すつもりです。新天地で、更新に精進いたします。 by サツキ。

作者「次回もし唯…第31話 練習開始…たぶん！です。お楽しみだね」

### 第31話 練習開始……たぶん！

その後、私達は時間を忘れるくらい遊びつくした。ビーチバレーをしたり、我慢比べに、砂遊び。特に、砂遊びでムギが、物凄い能力を發揮した。砂の城を作ったのだ。

砂の城と言っても、子供が作るレベルではなかった。作りが細かく窓や塔など再現していた。そして大きさも尋常ではなかった。美術館とかに飾られている銅像並の大きさだった。雪まつりならぬ、砂祭りが今ここで行われている。よく一人で作ったもんだ。

紬「夢中でやってたら、こうなっちゃった。」

どんだけ……人は夢中になると、とんでもない力を發揮することを今日初めて知ったよ。

それは、自分にも起こっていた。7月になると、地球が意地悪なほどに、気温が上昇する。

夏休みに入る前の体育は、かなり堪える。20分もすれば暑くて頭がクラクラしたり、ガンガンに痛くなつて、正直に言うところダルイ。

しかし、海で泳いでいるせいか、そんなことが全く起きず、まして時間が経てば経つほど活発に動ける。夏は暑いけど、色んなイベントがあるから、全てが嫌いにはならない。

時間も忘れ、あつという間に夕方になった。流石に、遊びすぎたのか、皆も浜辺に座っていて夕日を眺めていた。さっきまで青い海だ

ったのに、夕日で空も海も赤く染めていた。あゝ楽しい。こんな充実した日は数えられるくらいしか送っていない。本当に夏は良い。

.....  
アレ?

……何か忘れているような……？

漣「あ————————練習!」

律「今頃気づいたのか？」

律が呆れながら言う。

漣「り、律が悪いんだぞ」 (棒読み)

律「お前も十分楽しんでいただろ？」

漣「う……。」

返す事が無いと言うのは、まさにこの事である。練習の事をすっかり忘れて、遊んでいた。だって、楽しかったんだもん。

漣「ハア〜。」

私がズ〜ン沈んでいると

唯「……。」「ナデナデ

唯が私の頭を撫でて来た。背伸びをしながら

漣「…慰め？」

唯「……。／＼／＼／」コクン

唯が頷くと、こう言った。

唯「澪ちゃん…私が落ち込むと、よく撫でてくれるから…今日は私  
が…／＼／＼／」

澪「唯／＼／＼」

律「アレアレ？澪ちゃん、顔が赤いぞ？」

紬「照れちゃったの？」

澪「う、うるさい…」

唯「！！」「ビクッ

大声を出したせいか、唯が怯えてしまった。

澪「いや、唯に言ったんじゃないんだぞ。」「ナデナデ

結局、また私が唯の頭を撫でた。

紬「うん。ヤッパリこの光景が、一番落ち着くわ。」

どう言う意味ムギ？っというツツコミは置いておこう。その後体が冷えるといけないので、私達は屋敷へ戻り、砂を落とし、着替えた後夕飯を食べた。

皆で作った料理は、美味しく何より…楽しかった。また一つ思い出が増えた。

さて遊びモードは、この辺にしておいて、そろそろ合宿の本来の目的を始めよう。

私達はスタジオに入った。私と唯は、チューニングを会わし、ムギはキーボードの音の具合を確かめていた。そして…一番の問題児は…案の定

律「なあ〜練習明日でいいんじゃない？」「ゴロン

床で寝転がりダラけていた。

紬「服汚れちゃっわよ。」

律「……。」「ゴロゴロ

ムギの声も耳に入らず、床に転がっている。

…よし…こうなったら…

私は律の前にアンプを置きボリューム最大にした。……喰らえ

ジャ——————

ン

ベース音が、スタジオに響く。律は頭をクラクラしながら、腰を上げた。

漣「練習するぞ。」

律「殻が疲れて、言う事利かねえよ。」

再び寝転がった。こうなったら…一発ゲンコツを入れるか。律の元に行こうとした時、唯が律に寄った。

唯「……。」  
「グイッ

唯が律の袖を引っ張った。

律「何だよ唯？」

唯「……。」グイッグイッ

唯は何も言わず、ただ律の袖を引っ張る。

紬「練習しようって、言ってるのよ。」

唯「……。」コクン

律「あんな…疲れて体がさ…。」

律が言いかけると

唯「…グズッ。」

唯が泣きそうな顔をした

律「だああああ分かった分かった！やるから泣くな！！」

唯「ペア。」

何もなかったかのように、笑った。後で聞いたが、なぜあんな事をしたんだと聞いたら

とある本を読んだ時

女「私…私…あなたが…いなくなったら…う、うう…。」

男「クッ。大丈夫だ。俺はずっとお前の傍にいる！だから…泣くな！」

女「アラッそう？」

男「ウソ泣きかよおい！」

女「ウフフ。泣きそうになると、大抵の人は、弱いよね。」

男「うるせえ！」

というのを読んだらしい。そう言えば、和が言っていたっけ？

唯は本に書いてある事を鵜呑みにする（by 真鍋和）

律「コンニャロ。」

律は、渋々ドラムセットの前に座った。あんな感じじゃ身に入らない。しょうがない、もう一押しするか。

透「律。最近ドラム叩いていないから、太ったんじゃないのか？」

律「えっ!？」

手応えあり

漣「特に、腹の周りが…。」

律「うおおおおやるぞ！」

漣「フツ。」

私がそう呟くと、唯もクスクスと笑っていた。

律の見えない所で、私と唯はハイタッチをした。

第31話 練習開始……たぶん！（後書き）

某所

作者「イヤ、もうスグで一年が終わるな。」

唯「本当早かったね。」 ノーマル唯です。

紬「つい最近お正月だったような気がしますわ。」

律「まっ一年なんて、こんなもんだろ？」

作者「嫌になるね。歳を取ることになくなってよ。この調子じゃ、一年過ぎるのが、爺さんになった時には、F1カーが通り過ぎる並みのスピードで、一年が通り過ぎるんじゃない？」

唯「私は、まだまだ大丈夫そうだね。」

作者「イヤイヤ、実際ベンジョンソンが、走り去るぐらいの早さまで来てるぞ。気を抜いたら、もうそこまできているからねベンが。」

律「マジかよ。ベンが来ているのか？私はベンより、ボルトの方がいいぞ。」

紬「カッコいいですものね、ボルトさんポーズとか。」

作者「まあ要は、今年も充実した一年を送ったって事じゃね？」

唯律紬「」「」「」

ド――――ン！

溼「送ってないだろ！まだ8月だぞ8月！夏本番を迎えているのに、  
何で作者の自宅でコタツ入ってたんだ！？何で私達、厚着しているん  
だ！何で季節がいきなり冬になっているんだ！まだ約4ヶ月も残っ

ているんだぞ！ってコレおもいつきり、銀魂のパクリだ！  
ってコレ、第26話と同じだろ！」

作者「ああ。26話の部分コピペしたから。」

唯「わぁ手抜きだ手抜き。」

作者「バカ言うな。ちゃんと直している部分だってあるぞ。見比べてみよう。それに、新しい家に引っ越ししたんだから、全て一緒じゃないぞ。」

漣「字だけだから、分かるか。」

律「まあコタツでミカン食いながら、ノンビリしようぜ。」

紬「はい。お茶ですよ。」

漣「まだ、8月だぞ。」

作者「ぶっちゃっけ、いつもの次回予告のコメント考えるのが、大変だからさ。今回から、ミニコーナー的なもの始めようかなって？」

唯「ミニコーナー？どんな事するの？」

作者「まだ考え中。」ズズ

律「オイオイ。んっコレは、モバイレーツ！」

海賊戦隊ゴーカイジャーに変身する道具。」

作者「おい勝手に触るな。」

絀「レンジャーキーもありますよ。」

律「よし。やってみるか。」

作者「おい、それは…。」

律「ゴーカイチェンジ！」

ダイレンジャー……！！

60年後

唯「皆：久しぶり。」

律「おお唯。遅いぞ。お前が一番最後だぞ。」

唯「ゴメン。道に迷っちゃった。」

漣「ヤレヤレ…相変わらずだな。」

紬「まあまあ。唯ちゃん座って。腰大丈夫？」

唯「うん大丈夫だよ。ちょっと膝が痛いけど。」

梓「律先輩なんて、杖が無いと、歩けませんもね。」

ゴチン

梓「痛っ！」

律「その減らず口も相変わらずですな中野さん。」

梓「杖で殴る事無いじゃないですか。」

律「ハハハ。私にとっては、良い武器だ。」

唯「私達…ズイブン歳取っちゃったね。」

漣「…そうだな。でも…友達だと言うのは、変わらないだろ。」

律「そうそう。漣も何十年、私に助けられたことか。」

漣「捏造するな。」

紬「そのくらいに、しておきましょう。そろそろ、来る頃だと思えますよ。」

梓「ドキドキしますね。」

律「寿命を縮めるなよ。」

梓「縁起でもない事言わないで下さい。」

? 「あの…失礼しますよ。」

唯「はい?」

「あの…初代放課後ティータイムの方たちですか？」

律「おっ！もしかして？」

「はい。私達第60代目放課後ティータイムです。今日は、初代放課後ティータイムの皆さんに、会いに来ました。」

漣「態々、ありがとう。」

「いえ。私達みたいな者の為に、足を運んでくれて本当に、申し訳ございません。」

律「良いんだよ。気にすんな。」

「あのアナタが平沢唯さん？」

唯「はい。」

「会えて光栄です。コレ…60代目ギ 太です。」

唯「わぁギ 太。子孫だよ。」

「それが、初代ギ 太ですか？」

唯「うん。ほらっそつちに、初代エリザベスとムッタンもいるよ。」

「わぁ！凄い。」

漣「ちゃんと綺麗に使っているんだな。」

梓「私も安心しました。」

「それで、もしよろしければ、私達の演奏聞いてくれますか。」

律「おう。聞かせてくれ。」

紬「頑張つて。後で美味しいお茶を淹れてあげるわ。」

「頑張ります。よしじゃ行くよ皆。ふわふわ時間。」

漣「ハハハ。あのドラム。律みたいに走ってんな。」

律「そ、そうか？」

梓「そう言う所も受け継がれていますね。」

紬「でも…楽しそう。」

唯「まるで、私達を見ているみたい。」

唯達は、自分達が若かった頃の姿と重ねて見ていた。これからも、放課後ティータイムは続いていく。受け継がれている者が居る限り。

律「……何だ今の？」

紬「何か…お婆ちゃんになっていましたよ。」

澪「60代目って？」

唯「ギ 太に…子供が出来てる。」

作者「今のは、五星戦隊ダイレンジャーの最終回の部分をパロディにした物だ。」

律「何だよそれ？」

作者「お前が、ダイレンジャーのレンジャーキーを回すから、パロ  
ディしてしまったんだよ。」

澪「んなバカな。」

作者「俺が、改造したからな。」

紬「じゃ、コレなんてどうですか?」

作者「アイムみたいな言い方だな。ってそれは…」

紬「ゴーカイチェンジ!」

ジエーーーーーットマーーーーーン

作者「時間が無いので、今日はここまで。次回もし唯。第32話  
王様ゲーム！です。」

…確か…鳥人戦隊ジェットマンの最終回って……。」

### 第32話 王様ゲーム！

律視点

唯と澪に嵌められた私は、結局疲れ切った体にもかかわらず、ぶっ通しで練習をした。

その甲斐があつてか、かなりいい演奏になって来た。最初は、唯がコードチェンジに手間取ったりして、演奏にならなかった。だが、それも気にならなくなっていた。意外との見込みが早い奴だ。

澪「律！また走っているぞ。」

それに比べて、私は澪に指摘されてバツカリだ。何回もやらされ、お陰で私の体は、クタクタだ。クソ…澪と唯に仕返ししてやる。

つとは言っても、どんな仕返しをしよう。

うっん……………おっそうだ！我ながら、いいアイデアが浮かんだ。私の頭の横に、ピカンと電球がついた。私のデコ並にな。

それは、風呂から上がり、寝室に入った時に私がこう言った。

律「皆！王様ゲームやるうぜ。王様ゲーム！」

漣「はあ？」

紬「まあ！」

唯「……。」

律「せつかくだからさ、王様ゲームやってさ、更に親睦を深めようぜ。」

漣「お前な…合コンでもないのか？」

律「なあに？漣ちゃんは、合コンに興味がおアリで？」

漣「バツ、そんな訳ないだろ！？／／／／／」

紬「私。王様ゲームするのが、夢だったの。」

律「おつムギは、ノリが良いな。」

漣「私は…。」

唯「……。」グイッ

唯が漣の袖を引っ張った。

唯「漣ちゃん…やる。」

漣「唯。」

唯「りっちゃんが、せっかく提案してくれたんだし。」

漣「唯……そうだな。」

律「よっしゃ決定！」

フッフッフッフ…唯。お前：自分が言った事を後で後悔するぜ。私が王様になったら、唯と漣に恥ずかしい命令を出してやる。その為にも…ちよいつと細工を（ルールは、自分で調べよう）  
王様ゲームには、ちよつとしたイカサマテクニックがある。コレを使うと、自由に王様と番号をコントロールすることが出来る。教えてあげたいが、教えたら模倣犯が出るのが、NGにして置こう。

律「んじゃ、この割り箸を引いて貰うぜ。」

紬「はい」

漣「分かった。」

唯「……。」「コクン」

律「行くぜ。王様だあくれだ？」

まっ最初っから、私が王様になってもつままないし、先ずは普通に楽しもう。

その後、ハグをしたり、恥ずかしい話をしたり、モノマネに歌を歌うなどの命令が出てきた。さて…そろそろ動くか。先ず…唯。お前が生贄になってもらっぜ。

律「よっしゃ。私が王様だ。」

漣「変な命令出すなよ。」

律「王様に命令をするな。」

漣「グッ！」

律「よおし…2番の奴。後ろから振り向いて、大好きって言え。」

唯「ふえ！／＼／＼／」

律「おっその反応からして、唯が2番だな。」

なあんてね。最初っから、分かってんだよ。このりっちゃん様を怒らせたら、痛い目にあっぜ、お嬢ちゃん。

律「はい。拒否権は無いぜ。王様の命令を絶対なんだから。」

唯「うっ…／＼／＼／」

唯は渋々、後ろを向いた。

律「はい、コツチに振り向く。よーい…アクション！」

唯「だ、だい…だい…す…／＼／＼」

唯は途中で言えなくなり、手で顔を隠して、背を向けた。

律「おいおいどうした唯？聞こえなかったぞ。もう一回。」

漣「おい律！」

律「王様の命令は…絶対。」

漣「だけど！」

唯「大丈夫です漣ちゃん。私、やります。」

そう言つて、落ち着こうとしていたが、逆にドンドン緊張して来た。仕方ない、ちょっと助け舟出してやるか。私は、鞆から瓶を取り出

し、それをコップに注いだ。

律「唯。コレ飲んで、落ち着きな。」

唯「あ、ありがとうございます。」

唯はコップを受け取ると、一気に飲み干した。

律「おおい飲みっぷりだな。」

唯「……はにゃ？／／／／／／／」

唯は顔を赤くし、クラクラし始めた。効くのが早いな

漣「唯！どうした？」

律「一気に飲めんだら、そつなるよな？」

漣「…律…お前…まさか？」

律「うん…おちゃけ」

漣「何飲ませているんだ!？」

律「まあまあ。ちょっとしたドーピング的な。」

紬「大体、未成年よ。」

律「決まりなんて、破る為にあるんだよ。」

漣「子供か!」

律「はあい。うるさい人はほっといて。Take2だ。」

唯に振ると、唯は無言のまま後ろ振り向いた。そして、振り返った。そこには、酔っているのせいなのか頬を赤く染め、上目づかいをした唯だった。

……そして

唯「…大好き//////」

三人「……?!?//////」

紬「ゆ、唯…ちゃん／＼／＼」

漣「何だ…この色つぼさ…。」

律「ヤバイ。」

直視できなかつた。…私曰く…私が男だったら確実に襲っていた。とんでもない爆撃が落ちて来た。落ち着け…唯は…女だぞ。女が女を襲っていい訳ない。自重しろ…自重しろ  
自分に言い聞かせていると、唯が私の前にいた。顔が近い…そんなに近かつたら、理性が

律「ど、どうした唯？／＼／＼」

唯「…りっちゃん…／＼／」

だきっ

三人「…なっ！！／＼／」

一瞬何が起こったのか、分からなかった。少し経って今の状況が理解できた。

唯が…私に抱きついて来た。そして、私の耳元で

唯「…大好き／／／／」

そう囁いた。ヤバイ…このままじゃ…とにかく引き離さないと

律「唯…離れろ…／／／／」

唯「大好き…大好き…／／／／／」

律「やめちてくれ…／／／／／」

唯「大好き…大好き／／／／」

私は漣に助けを求めた。だが

漣「……／／／／／」プシユ

顔を赤くして、気絶していた。クソッこつなったら、ムギに

紬「カメラ…カメラ…。」

リックからカメラを取り出し、撮影していた。

ダメだこりゃ…伝説のコメディアンにセリフを拝借し、自分の心の中で呟いた。

唯「大好き…大好き…／＼／＼」

律「唯…重…い。」

ドサッ

唯に押し倒された状態になってしまった。

唯「……。」

律「…唯？」

唯に声を掛けたが、返事が無かった。しばらくすると

唯「…すうすう。」

眠っていた。コレが酔いつぶれって言う奴か。

律「ヤレヤレ。」

唯の腕をそつと外し、ユックリ仰向けに寝かせた。

律「お〜い漣？」

肩をポンポンと叩き、気が付いた

漣「アレ？私？」

律「気絶していたんだよ。」

漣「だって…あんな…その…////」

紬「とってもいい物が見れたわ。」

律「あのな…こっちは、あやまち犯す3秒前だったんだぞ。」

透「自業自得だ。」

律「…ハア、私達も寝るか。」

紬「そうですね。」

透「おっと。唯に掛け布団をかけなきゃ。」

透が唯に掛け布団を掛けた、その時、唯が小声で言った。

唯「…透ちゃん…大好き…りっちゃん…大好き…ムギちゃん…大好き…  
き……」



皆…大好き…。

澪「…唯。」

律「ハハハ。」

紬「アラアラ。」

普段では、絶対にこんな事を口にしないだろう…きっと…唯の本音なのかもしれない

後それから…お酒は20歳になってからだ。りっちゃんとの約束だぞ（＾＜）b〜

漣「飲ませたお前が言っな！」

ゴツー

ン

今度はコイツに飲ませてやる。んで、酔った姿を録画して、見せてやるっ。

### 第32話 王様ゲーム！（後書き）

前回のあらすじ…ジェットマンのレンジャーキーを回してしまった、ムギ。果たして、どんな風にパロディしてしまうのか。

ゴーンゴーン

教会に鐘が鳴り響く。それは、結婚する者への祝福を表す。

律「イヤ〜ついに、唯も結婚か。」

漣「まさか、軽音部の中で最初に、結婚するのが唯だとは。」

唯「私も予想外。」

紬「ウフフ。唯ちゃん。ドレスとっても似合っているわ。」

梓「本当、綺麗です。」

唯「ありがとう。」

仲間たちと談笑していると、ソファーに和が座っているのが唯の目

に入った。

唯「和ちゃん！」

ドレスを着ているのにもかかわらず、唯は走って和の方へ向かった。

和「唯…似合っているわ。」

唯「ありがとう。…？」

和「どうしたの唯？」

唯「和ちゃん…何か顔色が悪いよ。」

和「ああ。最近仕事が忙しくって、寝不足なのよ。」

唯「大丈夫？」

和「大丈夫よ。心配しないで。」

唯「うん。」

和「…唯。幸せになりなさいね。」

唯「うん。」

和「ホラッ行きなさい。主役がないんじゃないわよ。」

唯「じゃあ和ちゃん。後で。」

立ち去って行く唯の背中を見て、和は呟く

和「…唯…ありがとう…さようなら…」

瞼がユツクリ閉じ、メガネがずり落ちた。そして…和の腹部には、鮮血が流れ落ちていた。

唯「和ちゃー……………ん死んじやイヤ  
！」

作者「ジェットマンの最終回は、こんな感じなんだよ。最後通り魔に刺されて死んじまうんだよ。」

律「何で怪人と闘っていた奴が、普通の人にやられるんだ。」

作者「あの最終回は、賛否両論だ。普通傷に気付くだろとはそう声が多いんだよ。」

唯「だからって、和ちゃんを殺す事無いじゃない！」

作者「分かった分かった。んじゃ助けりゃいいんだろ？はい、コレで行くぞ。」

律「そのレンジャーキーは！」

作者「ゴーカイチェンジ！」



ゴ—ゴ—フア— — — — — イブ

作者「次回に続く。次回のもし唯。第33話 フリータイム！」

### 第33話 フリータイム!

次の朝を迎えた。

唯「あ、頭が…痛いです…。」

唯が二日酔いになってしまった。

唯「りつちゃんから貰った飲み物を飲んでからの記憶が無いんですが…。」

律「イヤ〜その…お前、総統疲れていたせいか飲んだら、スグに眠ちまったんだよ。」

律がそう言ってごまかす。その方がいいな。あんな事を話したら…きつと唯は…恥ずかしさのあまり、倒れてしまう恐れがある。都合良く忘れていてくれて良かった。

紬「はい唯ちゃん。お水よ。」

唯「ありがとございます。…ゴメンなさい。少しばかり、頭が痛いんです。風邪かな?」

律「大丈夫だ。きつとただの頭痛だ。」

唯「…そうですかね？」

律「取り合えず、唯は寝てろ。」

唯「すいません。」

唯は再び横になった。

午前中は、フリータイムにした。午後ぐらになれば、唯も元気になるだろうし。

唯「…すう〜すう〜。」

眠りに付いたようだ。

律「落ちるのが早いな。」

紬「若干残っているのかな？」

漣「律とムギは、自由にしていよいよ。私、ここにいるよ。」

律「寝顔を堪能したいのか？」

漣「違う…コレを見る。」

唯が、私の袖を掴んで眠っていた。

律「ハハハ。行って欲しくないってか？」

紬「可愛い。」

漣「と言う訳だから、私が唯を見ておくよ。」

律「ああ。分かった。」

紬「宜しくね。」

二人は、部屋を出て行った。

漣「……。」

唯の寝顔を見て、私は少しちよっかいを出したくなってしまうた。

プニプニ

唯の頬をつつついた。柔らかい。

フワァ〜

唯の髪をいじった。とってもサラサラだった。

窓から聞こえて来る波の音が私からすると、子守唄のように聞こえ、  
睡魔が誘って来た。

私は座りながら、そのまま眠ってしまった。

第33話 フリータイム！（後書き）

ゴゴゴゴファーーーーーイブ

唯「救急部って所に入部してみました。」

和「へえ〜そう。で、どんな事をするの？」

唯「火事の際に、火を消したり、逃げ遅れた人を助けに行ったり、泥棒を捕まえたり、病院に搬送したりする時に出勤する部だよ。」

和「…何か…凄い部ね。」

唯「えへへへ。人の為、世の為に戦うんだ。この部の合言葉は、  
『人の生命は、地球の未来』っていうんだよ。」

和「そうなの？」

唯「うん。」

律「何だよこれ？」

作者「救急戦隊ゴーゴーファイブだよ。一度書いてみよつと思ってさ、下書きをした奴を書きました。」

透「…まあ無理があるよな。」

作者「うん。こんな物もあったぞ。ゴーカイチェンジ！」



フリッシュマー————ン

続く

作者「次回もし唯。第34話 二人っきり！」

### 第34話 二人つきり！

漣「……。」

眠ってしまった私は、いつの間にか唯が眠っているベットに、顔を伏せて眠ってしまった。だが目を覚ましても、まだ若頭が覚醒しておらず、ここがドコなのか分からなかった。数分経つと、頭が覚醒して行った。……すると

ナデナデ

私の頭に、人の手の感触を感じた。全てを包み込むように、優しく頭を撫でられていた。

私は顔を上げると、そこには母親が子供をあやすような表情をした唯がいた。

漣「唯……？」

唯「あっごめんなさい！起こしちゃいましたか？」

漣「イヤ大丈夫だ。」

唯「ごめんなさい…つい癖で…／＼／＼。」

漣「癖？」

唯「昔よく憂にやっていたんです…私の親は、家を留守にする日が多いんです。そのせいで憂は、寂しい思いしていました。夜も眠る事が出来なかったんです。それで、憂と一緒に寝たら、私の腕にギョツとしがみ付いて来たんです。とつても力強かったんですけど震えていたんです。私まで、居なくなつて欲しくないつて感じたんです。安心させようと、憂の頭を撫でたら、安心したように、眠ったんです。それ以来、憂が寂しい思いをさせないように、撫でるようにしているんです。」

漣「あの憂ちゃんが…。」

漣「そういえば、この前憂ちゃんが言っていたっけ？」

憂『お姉ちゃんにも凄いい所はたくさんあります。』

憂「ちゃんが唯の言う凄いい所っていつかな？」

漣「妹思いなんだな。」

唯「…お姉ちゃん…ですから…」

澪「その割には、憂ちゃんの方がしっかりしているように、見えるけどな。」

唯「むう／＼／＼／」

唯は小さく、ぷくうくと頬を膨らませた。

澪「フッフ。ゴメンゴメン。」ナデナデ

唯「……／＼／」

私が唯の頭を撫でていると、唯がそつと抱きついて来た

澪「唯？」

唯「…前々から思っていたんです…澪ちゃんに撫でられると…とっても安心するんです…もっと安心したいからちよつとの間だけ、こっさせて下さい。」

…唯も甘えたかったのか？幼馴染みの和には、甘えないのか？甘える事が出来ないのか？

そんな疑問が湧いたが、スグに拭い捨て、唯を抱きしめ返した。

唯「…私、和ちゃんによく抱き付いていたんです。でも…中学の時に、もう子供じゃない甘えちゃ駄目って言われて、それ以来しなくなっただんですが……。」

漣「いいよ。私にいくらでも甘えても。」

唯「あ、ありがとうございます。」

それから、唯と私は何も言わずにお互いの温もりを感じ取るかのよう  
うに、抱きしめ合っていた。ここで、律とムギが来たら、勘違いさ  
れそうだし。…何か良い言い訳を考えようとしたが、唯の高ぶった心  
臓の音が私の胸に感じたので、集中が出来なかった。またその音が、  
私をこの状況を夢中にさせる音楽のように聞こえる。

唯「…漣ちゃんの胸…和ちゃんと同じくらい暖かい。」

漣「そ、そう?。」

和と同じくらい…つか。和の胸ってどのくらいだろうとアホらしい  
疑問を持ちながらも、唯を抱きしめ、私は唯に思い切って聞いた。

漣「…唯。和の事好き？」

唯「はい。私の無二の親友です。」

漣「そうか。」

そうだよな…唯一話を掛けて貰い、唯の事を一番に理解しているんだから。私は和に対して少し嫉妬していた。この時、なぜ私は和に嫉妬をしていたのか分かっていなかった。それを理解するのは、しばらく先になる。

唯「…このメガネを選んでくれたのも…和ちゃんなんです。」

漣「へ〜和が。」

唯「…6年生に上がった時に、目が悪くなって、メガネを買おうとした時、どうすればいいのか分からなくて、既にメガネを掛けていた和ちゃんに聞いてたんです。その時、和ちゃんがこのメガネを選んでくれたんです。せっかく和ちゃんが選んでくれたのに、コンタクトにしたら…和ちゃんとの友情を裏切っちゃうと思うんです。」

漣「フーン。それがコンタクトにしない理由？」

唯「……／＼／＼」コクン

漣「本当に、友達を思いなんだな。」

くだらない嫉妬をした自分が恥ずかしく思えてきた。

唯「…あの…。」

漣「何？」

唯「この事は、内緒にして下さい。和ちゃんにも憂にも話した事が無いんですから…二人だけに秘密にして下さい。」

漣「……。」

唯

唯「漣ちゃん！？／＼／＼」

二人だけの秘密…和にも知らない事を私が見つた…とっても嬉しくなつて私は、思わず唯をぎゅっと、さつきよりも強く抱きしめてしまった。

漣「約束するよ。」

二人だけの約束だもんな

ドアの向こう側

律「…うん…聞いちゃったな。」

紬「聞いちゃいましたね」

律「ドキドキな光景…見ちゃったな。」

紬「見ちゃいましたね」(REC)

律「録画するなよ。」

紬「イヤです」

モチロン二人は、何も聞かなかったし、見なかったことにした。映像を紬の保管庫に厳重に保管して。 映

第34話 二人つきり！（後書き）

フラッシュ……シユマ……ン

梓「先輩…卒業おめでとつございます。」

唯「ありがとうあずにゃん。」

律「…高校生活あつという間だな。」

透「ああ…コレで、思い残す事はない。」

紬「そうですね。安心して帰れます。」

梓「えっ？どう言う事ですか？」

唯「…あずにゃん…ゴメンね…もうあずにゃんと、演奏出来ないんだ。」

梓「ど、どうしてですか？皆さん、同じ大学に受かったんじゃないんですか？」

律「…信じて貰えないかもしれにけど…聞いてくれ。実は…私達4人は…宇宙育ちなんだ。」

梓「えっ？」

漣「小さい頃、宇宙人に誘拐されて違う星で暮らしていたんだ。何とかして地球に戻ろうとして、何とか星を脱出して地球にやって来たのが、3年前。丁度高校を入学する時だ。」

紬「適当な家族に記憶を操作して、生活していたんですが…違う星で育った影響なのか、私達と環境が合わなくて、少しずつ体力が削られていったんです。」

唯「コレを『反フラッシュ現象』って言うの。」

律「ハアハア…ワリイ…もう時間が無い…このままじゃ、私達は死ぬ。」

梓「そ、そんな…。」

漣「だから…もう地球を離れて、元の育った星に…帰る…。」

梓「地球を…離れる…じゃあ…私と…演奏が…。」

紬「だ、大丈夫…夫よ…。梓ちゃんが…寂しくならぬように…する…から。」

梓「えっ?」

唯「今までの…消すから…これ…で…あずにゃんは…寂しく…ならないよ。」

梓「イヤです…消さないで下さい!先輩達と過ごした日々を忘れたくないです!」

唯「ゴメンね…異星人の先輩だなんて、あずにゃんには…可哀相だ

か…ら。」

梓「イヤです！止めて下さい…！」

唯「あずにゃん。」

律「梓。」

透「あず…ね…。」

紬「梓…ちゃん…。」

4人「さよなら。」

梓「せー————んぱ————い！」

作者「まっ本作とチヨイと設定は変えてあるけど。」

律「こんな最終回なのか？」

作者「ああ。最後には地球を離れて行ってしまう。悲しいラストだ。」

紬「これって確か86年の作品ですよ？多分、今の人達には、ちよっと古くありません？」

透「確かに……10作目だしな。」

作者「うむ……アレ？唯は？」

唯「嫌だよ！あずにゃんと離ればなれになるなんて……！」

紬「大丈夫よ唯ちゃん。コレは、パロディだから……。」

作者「つーか。原作じゃ既に離ればなれだろうが。」

律「さて次何行く？」

作者「よし。ミニコーナーが決まった。」

漣「今までのが、ミニコーナーじゃなかったのか？」

作者「ミニコーナーは…戦隊ヒーローの談義だ。作者が、戦隊ヒーローを知っている範囲で、色々談義しよう。」

律「マニアしか食いつかなそうだな。」

作者「シャラップ。第一回目は、作者の御得意さんが好きだと言っていた

『五星戦隊ダイレンジャー』を談義しようと思う。」

漣「何人食いつくのやら……。」

作者「てな訳で、新コーナーも決まったし、次回から張り切って行くぜ！」  
次回のもし唯は、夜のビーチにて！」

### 第35話 夜のビーチにて！

しばらく時間が過ぎた。唯の二日酔いも治り、律とムギと合流した。なぜか二人は、顔を赤く染めていた。日の当たり過ぎだと言っていた。まったく、気を付けないと熱中症になるぞ。（作者は一度、熱中症で倒れた経験あり）

その後、私が練習をするぞ言ったら、律はイヤがった。だが、唯の二日酔いの原因が、お前のせいだと、小声で行ったら逆らうのを止め、喜んで練習に励んだ。

私達にしては、珍しく（涙）長時間練習をした。無我夢中にやっていたせいか、誰一人音もあげず、一生懸命練習をした。律もムギも唯も…私も、たった一曲の為に、精神性ベースを弾いた。

素晴らしい演奏をするには、一人だけが上手けりゃ良いってもんじゃない。全員の心が一つになってこそ、初めて素晴らしい演奏が出来る。そのためには、音楽を楽しむ事と一緒に演奏をする仲間を信じる事である。信じられる仲間は、この人と演奏がしたいと思える者が最高の仲間である。（作者がギターを教えて貰った師匠の言葉より）

それから、しばらくして

バチバチバチバチ

律「唯と閃光花火、合体！」

唯「が、合体！／／／／」

紬「私も入れて入れて！」

律「よっしゃ、三人合体だ！」

紬「合体！」

唯「合体／／／／」

漣「フッフフ…。」

三人は、閃光花火をくつつけて楽しんでいた。私はスイカを食べながら、その様子を見て楽しんでいた。

律「おい。漣も来いよ！」

澪「食べたら行くよ。」

夜のビーチで、花火をしながら、スイカを食べる……乙な物だ。なあ  
んて、歳じみた事を呟いていると

唯「澪ちゃん……はい。」

唯が閃光花火を持って来た。しかもごく丁寧に二本。

澪「……合体したいのか？」

唯「……！？／／／／」オロオロ

当てられたのか、唯はオドオドし、目を瞑りながら。

唯「……／／／／」コクン

澪「フフフ。やるか。」

唯「……／／／／」コクンコクン

唯が二度首を縦に振ると、喜んでいるつと和が言っていた。初めて、唯が二回首を縦に振っている所を見た。

漣「唯、おいで。」

私は自分のと唯の閃光花火に火を点けた。

漣・唯「「せゝの…合体！」」

小さい炎も二つにすると、大きくなる物なんだな。私も唯も一秒でも長く、もたそうと慎重に閃光花火を持っていた。

唯「き、綺麗ですね。」

漣「そうだな。」

ポトツ

唯「あっ！」

漣「終わっちゃったな。」

唯「そうですね。」

漣「新しい花火持って来るよ。」

私は、色んな種類の花火が置いてある所に行こうとした。その時、律がたくさんの打ち上げ花火を並べていた。

漣「律！何をやる気だ！？」

律「へっへっへ。20個同時にやるうかなって。」

漣「バカ！危ないぞ！」

律「なあに。大丈夫大丈夫。それに、20個いっぺんにやれば、ライブの花火みたいになるじゃん。」

律はそう言い、20個いっぺんに、導火線を点けた。

律「おっしゃ！来るぞ来るぞ。」

紬「ワクワクする。」

漣「全く。」

唯「……。」「ワクワク

私も何だかんだ言いつつも、打ち上がるのにワクワクしていた。ラ

イブでボーカルが奈落から上がって来たと同時に打ち上がる花火は、興奮するものだ。それが、今まさに打ち上がるのだ。

そして、打ち上がろうとした時

ビュー

……コテン

突然の突風が吹き、20個の打ち上げ花火は、全て倒れた。しかも  
… 発射口は私達に向けられていた。

律「……。」

紬「……。」

澪「……。」

唯「……。」



4人「きゃ――――！！！！？」

私達はダッシュで逃げた。だが、その時には、既に

ピューピューピューピュー――――ピュー――――

花火は発射された。しかも、何発がまだ使っていない花火に当たり引火した。

律「だああああ水！水！」

それから、大変だった。引火した花火の中には、ロケット花火も入っていたので、色んな方向に飛んで行ったり、ネズミ花火が私達の周りに破裂したり、結局全ての花火に火が点き燃え始め、決して綺麗ではないキャンプファイヤーになっていた。

律はパニックリ、ムギは律を落ち着かせていた。私もどうにかしようと、焦っていた。すると、唯がバケツに入った水を持って来たので、私が水を撒き、何とか鎮火した。

火の元には、ご注意を

第35話 夜のビーチにて！（後書き）

パチン…パチン…パチン

作者「燃え上がれ、燃え上がれ、燃え上がれ、ガンダム！」

律「…おい、作者。」

作者「何だよ！今俺は、ドム三体作るのに忙しいんだよ。」

律「始まつてるぞ。」

作者「えっ？…バツ、バカ！映すな！今のところカットカット！」

律「遅せえよ！ガンダム好きだと言う事が、バレたぞ。」

作者「まっ良いや。んじゃ、適当にやてて。」

律「おい！今回から、ミニコーナーが始まるんだろ！」グイ

作者「止めて下さいよ！そんなに、ミニコーナーがやりたかったら、アンタ自身がやればいいんですよ？」

律「出来たら、やっているさ！貴様に言われなくてもな！」

作者「僕だって、出来るからやっているんじゃないんですよ。」

バチ  
ン

作者「ぐお！…なっ殴ったね？」

律「殴って何故悪いか！？貴様は良い。そこで、泣いてわめいて居れば、良いんだからな！？」

作者「僕は…そんな安っぽい人間ですか？」

バチ  
ン

作者「に、二度もぶつた！…オヤジにもぶたれた事無いのに！」

律「それが、甘ったれなのだ！殴られもせずに、一人前になった奴がドコにいるものか！？」

作者「もうやらないからな！誰が、二度とミニコーナーなんてやるもんか！」

唯「作者さん。そんな言わないで。もつとしっかりしなさいよ！」

律「作者。お前は今のままでは、虫けらだ。それだけの才能があれば、他の作品を超えられると思っていた。残念だよ！」

作者「りっちゃん…りっちゃん！」

唯「…作者さん。ミニコーナーの進行の紙あるんでしょう？私が、

ミニコーナーを担当する。」

作者「唯。」

唯「私自分がやった事に、自惚れられない人なんて嫌いだよ。今日まで、このコーナーをやって来たのは、他でもない俺だつて言えない作者さんなんて、作者さんじゃない！私……」

作者「…唯。君に、ミニコーナーを担当するなんて、無理だよ。」

唯「作者さん……。」

作者「悔しいけど…僕は男なんだな。」

作者「ミニコーナー！始まるよ！」

透「長いよ！前フリが長いよ！」

作者「フフフフ。透ちゃん。今までとは違うのだよ。今までとは。」

律「おお！ランバ・ラル！」

本当は『ザクとは違うのだよ。ザクとは』です。

作者「今までは、特撮ばっかりやって来たが、ここでガンダムネタを入れる事によって、更にネタが広まるのだよ。」

紬「ますます、マニアしかウケないような気が…。」

作者「では、ミニコーナー！戦隊ヒーロー談義！」

ワア

パフパフ！

漣「っと、作者の頭の中では、こんな歓声が沸いているだろう。」

作者「一回目にスポットライトを当てるのは…コチラ！」

『五星戦隊ダイレンジャー』

作者「1993年から94年まで放送された作品。ちなみに、93年の当時

ZARDの『負けないで』がリリースされた。またJリーグが開催された年なんだよ。」

唯「へえ…この年に。」

絢「今でもよくテレビに流れますよね。」

作者「この戦隊は、モチーフは気功と中国的な要素として聖獣が取り入れられている。

主に、龍、麒麟、鳳凰、獅子、天馬の5つを取り上げています。んでもって、ダイレンジャーのダイレンは、中国の地名『大連』からの由来と言われているが、スタッフによると、

大レンジャーからの由来だと言う。」

漣「単純だな。」

作者「ちなみに、企画段階では『中華戦隊チャイナマン』だったらしい。」

律「カッコワリいな。」

作者「企画段階のもなんて、そんな物さ。でもな、設定が面白いんだぜ。」

紬「設定ですか？」

作者「ああ。一つは、全員が主役だ。本作品では、「5人全員が主役」というスタ

ンスが特に重要視されていて、それを強調するための様々な策が立てられたんだ。

まず、本作品では明確なリーダーが設定されていない。これまでの戦隊シリーズの

通例から行けばレッドと設定されるところだが、「生身で気力などの潜在能力が

一番高いのは、レッドではなくピンクという設定が作られ、レッドには「絶対的なり

「リーダー」というキャラクターが与えられていない。また、メンバーが各々名乗った

後の締めとなる決め口上をリードするのはその話の中心キャラクターであり、必ず

しもレッドではないというのもそのひとつだ。

律「まさに、今の戦隊ヒーローのスタンスだな。」

作者「そういう事。まっ一気に話すと、混乱するだけだから、数回に分けて話すから今日はここまでだ。」

唯「……。」

澪「どうした唯？」

唯「話を聞いていたら、私も戦隊ヒーローやってみたくなくなっちゃった。」

作者「お前な…お前らの場合…ヒーローじゃなくて、ヒロインだろ？」

律「まっこれまで、パロやって来たし。」

作者「全然変身していないけどね。」

紬「私もやってみたい。」

漣「私は…遠慮しておく／＼／＼」

律「そう言わないでさ、やるうぜ。」

漣「イヤ、いいって！／＼／＼」

作者「（…こいつら…戦うイメージ無いっの）」

作者「ハア、分かったよ。行って来い。」サッ

律「おっモバイレーツ！」

作者「コレで良いだろ？ゴーカイチェンジ！」

ゴ

カイジャ

！

ある日突然、地球を襲撃する宇宙帝国ザンギャックの大艦隊。宇宙の星々を支配し、全宇宙を我が物をしようとするザンギャックが、

ついにその矛先を地球に向けた。地球人類が絶望に包まれる中、地球の平和を守るために、人々の笑顔のために立ち上がったのは、数々の悪から地球を守り続けてきた34のスーパー戦隊だった。

最初のスーパー戦隊である秘密戦隊ゴレンジャーのリーダー・アカレンジャーの号令で、182人の戦士達とザンギャックの壮絶な戦いが始まった。そして全てのスーパー戦隊の力を合わせて発動した究極の合体技をザンギャックの大艦隊を目掛けて放ち、ザンギャックの撃退に成功した。だが、スーパー戦隊の戦士達は全ての力を失い、姿を消してしまった。戦士達は伝説の存在になり、後にこの戦いはレジェンド大戦と呼ばれるようになった。

それから時は流れ……

ゴイカイガレオン

トン「地球だ！地球についたよ！」

梓「本当トンちゃん？」

梓は、モニターに外の様子を映し出した。

純「へ〜コレが地球か。お宝あるかな？」

梓「純はそればっか。」

純「良いじゃん。海賊なんだから。」

紬「でも…とつても綺麗ですね。住みやすそうな星ですわ。」

梓「流石ムギ先輩。言う事が違いますね。純も見習って欲しいよ。」

純「うるさいな！」

漣「ケンカは、するな。私達は遊びでやっているんじゃないんだぞ。」

梓「漣先輩！す、すいません。」

ジャラジャラ

宝箱の中に、たくさん入ったレンジャーキーをいじっている少女が、椅子に座りながらモニターを眺めていた。

律「そうだぞ。私達は宇宙最大のお宝を手に入れる為に、旅をしているんだ。それで…おい亀。本当にあんな田舎の星に、宇宙最大のお宝があるのかよ？」

トン「本当だよ。感じるんだよ、今までにない感じがするんだよ。つて、僕の名前は亀じゃなくトンちゃんって言う…」

律「おっし。着陸するぞ。」

ゴークイガレオンは、地球に降り立った。

漣「おい律。あんまり目立つ行動は、避ける。」

律「んなまどろっこしい事やっていられるか。」

ゴークイガレオンは、都会に降り立とうとしていた。

梓「アレ？何か街の様子がおかしくありません。」

映し出されたモニターには、人々が逃げ惑っていたり、建物が崩れていたりして、大混乱が起きていた。

純「まさか、コレって…。」

漣「奴らか？」

街

スゴ ミン（以後スゴ）「ハッハッハ。この星は、宇宙帝国ザンギ  
ヤツクのものだ！ゴ ミン人間どもを一人残らず始末しろ！」

大勢のゴ ミンが、人々を襲っていた。

倒壊したビル物の陰

純「ヤッパリ、ザンギヤックですね。」

紬「この星も…私の星のように…なってしまうのですか？」

漣「残念ながらそうなるな。」

梓「関わると、ロクな事ありませんよ？」

律「このままトズラっと思いたいですが、ここほっと思いたら、宇宙最大のお宝は、奴らに奪われちまうぜ。」

漣「だな。」

梓「ハア、仕方ないですね。」

純「お宝を横取りなんて、許さないよ。」

紬「私の星のように、させません！」

律「行くぞ！」

4人「おお！」

律達は、モバイルーツとレンジャーキーと言う変身アイテムを出し

た。レンジャーキーをモバイレッツにセットした。

一同「ゴークイチェンジ!!」

ゴーーーーーカイヤーーーー!!

レンジャーキーをモバイレッツにセットすると、5人は変身を遂げる。

律「ゴークイレッド!」

澪「ゴークイブルー!」

純「ゴークイイエロー!」

梓「ゴークイグリーン!」

紬「ゴークイピンク!」

律「海賊戦隊！」

一同「ゴーカイジャー！」

律「派手に行くぜ！」

作者「時間が無いから、今日はここまでにして置く。」

紬「今までは違って、本格的ですね。」

作者「言っただろ？今までとは違つのだよ。今までとは。」

律「こりゃ盛り上がって来たな。」

唯「ちよつと！」

作者「ど、どうした？いきなり怒鳴つて？」

唯「私がやりたいつて言ったのに、私出ていないじゃない！」ポカ  
ポカ

作者「叩くな叩くな。安心しろ唯。お前には美味しい役を任せよう  
と思つているんだぞ。」

唯「美味しい役？」

作者「そうだ。だから、次回待て。」

唯「本当に？」

作者「本当だ。」

唯「本当に本当？」

作者「本当に本当だ。」

唯「絶対に絶対？」

作者「絶対に絶対だ。」

唯「分かった。」

作者「フゝ（唯にはあの役が一番合っているだろ）」

作者「では、次回もし唯。第36話 お礼の歌！お楽しみにね」

### 第36話 お礼の歌

漣「……さてっ…律？」

現在、別荘で正座中。

律「はい。」

漣「まずは、言う事は？」

律「調子に乗り過ぎました…すいませんでした。」

漣「下手したら、火事になっていたんだぞ？そしたら、私達退学になっただぞ。」

律「はい。」

漣「全く。大体律はいつもいつも。」

それから、律に御説教タイムを与えた。律は反論せず、ただ黙って『はい、はい』と弱弱しく返事をしていた。

漣「それにな。」

唯「漣ちゃん。もういいんじゃない？」

漣「ダメだ。律は仮にも軽音部の部長なんだぞ。そこらへんのもつと責任感を持たせないと。」

唯「りっちゃんも反省しているよ。ね？」

律「はい！反省しております。」 m ( ) ( ) m

土下座をした。

紬「もう許してあげましょう？また、このような事をしたら、部長の座を降りて貰えばいいし。」

何気に厳しい事言つなムギ。まっ私も説教するのが疲れたし、流石の律もこんな事を起こしたら、もう下手にバカなことほしないだろ  
う。律を信じ

漣「…分かった。今回だけだぞ。」

律「はい！本当にすいませんでした。」

唯「よしよし。」 ナデナデ

律「ううっ  
∴ / / / / /」

唯は慰めのつもりか、律の頭を撫でた。

それから、再び練習を始めた。今回律は、嫌がらずに練習をした。

律「あゝ疲れた。」

紬「流石にね。」

漣「ああ。今日は、コレでおしまいにしよう。」

深夜を過ぎていた。コレは、やり過ぎか。

律「あゝあ明日帰るのか。もっと遊びたかったぜ。」

漣「十分遊んだんだろ。それに、数時間前には…。」

律「それは、言うな。イヤ言わないで下さい…。」

紬「フッフ。」

そんな会話をしていると

唯「あの…。」

律「んっ？どうした唯？」

唯「えっと…その…。」

唯は一呼吸置いて、口を開いた。

唯「…私…今日の為に、歌を…作ったんです…良かったら…聞いて欲しいな…って／＼／＼」

紬「へへ唯ちゃん歌作ったの？」

漣「でも今日の為って？」

唯「…初めて、皆さんが演奏した『翼をください』を聞かせて貰ったので…今度は、私が演奏する番だと思っただんです。」

律「別に聞かせた訳じゃ…。」

唯「それに…本ばかり読んでいた私を受け入れ、私を少しだけだけ、自信がついて来たんです。その…お礼も兼ねて…。」

漣「…唯。」

律「…よし。聞いてやるぞ。どのくらい上達したのか、部長として見てやるよ。」

紬「唯ちゃんの単独ライブね。」(REC)

漣「…唯。頑張って。」

唯「…。」コクン

唯が静かに頷くと、ギターを構え、演奏を始めた。

I believe

作詞・作曲 平沢唯(もし唯)

もしもシンデレラのような魔法使いが現れたら  
魔法で私の心を変えてよ  
そうよモジモジしたりオドオドもしない  
ポジティブな人になりたい私の願望

だけどそんな事は起きないよ  
だあてただの妄想だもん

そんな弱気だからいつまででも  
変える事なんて出来ない  
まるで宝を探す冒険家のように  
勇気を探している

見つけられるよね？ I believe my treasure

もしも白雪姫のように七人の小人がいるならば  
私の友達になつてくれるかな？  
だあて勇気がなけりや友達だあて  
いるわけないよね？実はそうなんです

勇気か友達が貰えるなら  
一体どっちが正解なの？

勇気があれば何でもできる  
友達だつてできる  
友達がいれば思い出と言う  
宝物が手に入るよ  
どっちでも正解だよ？ I believe my answer

セリフ

一人は男の子のような女の子で

一人はポワポワな女の子で

一人は綺麗で憧れの女子

それが私の……

私手に入れたよ

一生で一番の宝物を

手離さないよ絶対

どんな魔法使いがさらおうとしても

取り戻すさ I believe action

歌い終わると、唯は小さくお辞儀をした。

そして

律「唯…お前凄いな…オリジナルかよ。」

唯「はい。」

紬「とっても上手だったわ唯ちゃん。」

唯「ありがとうございます。」

律「途中のセリフの部分アレって…。」

唯「変でしたか？」

紬「ううん。良かったわ。」

律「まあな（男の子みたいな女の子か。）」

正直に言って、凄いしか言いようが無かった。ちゃんとギターも弾けていて、なお且つ弦を見ず、私達の方を向きながら演奏し、歌っていた。たった、4ヶ月で人は変わるものなのか？その時、私はようやく気付いた。唯の左手に

唯の左手は、見るだけで分かるぐらいにゴツゴツしていた。初めて、唯の手を見た時は、本当に女の子だと言えるぐらいに、繊細な手をしていた。なのに、ゴツゴツになるまでやるとは、かなり練習をしたんだろう。

澪「唯…ずいぶん…練習したんだな。」

唯「はい…だって…音楽…楽しいから。」

律「じゃあ、本を読むのと、どっちが好き？」

唯「それは…比べられません。」

律「ハハハハ。」

まっ何ともアレ、唯はギターの才能がある…イヤ…努力の才能と言った方がいいかもしれない。

才能は限界がある…だが、努力には限界はない（師匠の言葉）

紬「そう言えば…。」

律「どうしたムギ？」

紬「今練習している曲…歌詞ついていませんね…後、ボーカル決まっています。」

三人「「あっ!?!?」「」

律「…まっ…それは…帰ってからでいいんじゃない？」

漣「2ヶ月で出来るか？」

律「何とかなるだろ？ボーカルは、唯でいいんじゃない？」

唯「わ、私ですか!?!?!?!」

律「結構上手かったし。」

唯「…うう／／／／」

唯はまだ決断は、先になりそうだ。でも…良い声だった。それだけ言える。

唯の声を生かすためには、良い歌詞にしないと。

その後、私達はあつという間に床に着いた。疲れが溜まっているせいか、あつという間に眠りに落ちていた。チラッと横を見ると、唯が気持ちよさそうに眠っていた。歌って満足したのだろうか。

そう言えば…セリフの部分。一番目は律…二番目はムギ…って事は三番目の綺麗で憧れの女の子って…

漣「!?!?!」

恥ずかしくなつて、布団を被ってしまった。私の事だろうか?そんな事を考えながらも私も眠りに落ちた。

この合宿…色々あった…とっても楽しかった。寝る前にも唯が、合宿に誘ってくれてありがとうございますと言われた。合宿始めて…良かった。…本当に…楽しかったなあ。



こんな事を思っていたが… 4ヶ月後の私達が、今の私達を見たらこ  
う言うだろう

そうやって、笑っていられるのも今の内だと

合宿編 完

### 第36話 お礼の歌（後書き）

作者「良い子のみんな――――――集まれ――――

――――――！

ミニコーナーが、始まるよ――――――

――――――！」

シ――――――ン

作者「……さてっ今回のラインラップだ。」

律「開き直った。」

今回のラインラップ

- 1・戦隊ヒーロー談義 五星戦隊ダイレンジャー人物編
- 2・海賊戦隊ゴーカイジャーパロ

作者「さあ、元気に行ってみようー！」

戦隊ヒーロー談義『五星戦隊ヒーローダイレンジャーの人物編』

作者「前回からの引き続きで、五星戦隊ダイレンジャー。その人物にスポットライトをあてたいと思います。」

”天火星” 亮てんかせい・らうノリユウレンジャー

作者「本作の主人公で、スーツカラーはレッド。世界一の餃子を作ることを目指し、中華料理店で働きのツク見習いで、歳は23歳。5つ年下の妹の洋子がいて、紐男爵に襲われた所を龍星王に救われ、道士嘉翔に強引にダイレンジャーにスカウトされ、リユウレンジャーとなる。明確にダイレンジャーのリーダーと言う訳ではないが、熱血さと真面目さのバランスが取れており、他の4人からは新入りにも拘わらず、リーダー格として厚い信頼を得ている。得意拳法は赤龍拳（基になっている拳法は龍拳。パンチ技が主体となっていて赤龍双竜剣による二刀流と炎と雷を操る技を使う。得意技は「天火星・稲妻炎上破」。

ちなみに2011年公開の『海賊戦隊ゴーカイジャー』の劇場作品、『スーパー戦隊199ヒーロー大決戦』にも登場した。リユウレンジャーの変身能力を失った後も、中華料理人としての修行を続けており、「赤龍軒」という店で働きながら、世界一の餃子を作るという夢を目指している。……未だに、達成していなかったとは……。」

”天幻星” 大五 / シシレンジャー

作者「スーツカラーはグリーン。生き物を愛する24歳のペットシヨップ店員。釣りが趣味であり、暇さえあればよく釣り堀に出かけている。優しい性格で表情豊かな青年だが、その反面、感情に流されない冷静さを持っていて、孔雀明王の化身であるクジヤクと共鳴するだけの気力を持っていたことから道士嘉羽にスカウトされる。チーム内ではサブリーダー的存在。獅子拳（基になっている拳法は空手の基になったといわれる南拳。相手の攻撃をかわして反撃する）が得意。剣道の経験者なのでそれを応用した獅子棍棒による棒術を使い、また相手に痛みを伴う幻覚を見せる技を使う。得意技は『天幻星・霧隠れ』。」

”天重星” 将児 / テンマレンジャー

作者「スーツカラーはブルー。世界チャンピオンを夢見る19歳の駆け出しボクサー。母子家庭で育つ。ヤンキー風の外見に特攻服を持っているなど元暴走族らしいが、ボクシングと出会って更生した。一本気な性格であり、それが故に良く敵の罠に落ちる。その性格は最終回で登場した彼の孫も踏襲している。ボクサーとしての腕前はまだまだだが、むしろ5人中最強であるキック力を生かし、キック技を主体とする。天馬拳（基になった拳法は長拳）と、ボクサーらしい俊敏な動きを武器に、足技、天馬両節棍（天馬ヌンチャク）、重力を操る技を使って戦う。得意技は『天重星・重力逆転波』を使う。」

天時星” 知 / キリンレンジャー

作者「スーツカラーはイエロー。20歳の天才美容師。スポーツカーに乗るキザな気取り屋で、常におしゃれなスーツで決めている。一人称は「僕」だがたまに「ミー」になる事もあり、これは最終回で登場した彼の孫も踏襲している。家出同然で上京してきた時にお世話になったおばあちゃんのラーメン屋台を手伝ったりするなど、実は優しい男である。

走るスピードに優れ、麒麟拳（その名乗りポーズから明らかだが、基になっているのは醉拳）を駆使した攻防一体の攻めを得意とする。麒麟九節鞭きりんくせつべんというムチ状の武器と時間を操る技を使う。得意技は『天時星・時間返し。』を使う。」

天風星 リン（てんぷうせい） / ホウオウレンジャー

作者「スーツカラーはピンク。中国から日本の大学に来た18歳の留学生で、ダイレンジャーの紅一点。殆ど触れられていないが貧乳真面目で優しい性格であり、無理やり部屋に上がりこんできたコウを当初は拒絶していたが、後に考えを改めて彼と同居するようになる。その後は将児に「まるで母親」と言われるほど面倒を見ている。5人の中で最も気力が強く、中盤までは彼女が唯一轉身前でも気力を使う事が出来た。第1話では眼鏡をかけていた（厳密に言えば最終回に登場した孫も）。

身軽な動きで相手を翻弄する鳳凰拳を得意とし、中国風の槍・槍鳳やうほう鳳おうちと嵐を巻き起こす気力技を使う。得意技は『天風星・一文字竜巻。』を使う。」

作者「つ、疲れた…ここまで、書くのに…。しかし、改めて見ると、

ダイレンジャーは凄い。今の戦隊と比べると、その凄さがにじみ出て来る。最近では、変身したらスグに、武器を使うのに対し、ダイレンジャーは拳法の達人という設定だから、主に素手で戦うんだよね。それに、名乗りポーズも凄い。絶対子供は、真似が出来ない。（気になる人は動画を）」

確か変身が出来なくなってしまう話があった時は、5人とも変身せず、生身で名乗りのポーズをしていたっけ？スタントマンの人よりもキレがあったな。（えっ？どうでもいいから、早く唯達を出せって？はいはい。んじや続きますか。）」

作者「ゴーカイチェンジ！」

ゴー—————カイジャー—————

———！！

律「派手に行くぜ！」

律が先頭に、ゴミンの大群に突っ込んだ。

スゴ「あっアレは…賞金首の海賊共！おのれ…やれゴミン！」

ゴミンの大群は、5人に挑んできた。

5人は片方にゴーカイガンを持ち、もう片方にゴーカイサベルを持ち、ゴミン達を一掃して行った。

律「漣！」

漣「はいよ！」

律は、ゴーカイサベルを漣に投げ、漣はゴーカイガンを律に投げ  
お互い交換をした。

律「オラオラオラ。」

漣「せい、せい！」

律が2丁のゴーカイガンを乱射し、漣が2本のゴーカイサーベルが  
ゴミンを切り裂く。

梓「ムギ先輩！」

紬「承りました。」

梓とムギも武器を交換し、ゴーマンを蹴散らす。

しかし、ゴーマン達は、まだまだ出てくる。

純「あ、もう！ ウジャウジャとキリが無い。」

律「よっしゃアレ行くか？」

澪「アレか！」

純「アレね。」

梓「アレですか。」

紬「行きましょう。」

5人はゴーマンバイクからゴセイジャーのレンジャーキーを取り出す。

5人「ゴーマンチェンジ！」

ギンガマーーーーー  
-----  
ン

律「炎のたてがみ。」

律の手から凄まじい炎が放ち、ゴミン達を焼き尽くした。しかし、炎の出し過ぎか、辺りが激しく燃え始めた。

漣「遣り過ぎだ！流水の鼓動！」

地下から大量の水を噴き上がらせ火を消した。

純「おっ丁度いい。雷の雄叫び！」

純の手から雷が放電された。地面が、濡れているせいで更に雷の威力を上げた。

梓「ムギ先輩。一緒に行きましょう！」

紬「はい。」

梓「嵐のはばたき！」

紬「花びらの爪！」

爆発する花弁と竜巻が合わさり、ゴミン達を一掃した。

律「よし決めるぞ！」

ギンガマンからゴーカイジャーに戻り、ゴーカイガンにレンジャーキーをセットした。

ファイナルウェー………

一同「はあっ……！」

ファイナルウェーブが炸裂し、それを喰らったスゴミンは大爆発を起こした。

律「ヤレヤレ。しつけえ奴らだ。」

漣「でもほっとくわけには、いかないしな。」

純「でないと、宇宙最大のお宝が、奪われてしまいますしね。」

梓「それに…。」

紬「…この星だけでも救いたいです。」

律「そうだな。取り合えず戻るか。亀の予言も聞かなきゃならないし。」

5人はゴーカイガレオンへと、戻って行った。

物陰から、さっきまでの光景を見ている者がいた。

唯「アレが…宇宙海賊。…本当に、夢の中の人が言っていた通りだ。」

その手には、一つの機械と、一つのレンジャーキーを持っていた。

作者「お疲れ様です。」

一同「お疲れ様です。」

律「いや、テンション上がったわ。」

紬「本当。ライブとはまた別の快感が得られました。」

律「どうだ遷。やってて良かっただろ？」

遷「まあ…悪くわ無かった。」

作者「イヤイヤ。皆さん中々良かったですよ。他の戦隊ヒーローにも引けを取らない物でしたよ。」

唯「ちょっと!」

作者「んっどうした?」

唯「私、出番少なすぎるよ!美味しい役って言ったじゃん!」

作者「美味しいだろ?『謎の者が現る!』的な感じだっただろ?」

唯「私だって戦いたいよ!」

作者「だあぁもう、うるさい!コレでも付けてろ!」

メガネ装着

唯「あっ……………」。

透「ゆ、唯?」

唯「……………/ / / /」ペラッ

平沢唯…もし唯に、ゴーカイチェンジ。

作者「説明しよう。平沢唯は、メガネを付けると、もし唯へと変身を遂げるのである。」

律「そのメガネ…どうなっているんだ？」

作者「禁則事項です。」

紬「どこかで、聞いたセリフですね。」

作者「しばらく、唯はもし唯でいて貰うぜ。その方が静かだ。」

律「一応もし唯だもんな。」

作者「てなわけで、本編の方も合宿編が終了し、新たな展開へ迎える……予定。」

一同「予定かい!？」

作者「作者はいつでもノプラン。このお話もミニコーナーもノプラン! 予定した事と異なる事がございますので、ご了承ください。」

「

澪「作者がこんなんで、不安だ。」

紬「同感です。」

律「上に同じく。」

作者「次回もし唯！第37話 撫でたい！これからも宜しく！」

唯「……………コレ、前に読んだ事ある。」ペラッ

### 第37話 撫でたい！

律視点

まだ夏休み中。

あの夏合宿が終わって、早一週間過ぎたのに、まだまだ暑さが続いている。合宿の時も暑かったけど、テンションが上がっていたから、全然暑さなんて感じなかった。

一時のテンションで奴は、恐ろしい物だな。夏休みなのに聞わらず、学校へ登校するのは堪えるな。そう呟きながら、校門を潜り音楽室へ向かった。桜高際までもう日にちが無い、今日は皆で歌詞を考える重要な日。っていうか、三日前からやっているんだが、全く進んでいない。暑さのせい？…それとも…

642

ガチャ

律「おーす！」

ドアを開けると、そこには

唯「……。」「ペコリ

唯が既に到着していて、本を読んでいた。

律「唯だけか？」

唯「……。」「コクン

律「そうか。」

私は、唯の隣に座り顔を伏せた。このまま、寝よう。漣とムギが来るまでな。どうも、唯と二人つきりつてのは間が持たない。イヤ、決して唯の事が嫌いな訳じゃない。

もう少し、唯が明るかったらな…そうすれば、いい感じなるのにな。

……駄目だ。テンションの高い唯を想像したが、全く想像出来ん。大体、唯がテンション高くなる時っていつだ？合宿の時だって、高いつちや高かったが…それほど、高いつつという訳でもなかった。まっ大人しく本を読んでいるのが、唯らしいかもな。

唯「…あの…何ですか／＼／＼／？」

律「えっ？」

いつの間にか、唯をジツと見ていた私。その視線に気が付いた唯は、本でチヨコンと赤く染めた顔を出していた。

律「イヤ…えっと…唯の頭を撫でたいなって／＼／＼／」

何を口走っているんだ！とは言っても他に良い訳を出て来ないし

唯「ふえ！／＼／／」

驚いた唯は、本を落としそうになった。

唯「……………／＼／＼／／」

それから少しオドオドし、やがてスツと頭を私に下げ

唯「ど、どうぞ／＼／／」

いいのかい！別に、無理しなくてもそのまま本を読んでも良いのに。

…しかし、よくよく考えてみたら唯は結構滲に、頭を撫でられている。もしかしたら、唯も他の人に撫でられたいっと思っていたのか？いわゆる、マンネリって奴だ。…唯にそんな感情があるのか？私

から見た唯は、一度読んだ本を何回読み返すから、マンネリなんていう感情は無さそうに見える。

…だが、せつかく唯が良いって言ったんだ。お言葉に甘えよう。

律「じゃ…撫でるぞ。」

唯「…／＼／＼」コクン

私はユックリ唯の頭に手を乗せ、静かに撫でた。

ナデナデ

律「綺麗な髪だな。」ナデナデ

唯「そっそっですか？／＼／＼／」

律「ああ。手に吸いつく。」ナデナデ

唯「！？／＼／＼／」

唯はとつても恥ずかしそうな顔をしていた。溲よりも恥ずかしがっているな。そんな顔を見ていたら、イタズラしたくなっちまうじゃないか。

私は唯のヘアピンを取った。

唯「りっ、りっちゃん!？」

律「ちょっと待ってる。」

唯に見せないように、後ろ振り向きカチューシャを外し、髪を下ろした。

そして、唯がいつも同じ所に付けうっているヘアピンを付けた。

律「どうだ唯？」

唯「えっ?…わ、私!?!?!?!」

ナデナデナデ

律「どうだ?今唯は唯に撫でられているんだぞ?」ナデナデ

唯「へ、変な気分です?!?!?!」

律「フフフフ。イヤよイヤよも好きな内だぜ。」

唯「むうゝ?!?!?!」



唯「？」

私は引き出しからある物を出した。

律「コレだ。」

唯「なっ何ですかそれ？」

律「ネコ耳。」

唯「何でそんな物があるんですか？」

律「何でだろうね？」

唯「知らないんですか？」

律「まあそんな事は置いといて。付けてみるよ。」

唯「い、イヤです！／＼／＼／＼」

律「何で？」

唯「は、恥ずかしいからです／＼／＼／＼」

律「ハアゝ…唯。ここは、何部だ？」

唯「軽音部です。」

律「軽音部は何をするんだ？」

唯「演奏をする部です。」

律「ドコで演奏するんだ？」

唯「ステージ上っとか？」

律「ステージの下は、どうなっている？」

唯「人がいる。」

律「そうだ！人がたくさんいるんだぞ！」

唯「！」

律「大勢の前で演奏するのに、こんな程度で恥ずかしがってちゃ、演奏なんて出来るか！」

唯「そ、それは…。」

律「これは、唯の恥ずかしさを克服する特訓だ。」

唯「と、特訓？。」

律「そうだ！」

唯「…わ、分かりました／＼／＼／＼」

計画通り

律「んじゃ早速。」

唯「はい。」

唯は、おそろおそろネコ耳を装着した。ほほう…コレはなかなか。

しかし！ネコ耳を付けたのなら、アレをやってもらにゃならない

律「ホラッ唯。にゃあって言ってみろ。にゃあって。」

唯「うっ……にゃ……にゃあ／＼／＼／」

律「かわいいぞー！コノニヤロー　　！！／＼／＼／」だきっ

思わず、唯を抱きしめてしまった。

唯「ちょ、りっちゃん！？／＼／＼／」

律「コラ。唯は今、ネコなんだから、にゃあ以外禁止。」

唯「そ、そんな……にゃ、にゃあ／＼／＼／」

私が言う事に、忠実に従う。これは、マジでヤバイ。本物のネコのようだ。

何が間違っただろう。  
一体どこで？ちよつとした、  
イタズラ心だ

ったのに。

しばらく時間が経ったのに、唯はまだ、ネコ耳を付けていた。最初は恥ずかしかっていたのに、今ではスッキリ。

律「唯可愛いな。ホラツナデナデ。」

唯「にゃ〜ん〜ん」

楽しんでいた。うん、コレがテンションの上がった唯なのかもしれない。皆がない時には、たまにこっやって遊ぼうかな。私がそう考えていると。

唯「にゃあああああ」だきっ

律「ちよ、唯!?!?!?!」

私の胸に頬ずりをしてきた。更には私の頬をぺろぺろと舐めてきた。

律「ゆ、唯…く、くすぐりたい！／／／／／／」

唯「にゃんにゃん。「ペロペロ」

更には、私の耳たぶを甘噛みでペロペロと舐め始める。唯の愛撫で、私の体中に甘い痺れが置き始めた。

律「唯…もう…駄目…／／／／／／」

ドタ

ン

そのまま唯に押し倒されたように、椅子から落ちた。唯は構わず、私の頬を舐め続ける。

これは…合宿の時の王様ゲームの時よりもヤバイ。これは…誰もいない。

私と唯の二人だけ。このまま唯の快楽に溺れてしまおうか。そう思っていた。

そんな矢先

和「律。承諾書の書類……。」

律「…の、和…。」

和「すいません。間違えました。」

律「間違ってない！間違ってない！」

うん…唯の取り合扱いがまた一つ増えた。  
唯にネコ耳を付けてはならない。そして、お酒も飲ませてはいけ  
ない。

それからしばらく、和の目はまるで、哀れむような目で見られる事  
になった。



紬「ウフフフフ。良い動画撮れちゃった。ちゃんとラベルも貼って。」

『唯ちゃんとりっちゃんのにゃんにゃんタイム』

紬「本当に、この部入って良かった。」



紬「じゃあ、こっちにする」

律「どこの痛いキャラか!？」

作者「全く。スグに怒るから、人気投票でも…。」

律「うるせー!」

作者「ぎゃあああああ!」

作者さんが再起不能になられたので、ここで終了

紬「次回のもし唯。第38話 分析!お楽しみにね。」

透「アレ？私の出番、ここだけ？」

### 第38話 分析！

細視点

シヤラララン〜 シヤラララン〜

私は鼻唄を歌いながら、自分の部屋の整理をしていた。

細「ズイブン増えちゃったわ。今まで取った動画。」

軽音部に入部して、4ヶ月が経とうとしている。それまで、色々なドキドキな動画を取って来た

漣ちゃんとりっちゃんが絡み合っている動画に、唯ちゃんが本を読んでいる動画、漣ちゃんが唯ちゃんの頭をナデナデ集、この間の夏合宿の動画、唯ちゃんの単独ライブ。

そして、唯ちゃんとりっちゃんのにゃんにゃん時間（これが一番のお気に入り）

いっぱい増えて困っちゃうけど、ニヤニヤが止まらないわ。

細「あゝ明日は、どんな事が起きるのかな？」

毎日そう呟きながら、床についています。

シャラララン〜 シャラララン〜

鼻唄を歌いながら、意気揚々と階段を上っていく。

紬「こんにちわ。」

唯「……。」「ペコリ&読書中

紬「アラッ唯ちゃんだけ？」

唯「……。」「コクン

紬「待っててね。今お茶を淹れてあげるから。」

唯「ありがとうございます／＼／＼／」

カチャ カチャ……トポポポポポ

紬「はい、どうぞ。」

唯「ありがとうございます。」

紬「ケーキ持って来ているけど。」

唯「そ、それは…皆さんが、揃ってからで／＼／＼／＼／＼」

紬「そうね。」

…唯ちゃん…物欲しそうな顔をしているわ。でも、そう言ったら唯ちゃんの思いが、台無しだし、ここは黙って置こう。唯ちゃんは、ケーキの事を忘れるかのように、再び読書を始めた。結構分厚い本ね。

紬「ねえ唯ちゃん。何の本を読んでいるの？」

唯「グ、グリム童話集です／＼／＼／」

紬「へえ…今何の話読んでいるの？」

唯「白雪姫。」

紬「そうなんだ。」

唯「はい。」

紬「……。」

唯「……。」ペラッ

会話が続かない！…せっかく、唯ちゃんと二人つきりになれたのに、唯ちゃんはお構いなしに、本を読み続ける。でも、改めて唯ちゃんを見ると…本当に、美少女に分類する子だと思った。

お人形さんみたいな顔立ちで、キラツと光るメガネ。本を読んでいる時は、崩さない表情。

話す時は、明後日の方向を見ながら、しゃべり恥ずかしがっているけど、こういう時は普通の表情だわ。でも…あの単独ライブをしていた顔じゃない。あの顔は……

唯「あの…何ですか？／／／／／」

紬「えっ？」

いつの間にか、唯ちゃんをジューツと見ていたみたい。

紬「ん〜とね…唯ちゃんの観察？」

唯「ふえ！？／／／／／」

アラツ！可愛い反応。

紬「だから、唯ちゃんは気にせず本を読んで。」

唯「は、はあ…／／／」

ちよつと恥ずかしいのか、本で顔を隠す。いちいち可愛いわ。何でこんなに、可愛いのかしら？ヤツパリ、幼い容姿をして恥ずかしがったり、オドオドしたりするから『守ってあげたい』っという母性本能をくすぐるのから？だから、澪ちゃんも思わず唯ちゃんをナデナデするの？

アレ…そう言えば唯ちゃん。衣替えする前、確か毎日ずっとタイツを穿いていた！  
もしかして…唯ちゃんって…寒がり？

紬「えっ寒がりじゃないの？」

唯「ただ…穿くのが…好きだから…／／／／／」

紬「そう。」

…なぜ？聞こうとしたけど、コレ以上唯ちゃんの読書の邪魔はしたくないので、私も部屋に置いてある本棚から本を取り出し、本を読んだ。きつと読めば、唯ちゃんと本のお話ができるわ。

数十分後

唯「……くう」。寝オチ

アラアラ。唯ちゃんたら読書の体勢のまま、寝ちゃった。フッフフ  
可愛い寝顔。(REC)

そうだ。せつかくだし、唯ちゃんのメガネ無しバージョンを撮って  
置こう。

私が唯ちゃんのメガネに触れようとした時だった。

パシーーン

紬「えっ？」

一瞬何が起こったのか、分からなかった。だが、手の甲に痛みがしてきた。

私がメガネを取ろうとした時、唯ちゃんが私の手を叩いた。

紬「唯ちゃん…起きてるの？」

唯「：くう。」

帰って来るのは、安息ないびき。頭を撫でたり、髪に触れたり、頬をつつついてた。唯ちゃんは眠っていると確認出来た。

紬「もう一回。」

私は、メガネに触れようとした。

パチ　　ーン

紬「いたっ！」

再び、私の手を叩いた。

諦めずに素早く、唯ちゃんのメガネに手を伸ばし、何とかメガネを掴んだ。

ガシッ

すると、唯ちゃんは取られまいと、メガネを抑えた。

紬「……。」

メガネから手を離すと、唯ちゃんもメガネから手を離した。

紬「…唯ちゃん…ヤツパリ凄いわ。」

唯ちゃんは、眠っている時、メガネが奪われそうになると、眠りながら防衛反応を起こす。

恐るべし唯ちゃん。相当大事なのね…和ちゃんが選んだメガネ。

### 第38話 分析！（後書き）

作者のお願いのコーナー

律「タイトル変った！」

作者「今回だけだ。」

紬「お願いって、何のお願いなんですか？」

作者「その前に、幾つか話しておきたい事がある。」

律「えっ？」

作者「このSSのタイトル言ってみる。」

律「藪から棒に。」

紬「唐突ですね。」

作者「良いから言ってみる。」

律「もしも、平沢唯の性格が、あの消失の人みたいだったららの世界。」

「

紬「略して、もし唯。」

「

作者「そうだ。原作の唯を、あの人みたいに話だ。」

律「だから、メガネを掛けさせたり、性格をイジッたんだろ？」

作者「そう…お陰で、このSSのお気に入り数は、64だ。」

紬「結構多いですね。」

作者「そう…少なくとも64人の人は、読んでくれていると言っただ。」

作者「そこでだ！」

律「ズイブン溜めたな。」

作者「私は…今、コレを読んでいる人達にお願いを申す！」

紬「本題に入りましたね。」

作者「読んでいる人達に……」



同人誌を書いているサークルの人達がいたら…もし唯を…書いて下  
さい！ m ( | | ) m

律・紬「…と、とんでもない事を頼んだ。！！」

律「えっと…さ…何。つまり…もし唯を同人誌で書いて欲しいと？」

作者「そう言っただろ？」

紬「何でまた？」

作者「もし唯の唯は…メガネを掛けていて、恥ずかしがりやで読書好きという設定だ。書いている内にな…実際絵で見たくなっってしまったんだ。」

律「…なるほどね。」

作者「そして…もっと、もし唯の素晴らしさを一人でも多くの人に知って貰いたいんじゃない！」

紬「自分が書けば…良いんじゃない…。」

作者「絵は苦手なんだよ。」

律「人任せだな。」

作者「うるさい！それに、書いたとして、冬コミで売りに行ってみろ！作者の顔を見せる訳にもいかないんだよ。」

紬「まあ…一理ありますけど。」

作者「とにかく、コレを読んで『よし、描こう』『しょうがないな、描いてやるよ』『描きましよう、イヤ描かせて下さい』『別に…ア

ンタの為に、描くんじゃないんだからね』っていうお方！ぜひとも感想の方で、ご連絡下さい！お願いします。それで、冬コミに出すって方がいたら…絶対に買いに行きます。出来れば…全年齢対象で。」

律「まあ…無謀な事をしているかもしれないが…。」

紬「絶対っという訳でもありませんしね。」

作者「ご連絡…待ってます。もし唯…作者公認です。」

次回のもし唯は、第39話 幼馴染み視点！です。」

漣「またここだけ？…しかも、とんでもない事になってる…。」

### 第39話 幼馴染み視点！

唯「じゃあね和ちゃん。」

和「うん。部活頑張ってるね。」

唯「うん。」

ギターケースを背負って去っていく、唯の背中を見て行くと、私はどこかしら、寂しい気持ちになっていた。

唯変った。高校に入って、少しではなく大分だ。

唯「それで……りっちゃんがね……………漣ちゃんがね……………ムギちゃんがね……………」

最初の変化がこれだ。いつも唯が口を開くのは、本の事ばかりだった。

『図書館で新しい本が入って、夜ふかして全部読み終わっちゃった』『こんな本を見つけた』『さんの新刊が出るんだよ。楽しみ』『和ちゃんに、この本を貸してあげる。』

こんな事しか話せていなかった。初めて会った時も本を読んでいる子だから、当然と言ったら当然だ。だから、唯の口から友達という話が出てこようとはしなかった。

その唯が、友達の話をするようになった。次第に、音楽の話やケー

キの話などもするようになった。とても楽しそうに、言葉を弾ませ  
て。

次の変化が

女子1「ねえ平沢さん。」

唯「はい？何ですか？／＼／＼／＼／」

女子1「おススメの本とかある？」

唯「でしたら…／＼／＼／」

他の人と話せるようになった。まだ若干モジモジしているけど。以  
前は、話を掛けられても逃げたり、私に助けを求めていたあの子が  
…。

一番驚いた事だった。唯は変わった。イヤこんな言い方は酷い。

唯は…成長した。一步一步ずつ、階段を上るかのようになり成長をして  
いる。一段上がる事に、唯に試練が訪れるが、唯は逃げずやって来  
ている。だから、ここまで来れたんだ。

「お疲れ様です。明日も宜しく願いします。」

生徒会の役員の仕事が終わり、昇降口を出ると演奏が聞こえた。

和「まだやっているだ。」

もうすぐで、学際だもんね。そりゃそうね。呟きながら一人下校をする。歩いていると、あの場所へ来た。それは…入学式の時に、私が唯にあの言葉を言った場所。

和「唯…私の顔を見なさい。」

唯「……無理／＼／」

和「どうして？」

唯「…は、恥ずかしいモン／＼／」

和「ハア／＼…高校になってもそんな調子で行くつもり？」

唯「憂にも、同じ事言われたよ。」

和「誰だって、そう思うわよ。いい、唯？高校を卒業するまで私以外の友達を増やすか、何か新しい事を始めなさい！」

唯「ええ！」

和「読書ばかりしていても、友達なんて出来ないわよ。いいわね？」

唯「…う、うん。」

唯にとって全てが始まった場所。変ろうとした場所。あの時、言うておいて良かった半面後悔している。唯は軽音部に一生懸命だ。一生懸命になる分、私との距離が遠ざかっているような気が寂しいと思うようになってしまった。

分かっている。心配じゃない……これは……嫉妬だ。

和「バツカみたい。」

唯が一生懸命なんだ。唯はちゃんと、友達も新しい事も始めたんだ。なのに、私がこんな状態じゃ唯を心配させるだけじゃない。しっかりしない…真鍋和。

唯はちゃんと、アナタに感謝しているわ。でないと、今もあんな状

態のままだったかもしれない。自分がした事に、誇りを持ちなさい。

和「そうよね。」

そう呟き、家へ向かう。

これからも唯に、辛い試練が来るかもしれない。その時は唯。遠慮なく私に助けを求めたっていいのよ。だって…幼稚園からの幼馴染みなんだから。だから、唯が安心して私に相談できるように、私がしっかりしていないと。

それにね唯。アナタには私だけじゃなく、澪も律もムギも憂もいる。アナタは…一人じゃないんだから。

一生懸命頑張りなさい。

友は、一緒に語り合い、一緒に泣いて、一緒になって笑う。そうやって、生涯の宝物を一つづつ時間を掛けて、皆で作っていく。思い出と言つ宝を（師匠の言葉）

第39話 幼馴染み視点！（後書き）

律「なつ、ちよつといいか？」

作者「何？」

律「たまに出て来る師匠の言葉ってあるけどさ…どう言う人なんだ？」

紬「あつ私も知りたいです。」

作者「……。」

シュボ……フウ

（ 。 ） y } }

紬「はい、灰皿。」

作者「どうも…師匠はな。私にギターを教えてくれた人であり、人生と言う物を教えてくれた人だ。」

律「人生って。」

( 。 ) y ~ ~

絀「どうぞ。」

作者「私はな…ギターを始めるまでは、学も無く才も無い…ゴロツキだ。」

律「人に歴史あり。」

作者「楽しい事も無く、ただボ〜っと生きていた。」

絀「最初の頃の唯ちゃん見たいですね。」

作者「ああ…死んでいるのも同然だった。そんな時、師匠の演奏を見た。スゲーカッコ良くてさ…一瞬で憧れてしまった。そして、思い切って、ギターを教えて下さいと頼みこんだ。優しい笑顔で、OKをくれた。」

律「へえ〜。」

( 。 ) y ~ ~

作者「でも思ったり難しくってさ、思い通りにはならなくて、諦めかけた。やはり、自分には才能がないって。その時、師匠が言った。

」

師匠「この世は、出来る人と出来ない人で別れているんじゃない！諦めずにやる人と諦めてやめてしまう人で別れている。才能は…関係無い。」

作者「てよ。」

律「かつけえな。」

作者「ああ。カッコ良かった。だから諦めずにやって来た。ライブに出る時も師匠とやってさ、スゲえ 楽しかった。」

紬「それで、今その人と、どうしているんですか？」

律「組んでいるのか？」

作者「……………」。

） 。 （ ） y } }



作者「亡くなったよ……今年の…3月11日な。」

二人「えっ!?!」

作者「実家がさ、東北だよ。里帰りしていたんだ。そんな時に、起きたんだ。…起きて三日後に、死亡した欄に、名前が書いてあった。」

律「…ゴメン…辛い事聞いて。」

作者「いいさ。半年経つんだ。誰かに、聞いて欲しかったんだ。」

紬「…作者さん。」

作者「……最後に顔を見たのは、起きる2日前。デカイ地震が起き

たから、ちよつと様子を見て来て言つてさ。行つちまつたんだ…  
決して帰つて来ない…逝つちまつた。」

作者「出発する数時間前に、師匠と二人と組んでプロに行こうつて、  
そんな約束した。出来るんですかと聞いたたら……。」

師匠「自分を信じるからこそ頑張れるじゃない？」

作者「最後の格言だった。数カ月後に、師匠の家に行った。瓦礫の  
山で、撤去の手伝いをしていたら……師匠のギターが出て来た。傷  
も無くな。」

律「き、奇跡だな。」

作者「まさに、奇跡だ。ちよつと、弾いてみたら……泣いているよ  
うな音だった。自分の主人が死んじまつたんだからよ。師匠に返し  
たいんだが……親御さんが、私が持っていた方があの子も喜ぶつて  
言われて、譲り受けたんだ。」

紬「大事な形見なんですね。」

作者「ああ……。唯のギ 太みたいに、私もそのギターを師匠つて呼  
んでいるよ。」

（ 。 - ） y } }

作者「実は…師匠に聞かせようって、思って作った曲があるんだ…  
…聞かせる事もなく未発表になっちまった。だから…きいてくれね  
えか？」

律「…いいぜ。」

絢「聞かせて下さい。」

作者「ああ。…流石に、演奏が出来ないから、脳内で曲付けてく  
れ。」

キミト イタ ヒビ  
作詞 作曲 サツキ

ねえ…キミは今どこで何をしているの？

僕と一緒に見たこの空を眺めているのかな？

空は晴れていても僕の心は曇り空

蒼い空は綺麗だけど 心の色が蒼は駄目なんだよね？

キミト イタ ヒビく 忘れたい…忘れられない

携帯に映るキミの写真と名前

ボタン一つで消せるなら記憶も消してくれ

そう思いながら涙が頬から流れていた

空は晴れているのに雨が降り出している

『悲しみの雨』と名付けた

大声で大嫌いと呼んでみた

虚しさが木霊で帰って来た

『ゴメンね』と叫べば届くかなと淡い期待を持ちづける

キミ ガ イタカラくだからね…恋をするの

悲しい気持ちも楽しい気持ちも半分こにしてさ

一瞬の幸せを少しずつ 一緒に感じ合う

それが恋愛だと自分の辞書に書き込めた

セリフ

恋て言う字ってさ、赤と心で出来てるよね？

それじゃアイツのハートも真っ赤に染めようぜ  
ついでに…憎ったらしいフェイスも赤くしちゃおうぜ  
気を付けな…殴られて鼻から真っ赤なお花が咲いちゃうぜ

くりかし

作者「…ありがとうございます。」

律「…うん良かったよ。」パチパチ

紬「はい…とつても…。」パチパチ

作者「ワリイが…りっちゃん。流石に疲れた。次回予告頼む。」

律「おう。次回もし唯。第40話 なんやかんや!」



自分を信じよう。自分を信じるからこそ頑張れる。頑張るからこそ夢を追いかける。

夢を追いかけてよとするからこそ……命を大事にする。アレから半年が経つ。きっと元通りになることを私は信じている。

頑張ろう日本……イヤ……



頑張ろう…今を生きている人達。ここまで、読んでくれてありがとう  
うごかします  
b y サツキ

## 第40話 なんやかんや！

今回の話は、先に番外編を読んでから本編を読むのと、本編を読んでから番外編を読むのとで、受ける印象が変わります。どっちを選ぶかは、アナタの自由です。



律「イヤ、なんやかんやあつたけど……さわ子先生が、顧問になってくれて助かったな。」

透「ああ。…なんやかんや凄い人だったな。」

紬「本当。なんやかんや凄い人ですね。憧れちゃいます。」

唯「でも、りっちゃん。なんやかんや酷い交渉ですよ。」

律「まあいいだろ？顧問がいないと、部活として認められないんだぞ。だから、なんやかんや見た時、ピキ　　ンと来たぜ。」

漣「だからと言って、なんやかんやあんな事をするなよ。」

律「大丈夫。なんやかんや言っておきながら、快く引き受けてくれただろ？」

唯「（…りっちゃんなんやかんや言っている時、落ち込んでいたような気が…。）」「ペラッ

紬「それに、音楽の先生だから、なんやかんや教えてくれそうじゃない？」

漣「確かに、なんやかんやギター技術は、凄かったな。」

唯「（先生の性格もなんやかんや変って、怖かったけど）」「ペラッ

紬「今度、桜高際でやる曲を聞かせてみましょう？なんやかんやアドバイスしてくれますよ。」

律「そうだな。なんやかんや完璧じゃないからな。」

漣「なんやかんや言っているけど…歌詞どうするんだ？」

律「…各々がた、なんやかんやで良いから書いて来よう。」

唯「（なんやかんや…この人が部長なのが、不安だ。）」「ペラッ

桜高祭まで後3週間

第40話 なんやかんや！（後書き）

番外編

某日 地方裁判所 第2法廷

コ  
ン

純「ではこれより、被告人山中さわ子の審議を始めます。」

和「弁護側。準備整っております。」

作者「検察側。…元より。」

さわ子「って何で私が裁判にかけられているのよ!」

純「静粛に!」

さわ子「大体何よその格好。青いスーツと赤いスーツって…それどう見ても逆転…。」

純「それ以上言いますと、有罪判決を言い渡しますよ。」

和「（さわ子先生…かなり荒れているわ。）」

唯「さわちゃん大丈夫かな？口走って、とんでもない事を言いそう  
な気が…。」

和「…ありそうね。」

純「それでは、検察側。冒頭陳述を。」

作者「被告人山中さわ子は、三年前より秋山澗に対して、性的な暴  
行をし及び教師として有るまじき行為を多々行ったと起訴状に記載  
されています。」

さわ子「性的な暴行って…。」

バ  
ン

作者「被告人。今アナタには発言権は無い。発言の許可が下りるま  
では、その口を塞いでいて貰おうか？」

さわ子「分かったわよ。」

唯「さわちゃん…罰発寸前だよ。」

和「何としても耐える事を願うわ。」

作者「裁判長。被告人に暴行されたと言う被害者秋山澗氏を証人と  
して、入廷して貰いたい。」

純「分かりました。では、証人入廷して下さい。」

澪「秋山澪です。大学生です。」

作者「では、証人。何をされたのか、正直に話して下さい。」

澪「はい。」

和「（まずは、澪の証言を聞いて、作者の出方を見よう。）」

唯「和ちゃん…大丈夫？」

和「大丈夫よ…だって…私達の先生なんだから。」

証言開始

溼「三年前の秋。学園祭で演奏する服をどうするかって言う話があったんです。その時、さわ子先生が持って来たのは……  
うつつ…今でも思い出したくはありません。

ただ言える事は……私にとっては恥ずかしい服でした。  
私がそれを断ったら、無理矢理着させようと制服を脱がそうとしました。

それを…毎回のように…。」

作者「ありがとうございます。いかがですか裁判長？彼女はこの通り、精神的に傷を付けられました。コレ以上の審議は無意味です。さっさと判決を言い渡して下さい。」

待った!!

純「……。」

作者「……。」

和「まだ、尋問をしておりません。」

作者「尋問？無駄な事だな。」

和「しかし…こつちには、聞く権利があります。」

作者「権利があるうが、無かろうが覆せない。もしや、弁護人には覆せるそれなりの理由があつてこそその発言であろうな？」

唯「澪ちゃんは、嘘は付いていないし…付けないよ。とても覆せる所なんて」

和「逆転の発想よ。」

作者「なに？」

和「確かに、被告人は被害者の服を無理矢理脱がそうとしました…しかし、それは痴漢的行為なのかです。」

作者「…フツ良いだろう。気の済むまで聞いたら…ただし、進展が無ければ…その時には…。」

和「良いです。」

純「では、証人。質問に答えて下さい。」

漣「はい。」

尋問開始

和「…アナタが被告人に服を脱がされそうになった時、アナタは一人でしたか？」

漣「いえ。他の軽音部の人達もいました。」

和「それを証明できる人は？」

漣「同級生の田井中律に琴吹紬。後輩の中野梓。それに、和弁護士  
の隣にいる平沢唯も。」

和「唯本当？」

唯「うん居たよ。」

和「ではその時。その人達は、被告人を止めに入りましたか？」

漣「……いえ。助けに来ませんでした。まるで、当たり前かのように

に。  
「

和「つまり、軽音部の人達は痴漢的に見えなかった。これは、あくまでも服を着させようとした行為であり、性的暴行ではありません」  
「!

さわ子「さすが、真鍋さん！」

純「…確かに…スジは通っています…。」

異議あり!!

作者「残念だが弁護人。そうとは言い切れないのだよ。」

和「ど、どう言っ事?」

作者「こっちには、それを覆せる証拠品を持っている。」

これだ!!

和「それは……『けいおん!第一期の第10話』一体それに、何が映っているの?」

作者「それは……。」

そこだ!!

さわ子「しかし…髪を下ろすと見分けが付かないわね…あんた達。」

梓・澪「「えっ?」」

さわ子「ヤッパリ、ここは胸の大きさで!」

作者「…この後、被告人は殴られています。」

さわ子「ズイブン、懐かしい物掘り出してくれたわね。」

作者「さて。コレは、痴漢的ではないっと言うのかな?」

和「うっ。」

作者「更に、教師としては不適切な所があります。」

・ 澁が一年の時のライブの時、最後のアクシデント。被告人はよっしゃと言った。

・ 平沢唯氏の家に入法侵入（数回）

・ 勧誘の時、変な案を出し生徒達が逃げ出す

・ ムギのケーキで買収される。

・ 合宿面倒くさいと言っておきながら、海で泳ぐと聞いたら付いて来る。

・ ボーカルは喉が命なのを自分が一番知っているはずなのに、唯の喉を枯らせる

・ 5人を同じクラスにするように仕組んだ（職権乱用）

・ 新入部員にもコスプレさせようとする

作者「こうして見ると、酷い者ですな。」

異議あり！

和「全て、酷い者つと言つのは撤回するべきです。良い事だっています。」

・ 唯がマラソンで行方不明と聞くと、探しに行く。

- ・来るまで送り迎えをする。
- ・唯が来るまで、代わりに演奏をした。
- ・たくさんのHITのTシャツを一人で作る。

異議あり！

作者「ついに言っちゃったね。教師として、やってはいけない事を。」

和「どう言う意味？」

作者「たくさんのTシャツを作ると言いましたね。」

和「はい。」

唯「あれは驚いたな。さわちゃんに初めて驚かされたっけ？」

作者「アナタが先程仰った、逆転の発想を使わせていただきます。」

和「？」

作者「Tシャツ…裏を返せば、膨大な時間を使いましたね。」

和「そうよ。」

作者「いつでしたっけ？」

和「それは…私達が三年の頃…あっ！」

唯「どうしたの和ちゃん？」

和「……嵌められた。」

作者「フツ。その時には、被告人は、担当教師になっている。3年2組のね。その時、確か弁護士たちは、ロミオとジュリエットの演劇の練習をしていた。普通なら、色々サポートしなければならぬ。なのに、被告人は個人的にクラスの面倒を見ていなかった。」

唯「確かに、いなかったね。」

作者「更には、他のクラスにも手を出していた。さて本番で何が起きた？」

唯「あつ確か……。」

作者「墓石が無くて、裏ではパニック。何とかオカルト同好会に借り、一難を去ったが、自分達が使うはずだった墓石は確か……さわ子が手伝った出店にあったんじゃ？」

和・唯「……。」

作者「自分のクラスを面倒を見ず、ましてやパニックを起こす原因となった。更に、最近本誌で連載が再会しましたが、そっこのほうでも新入部員に、コスプレさせようとし、逃げられています。しかも自分で『クセが出ちゃった』って言っています。反省の色が無い



有罪

純「被告人は、『もしも、平沢唯の性格が、あの消失の人みたいだったらの世界』の本編出演を無期限の出演禁止とします。山中さわ子がどうしても必要な時は、名前及び山中さわ子が行った行為は「なんやかんや」で処理するように。以上。」

さわ子「ちょっと何よその判決は!!」

作者「次回もし唯。第41話 歌詞!お楽しみに。」

今回の話……マジで、すいませんm m  
「  
」  
m

## 第41話 歌詞！

トヨ~~~~~ン

擬音を付けるのなら、コレがピッタリだと思う。この擬音が、軽音部の部室に響き、更に暗雲が漂っていた。コレは、廃部寸前の時以來だと思う。なぜなら……

律「本番まで、後一週間……。」

紬「歌詞は未だに未完成。」

漣「由々しき事態だ。」

唯「……。」コクンコクン

学園祭まで一週間をほぼ切っている。それなのに、その肝心の曲が完成していない。ヤバイと言っている状態じゃない。

律「そこでだ。今日か明日までに、完成させたいと思うのだ！」

紬「そうですね。」

唯「……。」コクン

律「と言う訳で、今この場で、各自歌詞を書き一番良かったのを歌詞にしよう。意義は？」

紬「ありません。」

漣「同じく。」

唯「……。」「ブンブン

律「よっしゃ、作業開始！」

そして、私達はノートにペンを走らせた。しかし、数時間で出来る物なのか？プロの人だって、かなりの日数を掛けて作り上げるんだぞ。それに、私達はまだまだ素人だ。

バンドをやっている者として、スタートラインにすら立てているのか疑問を抱いている。

……………今は考えるのは止そう。一先ず作詞に集中しよう。

どんな歌詞にしようか？

カキカキ

カリカリ

スラスラ

クウ〜クウ〜

いつも笑いか、音楽しか響かない部室には、ペンを走らせる音しかない。試験中でもないのにな。でも、今この音は、必死さを感じる。

うん。皆一生懸命……………んっ？一つだけ、変な音がするな。

カキカキ

カリカリ

スラスラ

グォーグォー…もう無理。食べません。

ト

ン

律「あぎゃ!?!」

透「何寝ているんだお前は!?!」

律「イヤ〜頭を使うと、どうも眠気が。」

透「言い出しっぺのお前が寝てどうする。」

律「分かったよ。次は寝ないでやるからぞ。」

漣「次寝たら……。」

シャキ　ン

漣「頬に刺すぞ。」

律「い、イエッサ。」

言うまでもなく、3・4回は、頬にペンを刺す事になるが、それは別の話。

一時間後

律「ようし。途中までで良いから、発表と行こうか？」

漣「……部長……部長のノート涎で、読めませんか？」

律「何てこった！コレでは私が発表の出来ない。」

漣「……最初から書いていないだけだろ？」

律「m( \_ \_ ) m」

漣「いいよ。律に文才ないって知っているから。」

律「ヒドッ！？そういう、漣は出来ているのかよ。」

漣「モチロン。Aメロは出来ているよ。」

絢「凄い！見せて見せて。」

唯「……。」「ピョッ」

お察しの通り……あの曲です

律「…何か…背中が痒い。」

漣「どう言う意味だ？」

律「そのまんまだよ。」

紬「可愛いと思いますよ。」

律「（…可愛いって…なぜDOKI DOKIの所が英語？クマチ  
やんとウサちゃんって…。」

紬「良いと思いますよこの歌詞。」

唯「…良いです。」

律「（今日初めて喋った！）」

透「ありがとう。」

律「（まあ…無いよりはマシだな。最悪コレで…）んじゃ次はム  
ギ頼むぞ。」

紬「はい。どつぞ。」

ムギが書いた歌詞は、ムギらしさが出ていた。だが…歌う訳には行かなかった。

紬「どうして?」

透「この歌…ケーキが出来るまでの歌だよな？」

紬「はい。斬新と思わない？」

律「悪いなムギ…90年代のアニメであつたんだよ。確か、Aメロは、コロツケの作り方でBメロは、ナポリタンの歌だつたんだよ。」

紬「既にあつたんですか？」

懐かしいアニメだ。まだ歌えるかな？

律「コレ歌うと、ちょっとパクツた感じが出るんだよ。」

紬「そうですか…残念。」orz

落ち込むムギを慰めていると

クイクイ

唯が袖を引つ張つて来た。

唯「私が作った歌詞…見て下さい／＼／＼」

律「ほお〜どれどれ？」

唯が作った歌詞を見た。その曲は、既にAメロBメロが出来ていた。

紬「唯ちゃん…いいわコレ。」

唯「えっ？／＼／＼」

律「（漣のといい勝負だ…しかし、まだコツチの方が…）ああ。私も思う。」

律とムギは、絶賛だ。私も良いと思う。とても唯が書いたとは思えなかった。女の子らしさ歌だった。

漣「唯…この歌良いよ。」

唯「本当ですか？／＼／＼」

漣「うん。」

律「んじゃ満場一致と言っ訳で。」

紬「はい。」

歌詞も完成し、練習と行こうと思った時

唯「あの…ひとつお願いがあるんです。」

唯「私と漣ちゃん、歌いたいです。」

漣「えっ？」

「瞬間を言っているのかわからなかった。」

ミオチャント「ウタイインデス？」

律「おお。デュエットか？」

紬「いいですね。」

漣「む、ムリムリ！歌うなんて…唯の方が結構上手いじゃん！」

唯「…漣ちゃん。」

だきっ

漣「唯！／＼／＼」

唯「…りっちゃんは、ドラムだから歌う事が出来ません。全体の曲のリズムを取らないといけませんから。ムギちゃんは、この曲を作ってくれたのに、ボーカルまでやらせる訳にはいきません。残りは、私と澪ちゃんだけです。…澪ちゃんが恥ずかしがり屋だって事は、分かっています。でも…私だって恥ずかしいです。だって、大勢の前で演奏するんですよ。本しか読んでいなかった私ですよ。正直言って…怖いです。今にも逃げ出したいくらいです。」

澪「…唯。」

律「…唯。」

紬「(REC)」

更に唯は、抱きしめる力を強くした。

唯「……半分こにしましょうよ。半分こにすれば、怖くないですよ。」

澪「……。」

唯は…必死なんだ。ライブを成功させたいんだ。逃げたい…でも、必死にその羞恥心と闘っている。昔の唯が、今の唯をみたら驚くかもしれない。……唯が戦っているのに私は逃げるの秋山澪？

澪「…分かった。唯やろう。」

唯を思い切って抱きしめ返した。

本番まで後……6日

## 第41話 歌詞！（後書き）

9月11日の出来事

ガチャ

作者「ただいま…一人暮らしなのに、返事なんて来ないよな。はははは…。」

俺はパソコンを立ち上げる。もし唯を更新する為に

作者「えっと…下書きのノートは、ここだよな？えっと…この話だ。」

しばらく、パソコンに文字を打って行く。

ラジオ「さあ、たった今9月11日になりました。あの震災から半年が経ちました…。」

ラジオDJの声に気が付き、パソコンの手を止めた。

作者「…もう半年か…。」

時間が経つのは早い物であり、残酷な物だ。辛いことがあったのに、何もなかったかのように時間だけが進む。

ガラガラガラ

シュボ

(・。・) Y      } }  
。。

作者「フウ〜。」

ベランダに出て、タバコに火を点け一服入れた。あつという間に、一本を吸い終わると、もう一本吸おうと、火を付けた。

作者「半年…か。」

師匠『音楽好きに、悪人なんかいないよ』

唯のように、無邪気で

師匠『このライブが終わったら、焼肉で打ち上げだ！ビールも上手いぞ』

律のように、元気いっぱい

師匠『大丈夫。きつと出来るよ。』

紬のように、優しくて

師匠『諦めるなんて言葉は、一生懸命やった奴が言えるんだよ!』

澁のように、厳しくて

師匠『今のは、糖分が切れたから、合わなかっただけ』

梓のように、素直になれない人だった。

そんな人が……。

作者「フツ。」

俺は、押入れからギターを出した。別名『師匠』

作者「よう師匠。どうだい調子は？んっ？イヤちょっとな…前の主人が亡くなってね…半年が経つんだよ。だからさ…ちょっと協力してほしんだよ。良いだろ？」

俺は師匠を持って、河原へやって来た。

作者「夜に弾くなら、ここに限る。」

明日が十五夜だが、満月と言っても可笑しくは無い。草むらから聞こえる虫の音、傍に流れる川の音。この音は、まるで歓声に聞こえる。

作者「今日は、俺のライブに来てくれてありがとう。」

虫と川を客に見立てて、師匠を構えた。

作者「今日は、我々日本人にとって辛いことがあった、あの日から半年が経ちました。未だに残る爪痕…癒えない傷を持っているでしょう。俺も…ギターを教えてくれた人を亡くしました。もしかしたら…この中にも…俺のように人がいるかもしれませぬ。今日は、亡くなった人を捧げる為であり、元気づける為に一つの曲を作りました。どうか…聞いて下さい……………」

『 笑おうぜ 』

作詞 作曲 サッキ

笑おう笑おう笑おうぜ  
笑えば笑うほど幸せだよ  
サンサンサンサンサンサン  
太陽の光  
まぶしい笑顔を見せてよ

おこり顔 しかめっ面  
そんな顔じゃ幸せ逃げるよ  
楽しさと嬉しさが  
幸福の大好物さ

いつからだろう  
僕の中に夜が消えたのは

くりかえし

作り顔や愛想笑い  
そんな顔じゃ心は笑わない  
好きな人と大切な人でも  
そんな顔できるの？

踊ろう踊ろう踊ろうよ  
踊れば踊るほど心弾む  
ランランラン ランランラン

天使のラツパ  
明るい笑い声を響かせてよ

R A P

『 今日もニコニコ

明日もニコニコ

ニワトリさんはコケコッコ

鳴けばお日様はテツカテカ

あの子のスマイルはピツカピカ

スマイルはフリー

スイ ツはゼリー

ゼリーよりも大福だ

大福の中は、アンがギツシリ

お陰でお口はアンがビツシリ

アン付け過ぎてアンハッピー？

ダメダメアンはスグに拭って拭って

そうすれば…… HAPPYだーーーーー！』

くりかえし

演奏を終えると、何もなかったかのように俺は自宅へ戻った。

今回は…本当に辛いことがあった。でもいつまでも、沈んでいては駄目だ。でないと、いつまで経っても、この先、生きづらい。なおかつ、亡くなった人も悲しむ。

少しでも良い、この歌で明るくなって欲しい。明るくなるのは、笑顔が一番。人間だれしも笑っている時が、一番良い顔をする。だから…この曲を作った。

自宅に到着すると壁に師匠を立て、お祈りをした。

作者「……師匠。師匠が生きられなかった分、俺が生きて行きます。このギターと共に、世の中を見て生きて来ます。きつと…新しく組

む奴も現れるかもしれせん。その時は、楽しくやっつけていきます。だって…音楽好きに悪い奴は居ないんでしょ？どうか…天から見えて下さい。もし、結城凱（ジェットマンの人）のように、神様を口説いたら…その時はどうか、師匠の両親に会って下さい。俺は…夢の中で、会えればそれで良いんです。

俺の…ミラクルタイムって奴ですから。…俺が、師匠を忘れない限り、師匠はそこに生きていますから…安らかに眠って下さい…何を言っているんだ俺？

ああ、恥ずかしい。あくもついいや…寝ちゃおう寝ちゃおう。」

そう叫び、俺は眠り付いた。眠りに落ちる寸前、どこかしら『ありがとう』と聞こえたような気がした。

9月11日の出来事　なお、これは出来るだけ忠実に再現している。

次回もし唯。第42話　ライブ前日！コレからも頑張っていきます

（ハーン）　by サツキ

## 第42話 ライブ前日！

唯視点

唯「ハア〜」

家に帰ってから、何回くらいため息を吐いただろう？恐らく、数え切れないくらい吐いていたかもしれない。3桁は超えていると断言できる。

唯「…いよいよ…明日か。」

ベットに横になって、そう呟く。真っ暗の部屋の中、手探りで携帯を探し、手に取ると時刻表示を見た。既に日時変わっていた。

唯「…12時間後には、もう壇上に立っている頃かな？」

目を閉じ、12時間後の私を想像した。

唯「…怖い。」

人前で何かをやるなんて、今まで一度もなかった。ましてや、大勢の前で。

……大丈夫だよな。一生懸命練習してきたんだし……澪ちゃんは

手震えていたな。

りっちゃんは、いつもの通りに振舞っていたけど、若干ボ〜っと遠くを見ていたっけ？

ムギちゃんは、ピアノのコンクールに出た事があったから、それ程緊張はしていなかったけど、何回も入念に鍵盤を叩いていた。

唯「ハア〜寝れない。」

本を読もうとしたけど、合宿の時のような事を起こしかねない。だから、我慢した。  
その代わりに

グウ〜

唯「……お腹空いた。」

こんな時でも、お腹は空く。上着を羽織り、外へ出た。近くのコンビニに行っておにぎりでも……

唯「あつメガネ忘れた。…取り行くのメンドクサイ。」

いいや。どうせ、スグなんだし。ちょっと、ぼやけているけどそれ程は……

ありがとうございました。

おにぎりを2個購入し、近くの公園で食べようと思い、公園へ向かった。その公園は、昔和ちゃんと一緒に、良く遊んだ。中学の時もよくベンチで、一緒にアイスを食べたりしていた。でも…高校に入ってから一度も来ていない。

その公園に着くと、何にも変わっていなかった。私達は、もう高校生になったのに、公園は何にも変わっていない。ここだけ、時間が止まっているみたいだ。……思い出に浸ってないで、さっさと食べよう。私はベンチに座り、おにぎりを頬張った。

ゴミを捨て、家に戻ろうとした。その時ブランコが目に入った。昔よく、和ちゃんと遊んだっけ? …… ちょっとくらい良いよね? ど

うせ遅いんだし。

ギ〜コギ〜コ〜

足は付かなかったのに、今ではベツタリ。ブランコを小さく揺らしながら、明日の事を考えていた。

唯「……………。上手く出来るかな？」

そう呟いた。すると

？「どうしたの？元気がないね？」

唯「!？」

いつの間にか、隣のブランコを大きく揺らしている人がいた。ぼやけて良く見えないけど…女の人の声だった。

少女「どうしたの？大丈夫？」

唯「えつと…だ、大丈夫です／＼／＼」

少女「でも…顔が沈んでいるよ。」

唯「うつ／＼／＼」

少女「ウフフフ。思い切って話してみないよ。スッキリするよ。」

唯「……はい。」

私は、その人の言う通り明日の事を話した。

少女「フーン。明日文化祭なんだ？」

唯「はい。」

少女「しかも、始めてライブか……。」

唯「はい。」

少女「じゃあ明日は、デビューだね。」

唯「デビューってそんな大したもんじゃ……／＼／＼／」

少女「イヤイヤデビューだよ。……新しい自分がデビューするんだよ。」

唯「新しい……自分？」

少女「うん。だって、今まで本をしか読んで来なかったんでしょ？でも、そんな自分がギターの演奏をする。正に新しい自分へのデビューだよ。」

唯「……でも……怖いです。」

少女「最初は誰だってそうなんじゃない？」

唯「……。」

少女「始めて話を掛ける時だって、怖かったんじゃない？」

私は静かに頷いた。

少女「でも、今では信頼できる仲間が変わった。」

唯「……。」

少女「一人じゃない。信頼出来て大好きな友達がいるんだよ。」

唯「……！」

ぼやけて分からないけど、その人は笑いながら言った。

少女「舞台立つのは、一人じゃない。皆がいる。それに……一生懸命やって来たのなら、みんな分かってくれるよ。一生懸命練習したんだって。」

律「ゆい」

紬「唯ちゃん」

澪「唯」

唯「はい。」

少女「きつと聞こえるよ。演奏している時、皆の心の声。」

唯「心の声？」

少女「楽しい！とか…最高！とか…演奏していると皆の心の声が聞こえて来るんだよ。きつと、聞こえて来るよ。」

唯「本当ですか？」

少女「本当本当！明日になれば分かるよ。」

唯「はい…信じます。」

少女「よし。じゃ早くお家に帰りなよ。遅刻なんてシャレにならないよ。」

唯「はい。…あの…。」

少女「んっ？なあに？」

唯「もし良かったら…明日見に来てくれませんか？」

少女「うん…考えておくよ。」

唯「はい。…色々ありがとうございました。」

少女「バイバイ。」

唯「さようなら。」

その人と別れて、家へ戻った。上着を脱ぐと、上着のポケットに、500m?入ったペットボトルのお茶が入っていた。そのペットボトルに、マジックでファイト!と書かれていた。

唯「いつの間に…あっ名前聞くの忘れちゃった!…明日来てくれるかな?」

あの人…どこの誰なんだろう?改めてお礼が言いたい。だって、今凄く楽な気分だ。  
良く眠れそうだ。

唯「クウ〜。」

案の定、私は心地の良い夢の世界へ行った。…明日はいよいよ本番。

少女「頑張って……唯。フア〜眠いや。帰ろっ。」

テクテク

少女「きみをみてるよ、いつもハートはDOKI DOKI」  
ゆるゆるわふわ

テクテク



第42話 ライブ前日！（後書き）

律「大変だ！大変だ！」

紬「りっちゃん？」

漣「どうした。そんなに慌てて？」

律「作者が…作者が…。」

紬「作者さんが？」

漣「どうしたんだ？」

律「…本編のネタが尽きたって…。」

澪「…。」

紬「…。」



作者「あ j f d j く え w ・ り f く え w r g k t か k r ふ あ え お r f  
く お お れ く え r く お  
「

律「言葉にならないくらい、追いつめられている。」

紬「尋常じゃありませんね。」

漣「最悪の場合…打ちきり…。」

作者「よっしそうだ！」

律「おっネタが決まったみたいだ。」

作者「今日で終わりにしよう。」

律 漣 絢「「おーーーーー……………い!!!!!!」」

作者「アレ居たの？」

律「アレ居たの?…じゃねえよ!」

絢「勝手に終わりにしないで下さいよ!」

漣「メツチャクチャ中途半端だろ!」

作者「大丈夫。『唯達の物語は、まだまだ続く』って書くからさ。」

律「それ一番最悪な終わり方だろ?」

絢「打ちきり感が漂っていますよ。」

作者「だってさ…正直ここまで続くとは思わなかったし、感想もあんなに来るなんて…。」

律「それ程面白いんだよ。」

紬「皆期待しているんですよ。」

作者「ムリっすよ。自分そこまで、利口な人間じゃありませんので、ここ辺で終わりにしておけば、最近つまんなくなっただって言われるよりマシですよ。」

律「バツキヤロ

！！」

ドゴ

ン

作者「ビデブー——————！！！」

律「お前の今の姿。お師匠さんが、見たら悲しむぞ！」

作者「！！！」

紬「そうですね！簡単に逃げ出すような人じゃないって認めてくれたのに…情けないわ。」

作者「……。」

律「面白くなかったてさ。お前が一生懸命書けば、人から認められるんだよ！」



漣「何この茶番劇？」

次回予告して下さい。

漣「えっ私がするの？えっと…次回のもし唯は、第43話 本番2

時間前！です。えっと見てね。」

律「…「ド」？」

紬「シャボン玉がいっぱい浮かんでいますよ。」

作者「まさか…グランドラインの…。」

律「それ以上は言っな！」

第43話 本番2時間前！

ジャンジャンジャ~~~~ン

部室で一人、ベースを弾いて練習をしている。

唯、律、ムギは、それぞれのクラスで仕事をしているので、離れな  
いらしい。皆が来るまで、一人で練習。だけど、時間が進むにつれ  
て緊張は増し、手が震えて来る。  
単純なミスを連発してしまった。

漣「ハア〜。」

ベースを置き、落ち着かそうと椅子に座った。ボウ〜っとしていると

ガチャ

唯「こんにちわ。」

漣「唯！クラスの方は？」

唯「他の人と代わってくれました。」

漣「そうか。」

唯「……。」

唯は珍しく本を読まず、椅子に座っているだけだった。このまま、お互い黙ったままだと、余計に緊張が増すだけだ。ここは、会話をして気を紛らわそうと思い、唯に話を掛けた。

漣「唯…緊張している?」

唯「……。」

首を振るのは、いつも小さいが今日は一段と小さかった。

唯「……いよいよ…本番…ですね。」

漣「ああ。」

唯「……クスッ。」

唯が笑った。

漣「どうしたんだ唯?」

唯「…覚えていますか?半年前、あの文芸部で私が漣ちゃんに言った事?」



唯「諦めずにもう一人見つけて、軽音部を継続させて下さい…私も秋山さんの演奏を見てみたいです。」

漣「そんな…恥ずかしいし。」

唯「律さんは、知っているんですか？秋山さんが、恥ずかしがり屋だっただけのこと？」

漣「まあ一応。」

唯「…それでも必要とされているんですよ…私と違って。」

漣「えっ？」

唯「私は、本を読むぐらいしか能がありませんから…一度も誰からも必要とされた事がありません。でも秋山さんは、違う。信頼…出来るから…。」

漣「平沢さん！…そんな事言っな！」

唯「ふえ？／＼／＼／」

透 『誰も必要とされていない人なんて…絶対にいない。』

唯 『……。』

透 『平沢さんも必要としている人が居るぞ。』



漣 「私が平沢さんを必要としている。」  
□

漣「……ああ。覚えているよ。」

唯「あの時、漣ちゃんが、ああ言ってくれた時とっても嬉しかったです。」

漣「そうか。」

唯「漣ちゃん…私は今でも皆から必要とそされていますか？」

漣「モチロンだ。唯はギターも最初の頃よりも上達しているし、自分で作詞作曲も出来るようになったんだ……大事な軽音部の仲間であり…友達だ。」

唯「漣ちゃん。」

私がそう言つと、唯は立ち上がり私に抱きついて来た。

漣「唯！？／＼／＼／」

唯「ゴメンなさい…少しだけで良いですから…」つ居させて下さい。」

唯の体は震えていた。

漣「…唯…いいよ。」

私も唯を抱きしめ返した。抱きしめ返しても唯の震えは止まらない。私の唯の背中をスリスリと摩り

漣「大丈夫…大丈夫だ。」

唯「…怖いです。」

漣「大丈夫だ…半分こにするんだろ？」

唯「……はい。」

しばらく、私達は抱きしめ合い…お互いを励ました。そして、落ち着きを取り戻した。

漣「唯…全力で行こう。」

唯「はい。」

そうしていると

ガチャ

律「待たせたな！」

紬「お待たせしました。」

律とムギが来た。

第43話 本番2時間前！（後書き）

漣「…えっと…前回三人が走りだし、ドコかで迷子になっている為、私がこの担当をしろと言われたんだが…どうしよう。」

何でもいいから、話せ。

漣「そんな事言ったって…うん……」  
「…うん……」  
「…うん……」

「…割れ物とかを包むプチプチのシート。アレの本当の名前は『  
気泡緩衝シート』と言っただぞ。」

遷「次回もし唯。第44話 本番1時間前!です…唯補足頼む。」

唯「お弁当とかお寿司とかに入っている、草の形でペラペラしたアレの本当の名前は『バラン』と言います。」

## 第44話 本番1時間前！

律「遅れて悪かったな。」

紬「お待たせしました。」

本番を迎える一時間前で、ようやく全員そろった。私は間髪入れず、練習をするぞと言った。誰も反対する者はおらず、練習を開始した。

ジャ  
ン

律「うん今の中々良かったんじゃない？」

紬「うん。皆そろっていたわ。」

漣「良い感じだ。」

唯「……。」「コクン

律「よし、楽器を体育館に運ぼう。」

私もアンプを運ぼうとしたけど、律が疲れているように見えるから、休んでいると言われた。でも、有難かった。緊張のあまりか、手が震えていた。下手したら、落としていたかもしれない。



律「さっ行こうぜ。」

紬「うん。」

私達が、部室を出ようとした時

唯「漣ちゃん。」ギョ

唯が手を握って来た。

漣「どうした唯？」

唯「…頑張ろう。」

漣「うん。」

そう言い、部室を出た。

第44話 本番1時間前！（後書き）

予告

ついに、ライブを迎える唯達。

興奮と緊張は、最高潮。

果たして、演奏は上手くいくのか？

そして、澪が語る、ライブと同時に近づくアレとは、一体？

次回 もし唯。第45話 初ライブ！」

## 第45話 初ライブ！

私達が、体育館の裏に来ると、ステージでは合唱部が出ていた。隅  
つこでは、和と生徒会長さんが、進行をチェックしていた。

和「皆。」

律「よっ。」

和「いよいよ、本番が来たわね。」

紬「うん。」

和「唯。大丈夫？」

唯「……大丈夫。……皆がいるから。」

漣「唯。」

律「八八。照れるな。」

そう、談笑していると、合唱部の人達の発表が終わり、ついに私達  
の番が回って来た。

律「よっしや行くぞ。」

漣「ああ。」

紬「うん。」

唯「……／＼／＼」コクン

幕が下りている中で、私達は定位置に着いた。

そして、今か今かと思いつながら、私達は楽器を鳴らしていた。

唯「漣ちゃん。」

漣「何だ？」

唯「…グループ決めていませんでしたね。」

漣「………そう言えば。」

紬「決めていませんでしたね。」

律「まあ後日って事で。」

漣「一番重要な事を忘れていたな。」

紬「歌詞を考えるので、いっぱいだったからね。」

律「ハハハ。バカだな私達。」

紬「本当ね。」

漣「否定できない。」

唯「…クスッ。」

唯のお陰で、緊張が少しばかりが和らいだ。

そうしていると

『続きまして、軽音部の演奏です。』

アナウンスすると、幕がユックリ上がっていた。そこには、たくさんの人が敷き詰められていた。ウチの生徒の人もいれば、他校の生徒の人もいる。

漣「うっ…。」

やばい、また緊張してきたのか、足が震え始めた。今にでも逃げ出したい気持だった。

唯「澪ちゃん。」

唯の方を見ると

唯「半分…イヤ、4等分しよ？」

ニコツと笑っていた。唯の足も震えているのに

澪「…ああ。」

唯は…強くなった。初めて会った時よりも、私も強くないと、自分の心に誓いを立てた。その誓いが、まさかあんな所で、左右するなんて、夢にも思ってもいなかった。

そんな事に、露知らず演奏を始めた。

ツンでゴメンね

作詞 平沢唯

作曲 琴吹紬

『 』 唯 【 』 濤 「 』 二人

【優しい言葉とまぶしい笑顔に  
そっばを向いちゃうワタシです  
本当は嬉しいのに  
素直になれない自分が大嫌い】

『ゴメンねワタシ素直になれなくて  
』だけどアナタと居る時間が欲しいのよ  
』

「because I」

「寝ている時でも本を読んでいる時でも  
ワタシアナタに夢中  
アナタと共にする時間を一人占めにしたいよ  
ワガママなワタシです」

『いつも私はしかめっ面で  
笑顔を作れなくて  
優し言葉をかけたくても

トゲしか出せないのよこの口は  
』

【ゴメンねワタシいつもこんな調子で

本当はねアナタに思いを伝えたいのよ】

「 b e c a u s e I 」

「悲しい時でも寂しい時でも

アナタに会いたい

言いたい事も言えなくて

勇気もなくて

素直さもないワタシです」

【ゴメンね思う気持ち足りなくて】

『でもいつかは変わるよ

ちよつと素直なワタシに』

「 b e c a u s e I 」

「嵐が吹いても吹雪が来たって

何度でも立ちあがるよ

ほんの少しでも素直になるよ

思いを伝える為に」

「寝ている時でも本を読んでいる時でも

ワタシアナタに夢中

アナタと共にする時間を一人占めにしたいよ

素直になれないワタシです」

「悲しい時でも寂しい時でも

アナタに会いたい

ツンツンしちゃても I ' l l b e b a c k だ

アナタに好きだと叫びたい」

演奏している時、私達は、会話なんてしていないのに、皆の声が聞こえる。

律「漣。ベース良い感じだぞ。」

漣「律。ドラム走らせるなよ。」

律「分かってるよ。」

紬「大丈夫。ちゃんと合っているわ。」

律「そうか。」

唯「……。」

漣『どうした唯？黙り込んで？』

唯『…楽しいんです。今、私…とっても楽しいです。』

律『軽音部…入って良かったか？』

唯『はい。』

紬『ウフフ。唯ちゃんも漣ちゃんも、歌とっても上手。見てよ、盛り上がっているわ。』

唯『本当ですね。』

漣『緊張が、どこかに行っちゃったよ。』

律『私もだよ。』

紬『さっ、最後のサビに行きますよ。』

全員『おおおー！ー！ー！』

観客には決して聞こえない。私達にしか聞こえない会話。そんな会話をしながら、演奏をしていた。そして、演奏が終わると。辺りはシーンとなっていた。

それは、花火が上がった後に、音が聞こえて来るように、ドンドン拍手や歓声が講堂に響いた。鳴りやもうとしない音。それは、大成功を告げる音だった。

律「  
……。  
」

漣「……。」

紬「……。」

唯「……。」

部屋に戻り、椅子に座って呆然としていた。誰一人口を開こうとしない。皆余韻に浸っていた。

律「なあ。」

数分か数時間たったのか、分からないがようやく律が口を開いた。

律「大成功……だよな？」

唯「皆……喜んでいました。」

律「だよな？」

紬「拍手も歓声も凄かったわ。」

漣「……夢みたいだな。さっきまで、演奏していたなんて。」

律「ああ。本当にやっちゃまったんだよ私達。」

唯「……グズッ。」

唯は顔を伏せて泣いていた。律はそつと頭を撫でた。

律「唯泣くなつて。」ナデナデ

唯「だって…私…今までこういう事してこなかったから……。」「グズツ

律「私だって無いぞ。あんな人前で、漣だってそうだ。」

漣「ああ。無かった。」

紬「唯ちゃんカッコ良かったわ。」

唯「ありが…ございま…グズ。」

律「ああ泣くな泣くな。ホラツネコ耳付けるか？」

唯「いいです。」

漣「ハハハ。…皆記念写真撮ろう。」

律「そうだな。こんな素晴らしい日を忘れちゃいけないな。」

紬「ホラツ唯ちゃん。笑つて。」

唯「…はい。」クシクシ

唯は涙を拭ったが、若干目が赤くなっていた。戻るまで待とうかと思っただ、これもまた思い出の一つだ。

パシヤ

私達はとびつきりの笑顔で写真を取った。

数日後

ガチャ

漣「おーす。」

律「よっ。」

紬「こんにちは。」

唯「……。」「ペコリ

漣「写真が出来たぞ。」

律「おっ本当か？」

紬「見せて見せて。」

写真を机に置いた。

律「ハハハ。唯目が赤いぞ。」

唯「…… / / / / /」

紬「泣いていたもんね。」

唯「だって… / / / /」

漣「そう言うお前も律も若干涙目になっているぞ。」

律「あう見ないで。」

紬「ウフフフ。」

唯「クスクス。」

律「笑うな！」

律は二人を追い回した。

漣「ヤレヤレ。」

私は呆れ椅子に座って、三人の様子を見ていた。

バンドを始めて早半年が過ぎた。最初は、廃部寸前となっていた。律は強引に私とムギを部に入れ、後一人どうするか悩んでいたら、

唯も強引に引き入れるが、あくまでも人数合わせのためだけだった。しかし、唯もやりたいと、自分の気持ちをぶつけてきた。4人のグループへと変わった。まあお菓子を食べてお茶を飲むのがほとんどで、本当に大丈夫なのか不安だった。

だが、私達の絆は恐らく強いだろう。

文化祭が終わり、一つの目標は終わったが、この部は変わらない。

律がフザけていて、私がツッコミ、ムギが笑顔でお茶を淹れ、唯は本を黙々と読む。

それは、後輩が入ったとしても、ずっと変わらないだろうと思っていた。

だが……それが大きな間違いだと言う事が、しばらくして思い知る

B Y 秋山 澪

## 第45話 初ライブ！（後書き）

特報

文化祭をやり抜いた軽音部

いつまでも、このメンバーでやっていくと思っていた。

だが、そんな彼女たちに思いもしない事が起きる。

律「漣…これは、現実なのか。夢なのかよ？」

漣「私だって夢だって言いたい！でも…分からない。」

紬「……私達にどうしろと？」

軽音部にとって地獄を見る。

受け入れたくても受け入れない事実。

律「…どうしたらいいんだ？」

漣「…何とか言ってくれ！」

紬「お願いします。」

「一体何が起きたと言っのか？」

彼女達に一体何が襲ったのか？

もしも平沢唯の性格が、あの消失の人みたいだったらの世界…新シリーズ突入

第46話 最後のティータイム！

## 第46話 最後のティータイム！

桜校祭が終わり、早2ヶ月が過ぎ12月17日

紅葉は枯れ落ち、枯れ木になっていた。辺りも寒くなり、ちよつと息を吐いたら白い息になって行く。

ちなみに、白い息は北極や南極では、息は白くはならない。

なぜなら、白い息の正体は、空气中に漂うチリやホコリに張り付く。気温が低いために目に見える、

北極や南極では、チリやホコリがないため、白い息にはならない。

こんなに、目に見えるならかなり空気中に、ホコリが漂っているのだろう。相当、空気が汚れているのか？ハア〜……外から帰ったら、うがいをしないと喉を痛めるのも頷ける。

気温は低い、風が吹こうが吹かなくても肌が痛い。脚もスカートだから、スースーして寒い。

よくスカートの下に、ジャージを履いている者もいるが、みっともない格好になるから、私は履かない。……ただ一人除いて

「イヤ〜。ヤッパ寒いときには、ジャージを履くのに限るぜ、」

こいつね

漣「律。みつともないぞ。」

律「いいじゃん。履いている人結構いるぞ。」

やれやれ…恥じらいというのは無いのかコイツには。まあ幼馴染だから、コイツのことは大体分かるけど。

紬「はい。温かい紅茶が淹れましたよ。」

律「お来た来た。」

律は、紅茶に飛びついた。

紬「はい唯ちゃん。」

唯「ありがとうございます。」

唯は、相変わらず本を読んでいた。

透「唯。何の本を読んでいるんだ？」

唯「眠れる森の美女。」

律「これはまた、子供っぽい本だな。」

唯「でも…好きなんです。最後の王子様が、お姫様の眠りから覚ますところとか。」

透「唯は、王子様が出てくる話が好きなのか？」

唯「はい。小さい頃から、憧れていました。」

紬「それにしても、その本古めかしいね。」

唯「これは、小さい頃クリスマスプレゼントに貰ったんです。」

唯のクリスマスという単語に、律が反応した。

律「クリスマスか…よし、クリスマスパーティーやろうぜ！」

また、唐突だ

律「ちょうど、一週間後にイブだぜ！イブ！どうだ皆？」

紬「私、友達とパーティーするのが夢だったの」

ムギはノリノリだった。

唯「私も…やりたいです。」

唯も賛成だった。既に3人が、賛成しているから、私が反対したって無駄だろう。

律「澪は？」

澪「いいよ。やろう。」

律「おお！澪ちゃんもノリノリだな。」

漣「うるさい。それで、ドコでやるんだ？」

唯「私の家でやりませんか？」

漣「唯？」

唯「私、クリスマスケーキ作ります。」

律「おお！唯の挑戦か？」

唯「頑張ります。」

—  
そうやって、紅茶を飲みながら、皆でプレゼント交換をしたり、  
—  
発芸をするなどパーティーの計画を立てた。

帰り道

唯「和ちゃんも呼んでいいですか？」

律「人数は多い方がいいだろ？」

漣「お疲れパーティーの時に呼んでいたしな。」

唯「…楽しみですね。クリスマスパーティー。」

漣「そうだな。」

律「だな。」

別れ道がやって来た。

唯「それでも、私はこっちなので。」

唯は、去って行った。

平沢唯の姿を見るのが、コレが最後だった。

第46話 最後のティータイム！（後書き）

……秋山澪 田井中律 琴吹紬この3人にとって、笑えない……  
悪夢が始まる。

次回もし唯 第47話 12月18日！

第47話 12月18日！

律視点

ジリリリリリ

律「ハア〜さみい〜」

いい夢から、現実に叩き起こす悪夢の音が、部屋に鳴り響く。

この時期になると、布団から出たくなってしまう。

布団の中で着替えるか。

布団から出た後に、シャツが後ろ前逆に着てしまうことは、言ってもない。

さっさと朝飯を食い、登校をした。

登校をしている最中、私はフツと思った。

今日は12月18日。イブまで一週間で切った。

それと同時に、あることを思った。

以前、友達からある本を借りた。その本の主人公は12月18日になると、自分以外、世界中が改変されてしまった。ある宇宙人のエラーとかが原因と書いてあったような。

まあ取りあえず、それを読んで以来、私は12月18日になったら、改変されているんじゃないかと思うようになった。

例えば、私が知っている奴が、最初から居ない事になっていたり、性別が変わっていたりとか

まあ携帯を見ていたら、全員分の名前と番号があるし、別に体に変化はない。

そんなファンタジーなことは、起きる訳がないか

そんなことを呟きながら、学校へ向かっていった。

だが、まさかあんなことが起きるなんて、思わなかった。「冗談抜きで。

#### 細視点

紬「いい天気ねえ…ちょっと寒いけど。」

駅を出て、学校へ向かっている私。今日も放課後に食べるケーキを大切そうに持っている。

いつも、お客様からたくさんのお菓子を貰うが、友人の手釣りのお菓子は一度も食べたことはない。

だから、結衣ちゃんが作ると聞いたときは、嬉しかった。

本当に、クリスマスイブが楽しみ。

でも、なぜあんな事になったんだろう。

漫視点

いつもの朝、いつもの通学路、いつもの日常。

いつもの変わらない。だが、変わらない良さがある。往年の漫才師が、毎回同じネタをやっているが、それも変わらない良さがある。安心する。変わってほしいものもあれば、変わってほしくないものもある。

律の性格は、少し変わってほしいと思う、後、唯の恥ずかしがりな所も。

まあ、私も恥ずかしがり屋だから、言えたことじゃない。

いきなり、変わるのではなく、少しずつ変わっていけばいいのだ。

取りあえず、変わらない毎日に、安心感を抱いていた。

だが、その思いが覆された。

それは、放課後まではいつものと変わらない毎日だった。

放課後

私が部室へ行くと、部室には既に律とムギがいた。

律「よつ漣。」

紬「こんにちはわ。」

漣「唯は？」

律「掃除当番じゃね？」

紬「もう少しで、来ると思っから、お茶の準備をするね。」

律「おう頼むぜ。」

半年経つのにいつものと変わらない、放課後だ。

そう思っていた。

ガチャ

ドアが開き、唯が来たのだろうつと思った……だが

唯「やつほー皆！遅れてゴメンーン……！」

透律紬「!!!？」

一瞬私達は理解出来なかった。誰なんだと。

その声の主が、唯だと理解するのに、長い時間が掛かったような気がする。

そして、コレが私達の悪夢が始まった。

第47話 12月18日！（後書き）

平沢唯……読書好きで、おとなしくて内気な女子高校生。だが、軽音部に入部して以来、少しずつ変わっていくが、やっぱり大人しい所は、相変わらずだった。

そんな唯に異変が起きた。この異変が……まさか……

次回もし唯。第48話 残された3人！

## お知らせ

サッカーです。いつも、『もしも平沢唯の性格が、あの消失みみたいな感じだったらの世界』を見てくれてありがとうございます。皆さんの応援のおかげで、ここまで書いてきました。

そんな皆さんに、謝らなければならないことがあります。

実はしばらくの間、連載を休ませていただきます。

実は現在、入院しているんです。私にとって辛い事が起き、やはり少し精神的に病んでしまい、食欲も無く、十分な睡眠も取ることが出来ず、体を悪くしてしまいました。手が震えギターも弾けず辛い日々を送っています。この文字を打つもの、一苦勞です。

いつ戻ってこれるのか分かりません。でも、必ず元気になって帰ってきます。

皆さんが忘れたところにヒッソリと帰って来るかもしれない。

その時は、また目を通すぐらいで良いので、読んで下さい。

それでは、暫しのお別れです。

本当にすみません。

サッカー

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1033t/>

---

もしも、平沢唯の性格が、あの消失の人みたいだったらの世界

2011年10月26日14時09分発行